

川柳塔

平成十年二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻八四八号



白川協加盟

No. 848

同人特集・私の一句

一月号

『川柳塔』850号記念大会

と き 平成10年3月6日(金) 午前10時開場
ところ アウィーナ大阪(なにわ会館) 3階 葛城の間
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441
(地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車)

出句締切 正午(各題2句・欠席投句拝辞)

開 会 午後1時 披 講 午後2時

おはなし 川柳「塾」塾長 寺 尾 俊 平 氏

兼 題 「 門 」 木 本 朱 夏 選

「賑 や か」 野 口 節 子 選

「 腕 」 尼 れいじ 選

「 駅 」 両 川 洋 々 選

「誘 う」 田 辺 灸 六 選

「会 議」 波多野 五楽庵 選

「さくら」 ゲスト 時 実 新 子 選

「 丸 」 事前投句 橋 高 薫 風 選

閉 会 午後4時半予定

会 費 1500円

<懇親宴> 会費7000円(会席料理)

午後5時-7時半 アウィーナ大阪で開催

<宿 泊> アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

<翌日観光> 文楽劇場・第6回民俗芸能公演

「ふるさとの人形芝居」(岐阜県恵那・新潟県佐渡)

3500円

◎事前投句及び懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは
本誌最終ページの申込用紙に明記の上、2月10日
までに本社事務所宛おねがいたします。
御送金は同封の払込用紙でお願いします。

新春偶感

橘高 薫風

新年明けましておめでとうございます。平成十年戊寅の今年は私の当り年です。

虎に関することわざや名言の類を調べてみると、虎は日本には生息しない動物ですから、殆どが中国からの説話で、

「虎穴に入らずんば 虎子を得ず」

「前門の虎 後門の狼」

「虎の威をかる狐」

など人口に膾炙したものが沢山あります。

その中で私の心を引いたのは

苛政は虎よりも猛し

という『礼記』にある孔子に関わる伝記の一つで、次のような内容のものです。

孔子、泰山の側を過ぎりしとき、婦人墓に哭する者有りて哀し。夫子、式して之を聴き、子路をして之に問わしめて曰く、「子の哭するや、恚に重ねて憂有る者に似たり」と。而ち曰く、「然り、昔

者吾が舅虎に死し、吾が夫又死せり。今吾が子又死せり」と。夫子曰く、「何為れぞ去らざるや」と。曰く、「苛政無ければなり」と。夫子曰く、「小子之を識せ。苛政は虎よりも猛し」と。

その意味を述べるところです。

孔子が弟子たちを供に、泰山の裾を通りかかった時、一人の婦人が墓の前で激しく泣き悲しんでいた。孔子は弟子の子路に尋ねさせて言う。

「あなたの嘆く声を聞くと、それは何れも重なる憂き目に遇われたようですが、どうなさったのですか」

婦人は答える。

「おっしゃるとおりです。昔、私の舅が虎に食い殺されました。そして夫もおなじように死に、今また息子が虎のため命を失ったのです」

孔子が重ね尋ねる。

「どうしてそのような恐ろしい土地から離れようと思わないのですか」

「それはこの地にはむごい政治がないからでございます」

婦人の「苛政無ければなり」の一言にいたく感じ入った孔子は、弟子に諭す。

「お前たちもこのことをよく胸に刻んでおきなさい。むごい政治は庶民にとつて人食い虎よりも恐ろしいことなのだ」

苛政とは戦乱をはじめ苛酷な税の取り立てをいうのであろう。

さて新年に当り川柳塔社の運営を顧みて、改める点の多々あることを思うのです。先の婦人の言葉に相当する川柳塔社のテーゼは「和」です。

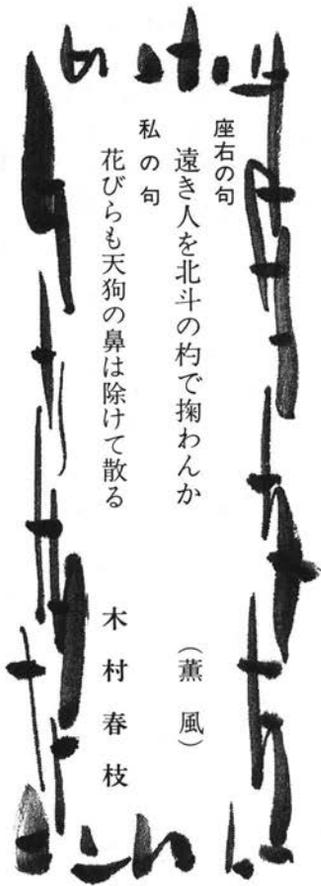
川柳から離れられない、川柳塔から離れられない人たちに親しみ深い私の存在でありたいと思います。

路郎先生が『川柳雑誌』を構成するうちの、石垣になる人たちを大切にしなければいけないと仰った精神を後進にもしかと伝えたく思っています。主幹も理事長も一人の精神で奉仕したいのです。

新役員による担当部署を別項に発表しましたが、地方の声を密にして頂きたく、本社も一地方として歓迎したく存じます。

川柳は五・七・五のリズム感とうがちを基本とするものだというのが、私の堅い信念です。

今年も右の基本によるあなた自身のまことの句を寄せられるよう願っています。



座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薰風)

私の句

花びらも天狗の鼻は除けて散る

木村春枝

川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

巻頭言 新春偶感

橋高薰風 …… (1)

もしかしたら風水?

八木千代 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

橋高薰風選 …… (4)

自選集

私的一句 (同人特集) …… (49)

川柳の群像 榎本聰夢

東野大八 …… (52)

古川柳歳時記 『万歳』

清博美 …… (66)

水煙抄

西田柳宏子選 …… (72)

秀句鑑賞

濱野奇童 …… (70)

同人吟

高田博泉 …… (119)

水煙抄

橋高薰風 …… (97)

大空のころろ (84)

もしかしたら風水?

八木千代



何といっても親からの古い家に住んでいますので、ローンの苦は無いかわりにまあ手を入れて手を入れて屋根、塀、排水溝(これが何故か両隣の水をみんな受け持つという類い稀な構造のままです)チョコチョコと絶え間なく修繕しているのですが、お陰様で隣家まで類焼した大火事にも無疵で生き残り、この大屋根に守られて歳を寄せました。

元氣なときは、目覚めるとすぐに南向きの広縁のサッシを開けて太陽の光を座敷に迎えます。少しくらい畳の色が変わろうが風と陽をいっぱいに頂きます。

東の小窓も北向きの窓ガラスも全部網戸にして回ります。勿論お風呂場もです。もともと台所と洗濯はだいき掃除は苦手という人間ですけど、安全と健康な暮らしのためにそれと多少は隣近所や来客への手前もあって余儀なく帯も雑巾もちます。

それでもいろいろの理由づけをしまして怠けることもわりとあるのです。

渺湖抄……………	八木千代選……………	(94)
茴香の花……………	宮西弥生選……………	(98)
「初」……………	蒔苗果林選……………	(100)
一路集「光」……………	松尾柳右子選……………	(100)
「なじむ」……………	横田英詩選……………	(101)
初歩教室「動く」……………	吐田公一……………	(102)
スペイン紀行……………	田中正坊……………	(104)
各地柳壇(佳句地十選/海老池 洋)……………		(106)
十二月本社句会……………		(120)
柳界展望……………		(124)
一月各地句会案内……………		(155)
■編集後記……………		(156)



座右の句

いのちまで見せて白魚透きとおり

(甲吉)

私の句

輝割れの手に刻まれた人生譜

西谷大吾



二時か三時には閉めてまわります。山陰という風土ですから湿度に気を遣います。外出時には身仕度よりも元栓と鍵かけの確認の數に時間がかかりますが、地方とはいえずと今時、いつでも危険に囲まれているのですから油断はできません。

もっとも「タダイマー」と明るく戻って来たものの、小さな門扉も玄関も二重に施錠しても縁側は見事に大きく開けっぱなしという不始末もたびたびというのではがっかりしてまあ何事もなくても、懺悔さんげです。

仏壇に向かい「開けるも大事、閉めるも大事」とこれも祖母の口癖を唱え、あとは南無々々と平謝りに謝るしかありません。

考えてみれば、こんな事もすべて親とその祖母たちの日常に感化されて繰り返しているだけで、私の世になんら進展のないのも事実で、子孫としましては悔しいではありませんか。一軒の家を保ってゆくことはどんなに大きな苦勞か、男の建てた家を長持ちさせる女としての役目もあるのは、幼いながら臍げに感じていました。

ところがここに於いて大発見です。もしかしてこれって風水ではなからうか？

あの天文方位曆学などを統計学にした中国伝来の「風水」の理につながるかもと。

ともかく風も気も入れて住みます。お仏壇の中まで陽がさして、何ともいい日和です。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

高槻市 川 島 諷云児

金婚へ歳月を繰る指を繰る(金婚を迎えて)

ジャンケンポン人生なんてこんなもの

人間という良心を持ち歩く

忘却の彼方に消えてゆく野望

後ろ向く悲しい癖が治らない

忠告を素直に受ける下り坂

和歌山市 牛 尾 緑 良

許したい許したくない娘の寝顔

笛吹いた男が抜けている会議

三代で洗う墓標や冬日和

ハンカチの一枚ほどの恋心

似顔絵が似ていないのでほっとする

花束のひとつを残す妻の胸

鳥取市 倉 益 一 瑤

三食昼寝 顔の渴きが怖くなり

鉢巻はポロポロ父の丸い背な

現実の向こうを歌う寂しがり

六畳に米寿の宇宙人がいる

菓子箱に重い話を詰めてゆく

ライバルに赤が似合って負けている

鳥取県 乾 喜与志

ありったけ財布叩いた酔いごこち

この年齢でこの足でよく歩けるな

ひや飯のおかけ白寿も近くなり

すばらしい日だな汗かき飯の味

札束に目が眩まない金庫番

粗塩を一杯着せた鮭の目よ

廿日市市 林野 甦光

正月も拘置所あたり賑やかで

一徹は代々続く帆前掛け

学殖の老人ひとり米を研ぎ

職退いた途端に顔が消えている

きのうも今日もテレビはソウメンばかり食べ

寝返れば場面が変わる朝の夢

島根県 堀江 正朗

生きている喜び自分の顔撫でて

手さぐりの意見 笑われても挑む

僕よりも確としている目玉焼

冬支度何時でも来いと雪を待つ

同じ趣味持つ友の手は温かい

年末の予定に僕もガラス拭き

西宮市 西口 いわゑ

大いなる嘘なんとなくすくわれる

一滴の水の中にもある宇宙

折りに触れきらりと光る姑だった

ピエロにもなれず聖人にもなれず

喧嘩する夫婦しあわせなんだとさ

歳月や我流で生きてきたふたり

羽曳野市 田中 透太

もう春のようにには描けぬ男の絵

長男も次男も同じ荷を担ぐ

もう一度会うたら名前聞くつもり

咲くまではあなた一人のものでした

十二月急いで歩くことはない

落葉焚く株の下落を聞きながら

和歌山市 福井 桂香

凧上がるひゆるり枯野の斜面より

目裏がしぐれはらはら冬の鳩

風上で嘘をばら撒くのは誰だ

くやしさに目深に被る冬帽子

背中にも視線を集めたい釘

サヨナラは言わずザクザク葱きざむ

倉敷市 小野 克枝

初風呂や孫三人と爺の首

褒められた芽が一番に花になる

生い立ちをなんども波に聞く人魚

折り鶴よ虹の高さに翺びたかろ

春来れば春の声して鳴くすずめ

終章の幕は光を抱いた白

豊中市 田中 正坊

五十年ひとすじの道 喜寿の春

ガウデーの曲線やさし遊歩道 (バルセロナ)

空あおく波おだやかに地中海 (アルカント)

ご対面エルグレコゴヤベラスケス (アラド美術館)

石橋を越えメルヘンのくにへ行く (トレド)

これがあのホテル・リッツという構え(マドリッド)

自画像に愕然とする老い深く

たった一言で去る愛とはなんだろう

決断をする日 中天晴れ渡り

不況風歩兵過労死するなかれ

骨休みしてゐるわたしを呼びすぎる

一人旅古寺にある魚板打つ

米子市 中井ゆき

音速を越えたら逢える人がいる

ひたむきに働きもして旅もして

地ビールときけばなんだか美味しそう

コスモスはまだ抜き切れぬあとと二輪

ひとことがとてもうれしい街の中

父に眉 母にもらった口許か

富山市 島 ひかる

風の子にいつも優しい母が棲む

少年の記憶に母の子守唄

帰省の子方言になる屠蘇を酌む

母の味心のひだに沁み込ませ

語らいが花の蕾をふくらませ

蛇行した川には川の唄がある

砂川市 大橋政良

一輪挿しのバラが笑ったいい電話

ポットから湯が出るマンネリに慣れる

この疵の負い目生涯つきまとう

譲られた椅子体温をありがと

平和だというのに何を祈ります

弘前市 斉藤 荔

追想の峰で山笛透き通り

倒木のいのちこもり苔を付け

もつといい夫婦でいたい旅枕

箱根の山は甘酒を飲みながら

一冊を購おう木枯し染みるから

弘前市 高瀬霜石

人に生まれてやつと半分だけひとに

幸福の数だけ増えてゆく白髪

老眼になってもピエロやっている

愕然とす僕の器の小ささに

難しいことはわからぬ酒にする

弘前市 櫻庭順三

毒舌を振るう貌してテングタケ

おぞましき籠に鎮座のテングタケ

真つ暗闇に光りに光るツキヨタケ

夜の蝶乱舞のようなツキヨタケ

可愛いねユウレイタケが名だなんて

弘前市 小寺花峯

古里つていい微笑む秋がある
シャワー全開ホテルの孤独熱すぎる

再会の約束だけの賀状なり
道草を雨のせいにしてたむ傘
リストラの波に揺れてる僕の舟

弘前市 相馬銀波

雨合羽こめにりんごに雨の中
自給率四割と聴き飯を食う
減反を乗り切る策は青刈りか
減反にどう立ち向う明日の米
鏡餅だけは大きくお正月

弘前市 中山雅城

今は秋岩木裾野は真っ赤です
紅玉の味は今年もははの味
冷蔵のりんご娘は可哀相
雅子妃の笑顔見られたりんご狩り
りんご園美空ひばりのロケの跡

黒石市 相馬一花

自分にも歳を偽り若く生き
てんぷらの揚げ方を聞く長電話
買取費たんまり使い落選す
麗人に注がれて下戸も口をつけ
宝くじ誰かが当たっているはずだ

弘前市 浅田隆樹

無残やな落葉に混じる不燃ゴミ
疲れにも惰性にも慣れ六合目
秋登山汗と鼻水競い合う
木枯らしが津軽訛りを重くする
柿の実がひとつ残って雪が降る

弘前市 蒔苗果林

一人出てりんご採る日の雨止まず
雨に採るりんご挙って泣きじやくる
喜寿の秋重いらんごに動転し
生涯に育んだりんご何個やろ
雪掃いてりんごの樹々に礼まわり

弘前市 一戸ツネ

万歳に酒の息する三番叟
八十路に登る階段霧の中
多情多恨ちよろちよろ燠火燃えてくる
正月料理省いても鳴る除夜の鐘
生命線じつくり見てるひとり酒

弘前市 佐治千加子

狩猟解禁 夜明け保護区へ飛べ鴨よ
鏡の底ある日きらりと亡夫の眉
親知らず抜歯のあとの風の味
初雪の駅は無口な人ばかり
猫昼寝 時ゆるやかに流れゆく

極北の恋と信じる片想い

弘前市 今 生恵子

ソムリエがぶどうの産地嘆き当てる

穴場告げずあの世できのこ狩るつもり

威を借りる虎がまわりに見当らず

ワープロの時代も通う書道塾

弘前市 岡 本花匠

バラバラでひと人になる晨朝祭

子も孫も幸せ揃う雑煮箸

団欒の笑福醸すこたつの輪

若水に生き生きとして老童子

カメラアイVサイン児のあどけなさ

弘前市 高 橋 岳水

凍天の星から届くちちの喝

明日という未知に触発されて生き

黄昏れて他人の情が身にしてみる

好きな絵を描き溜めて置く冬ごもり

頬杖の机上に並ぶ白い過去

八戸市 島 田 昭 治

ウツつきを駆け引き上手と賞めている

律義だと言われているが金が無し

聞き上手合いの手入れて盛りあげる

葬式はいつも前列供養のため

冥福と恋しさませて一周忌

徒手空拳出世払いに時効くる

書家先生なんと嘘字の多いこと

はどめなし何処まで落ちて眼を覚ます

六十路坂刈り取るものの有無を問う

退職後も先生と呼ばれ疑わず

青森県 西 谷 大 吾

地吹雪の下で津軽の新春芽吹く

地球儀を撫でて平和な新春を呼ぶ

だれよりも柏手だけは強く打つ

縄文の巨大木柱天を指す

終着の駅が吐き出す消耗品

仙台市 川 村 映 輝

元日は誕生日です九十四

淋しさは年毎に減る年賀状

元氣よし異性欲しいという便り

菊薫る蔵王は大きな雪だるま

内戦の国にも大統領が居る

町田市 竹 内 紫 鏞

二人三脚 老友の絵とわが駄文

父母に受く五指のみ無傷キーボード

電卓も使わぬ医師を頼りとす

主治医より長生きこれも恩返し

計算尺時代の学位まだ使う

横浜市 菱田満秋

七十になる正月もうれしいな
良い事の子感へ昇る初日の出
気配りの隅に魂胆埋めてある
再婚の二人が写真だけは撮り
頼もしいあなたが壘の蓋をあけ

横浜市 清水潮華

晴天が続き洗濯休めない
ダスキンに任せて主婦を手抜きする
焼魚買って一人の膳に乗せ
通勤のホームの位置は決めてある
日記帳ひとりよがりの青写真

横浜市 菊地政勝

京の美は静と控えめ京ことば
佇めば無限の無言竜安寺
湯どうふはおいしおすえと甘い声
おおきにと言われ釣銭置いてくる
お料理のレシビ集めが妻の趣味

横浜市 後藤早智

深い森都会のうつを浄化する
マネキンの服は買わぬと決めてある
症状はあって病名ない不安
風邪の床猫三匹に添寝され
病院の帰り輝く夕日見る

富士宮市 渥美弧秀

除夜の鐘聴き湯舟で初春の顔
初日の出瞬間今がどよめいて
三ヶ日賀状と暮す老夫婦
三ヶ日庄助さんでよか男
老いらくの血は沸き富士は夕映える

静岡県 蘭田 猷 杳

ハイキング開いたままの柚の小屋
めったには動かぬ魚ごつい鱈
枯蔓にしがみ着いてるからす瓜
柿の味紅葉晴に抱かれて
それぞれの思いで見てる美術展

羽咋市 三宅ろ亭

ブルが来てあたり建物潰し去る
神代から伝えし農も語り草
親の権威振れない末世の悲哀
わけあって無言の行をくり返す
八十翁打ち込む点の弱さ知る

富山市 酒井 輝

初詣で八十路を歩く辛を知る
札束が渦巻く底の知れぬ畏
慰める思いあがり疵を負い
核家族さえ縦割りになる暮らし
俺を引き当てたクジには弱い妻

富山市 舟渡杏花

野次馬にはこたえられない離婚沙汰
居眠り続くエルニーニョのせいだろか
卵が欲しくて親鶏殺したどうしよう
まぎれもなくめがねの奥にある慈眼
相槌がスラスラ体温上昇中

富山県 増田紗弓

胸というカーブやさしい風が吹く
やんわりというてもノーはノーである
雪月花愛でる年金とはならず
合掌の屋根を支える根太の幅
伝統のレシビを秘めるシェフの髭

大山市 早川盛夫

物忘れお前も齢をとったなあ
邪魔されて嬉しい妻の台所
いやあれは天の声だよ土砂くずれ
金で済む恐い時代を今生きる
有る物をみんな使ってナベにする

京都市 都倉求芽

政界に八方睨みの虎はいず
どの道をゆけどもトラの巻はない
虎の尾をもう踏みたくはない余生
虎の子の預金がひとつも子を産まぬ
ファックスも電話も賀状には勝てぬ

京都市 山海友熙

喪が明けて平成十年白い旅
おめでとう亡夫の声がする仏間
奥の間に亡夫の笑顔と古都の初春
青蓮院辺りで初春の風に逢う
さあ元氣出せと初春亡夫の声

京都市 大河未佐子

七五三 九月に祝う雪の国
三つ編が三つできたと孫の髪
やめとくれやす ここは擬宝珠京女(フランス風橋反対)
行列に馬の粗相のハブニング
床につき今日の幸せ数えます

京都府 稲葉冬葉

成人の孫にスーツが良く似合い
振りむけばおいでおいでをしてくれる
油汗出そう等身大鏡
人生はいろはかるたのようなもの
ぼろぼろになってもあなただけがすき

大阪市 河井庸佑

無意識の親の仕草も子は見つめ
有意義な一日心地よい眠り
明日のため今日のはのんびり過ごしてる
初釜の着物へ思案まとまらず
初出から遊ぶプランに飲む話

大阪市 川 端 一 步

赤ちゃんを十人見れば吉日ぞ

降参の頃合い見つけうまい酒

十聞いて反論ひとつだけを走る

六十の野心捨てずに走る朝

除夜の鐘平和の詩と飴する

大阪市 松 尾 柳 右 子

大小の年玉揃え除夜の鐘

初日の出三人三様夢を追う

初詣で晴着の娘等は姦しく

大トラが屏風抜け出しパチンコ屋

一年の苦勞晴着に化けました

大阪市 本 間 満 津 子

折りおりの挿話集めて一人の像

しゃべりとうて電話の用事ないかいな

バラバラぐらし集める磁石母が持ち

香焚いて薬に馴染む秋深く

五勺のお酒体調の良さ言いふらし

大阪市 町 田 達 子

銀杏散るちるまるで過去を払うごと

潔い落葉と対比人の世や

四条通へ孫に付き合うシヨッピング

代替りの故里から宅急便届く

やがて第九をポインセチアが炎えている

大阪市 神 夏 磯 典 子

日本晴つづき戦を忘れてる

お正月だけに食べたいものがなし

寒月や母の思いと娘の思い

ひと言を控えてからのいい空気

書道展自慢の文字が分からない

大阪市 小 糸 昭 子

ナアナアで済ましています車間距離

なめらかな口で相手を溶かしてる

雪の中華麗なダンス夫婦鶴

みの虫は袋の中で座禅する

目の前の一本道で迷うてる

大阪市 板 東 倫 子

御隠居と九官鳥が智恵くらべ

神さまも人間不信になる懺悔

シャイロックへ魂売った総会屋

たぶらかしたぶらかされて花と蝶

追憶の賛歌聞いている無銘の碑

大阪市 稻 本 凡 子

笑い皺に変えるバックをしておこう

公園に一人も居ない秋日和

娘から一泊旅の喜寿祝

孫曾孫揃う正月アツと過ぎ

座布団へ余情を置いて皆帰り

大阪市 大塚節子

にがり酒一杯舐めた酔い心地

今に残る奈良の氷室に曾祖母の名(碑)

山肌を見せた素顔の富士身軽

身延線帰りの富士は雲の中

コーヒ占い今日は金運吉と出た

大阪市 北 勝美

カタカナを漢字に直しわかる意味

四人目の曾孫も近し年の暮れ

木守柿三つ残した大和棟

春日野に哀愁おびた鹿の笛

瑣事一つ大事に生きて今日の幸

大阪市 津守柳伸

昭和一桁質素儉約旨とする

箒持つ作務衣黙々白い朝

待たされてカサプランカと睨めっこ

誘われるうちが花です旅カバン

役立たぬ写真ばかりのパスポート

大阪市 寺井東雲

大臣は名前がなまる英会話

金持ちはすぐにかかった欲の毘

難局にどえらい人が出る頃で

包装紙開きたいのは皆同じ

雪が舞い牡丹の鍋がこいしなる

大阪市 榎本路児

神様といたないないばーをして遊ぶ

人形も旅につれてく女の子

讚美歌の中に溶け込む悪もある

七十八いまだ乳房に憧れる

延命水妻よあんだも飲みなはれ

大阪市 井上白峰

何ごとでも無かったように陽は沈む

若い気で居ても跳べない水溜り

熟年の河童の皿が乾いてる

性懲りもなくポンコツのネジを巻く

老いてなお背伸びしている葱坊主

大阪市 渡部さと美

百八つの鐘の音くぐり無垢の朝

冬鳥の渡る自由へ初光り

虎よとら睨んでほしい政財医

カメラ設置スーパ―にまでマークされ

柿右衛門と同じ目で見る柿の色

大阪市 川内叭笑

春の海金波銀波が打ち寄せる

人の世は出逢いふれ合い語り合い

国内もまとも知らず海外へ

田も畑も家まで消える過疎の里

陽は昇る分け隔てなく新玉の

大阪市 小林周信

路地裏に名人がいる函の菊

野の菊が優しく咲いて仮設の灯

綱引きに太目の母が頼もしい

国寶へ一糸乱れぬ儀仗兵

無精ひげ水で濡らして剃る漁師

大阪市 福岡雅楓

ススキの穂ゆれて無常のすれちがい

バーチャルの世界で恋したキーの上

蟻糸晴れの姿は立ちあえず

ジャクジー風呂私も泡になる心地

コスモスは曲がつっていても好きな花

大阪市 田中節子

願望とうらはら絶えず生き恥を

松ぼっくりお前も寂し孤独の身

待つ人もなく旅路の果てのもの哀し

旅の中偶然出合うルノアール

言わずとも秘密を守る蜜の味

大阪市 辻川慶子

手のかたち亡母に似てくるわたしの手

若い人サイズの合わぬ服が好き

絵本よりファミコンほしい児等ばかり

いら立ちの少し和らぐ雨の音

すきやきのほんのひと口茶漬する

大阪市 中田あい子

バツタの子時雨をさけて菊の陰

あげ底の靴はくギャルの細い脚

迷いつつ産んだ末子が家業継ぐ

丹精の鉢は自慢の父の松

三日月に星がよりそう雁来月

大阪市 玉置英子

お酒飲む方が長生きとはうれし

また一年元気でいたい大根焚

うちにいる蠅取蜘蛛に子ができた

母の味に似てきた鮭の麴漬

目をやればガラスの椿またきらり

堺市 桑原道夫

ポケットの綿屑と冬確かめ合う

体温に近づいてきた文房具

公園の黄昏をゆく旅人よ

日曜のまぶしい朝を子がくれる

顔見世のまねきの前傾姿勢よし

堺市 楊井二南

好き嫌い多く空腹あきらめる

憶測を逞しゆうする高年期

衣替え気候不順でまともならず

年寄りの機嫌損ねた年賀状

暇つぶし漫画を見れば事が足る

堺市 柿花 紀美女

世相に添い老い懸命に今日を生き

秋時計計報が続くひとり居に

初曾孫この子の未来はや画く

過去の傷思い出してる遠花火

ひとときを昔乙女の同窓会

堺市 山本 半銭

御手洗の指の先から年新た

地下街を出れば新月中天に

老犬の生きる証のようになく

まどろみに聴こえてたのは何の笛

潮待ちの港を歩く一人旅

堺市 志田 千代

初詣で住吉さんの太鼓橋

もう一杯飲めば天あまのつゆめのみこと 鋼命かむな

春は曙 四季ある国の文の綾

しっかりと結んでくれた弁当箱

上り電車気付いた時は下り電車

高石市 浅野 房子

紅型のここは沖縄風の中

水牛に乗ってゆれてるブーゲンビリア

七色の夢におぼれて死ぬのかも

もう一人の自分と会った夢の中

白昼夢覚めてもしばしたゆととうて

豊中市 吉田 あずき

線香花火のように楓の空へ透け

石段に木の実紅葉の秋盛り

肩書のない蝶二匹楽しそう

つい家族の形で鳥を見てしまふ

スケジュール書いて平常心もどる

豊中市 湯浅 馬洗

初暦張り子の虎が見得を切る

初詣で虎の子渡し京の冷え

老いの愚痴行きつ戻りつ檻の虎

肩書とれ張り子の虎の癖残る

大往生虎の巻さがす古木屋

豊中市 滝北 博史

ミカン狩り妻のは全部甘いのに

西王母庭の椿に仙女の名

土ひねり友の骨壺ひき受ける

ふりむけば木枯しだった喜寿の坂

北新地から虎トラトラ虎

池田市 金崎 峰子

手ぬきして一人の夜は鮭茶漬

編物をやめられぬのは亡母似らし

コスモスの花咲くを待ち友と会う

御所 お寺 駅ビル同じ京都とは

考えて少々無理なほめことば

池田市 藤井計光

無粋なる技術屋さんもシャンが好き

声帯の潰れた易者それらしく

ベチャパイが男勝りの啖阿切る

福相でひとりもててる御仁です

目の下の隈にずるさをしのばせる

箕面市 岩津 ようじ

頂点に立って一寸先は闇

赤い露ポストの上でかしまる

みごもったのも売りものになるスター

煩惱の残ってる間に逝かんかな

安いなあ安い安いと買う気なし

吹田市 山本 希久子

秋晴れや唐津人情あたたかし

秋祭りこんなにもいた若い人

平成十年と書く初日記

検査結果待ち雨を待ち秋暮れる

少雨良し少雨哀しい木守り柿

吹田市 栗谷 春子

ひととせは何でもないと思いきや

干し終えておまんさがしてお茶いれて

老いたれど美はあこがれよつましく

笑われてほほけて私いまピエロ

あさはかな脳死志望はやめにする

吹田市 瀬戸 まさよ

不足分背負わず政治ああ庶民

若者の造語はかなき命です

妻にだけ気儘甘える病気です

医者嫌いついに救急車の世話に

定年後ビル街歩き若返る

吹田市 茂見 よ志子

風車舞い花の絨緞夢の街(ハウスステンボス)

グラバー邸懐かし三浦環像

旅疲れ雲仙の湯で癒やす夜

熊本城夫の蘊蓄聞かされる

秋晴へ傘が荷物に旅帰る

吹田市 石原 靖巳

古時計のネジ巻き直す大晦日

寅年へ意地を見せるかタイガース

イントロが出たら度胸でやってみる

来世紀よろしく頼む茶髪殿

少年Aがもしもわが子であつたなら

茨木市 堀 良江

ちぎり紙重ねたように山の秋

ほんそこに陛下お二人開始式

温いもの食べたならなぜか気が和む

秋日和エルニーニョには困るけど

ジョギングよウォーキングよと齢を取る

茨木市 藤井正雄

元旦の誓い惚れ惚れする日記

足の裏孫がはしゃいで踏んでくれ

ゴキブリが知ってる母の凄顔

しかる医者横の看護婦笑ってる

先生の方が夢中なドッジボール

茨木市 井上森生

早起きに今日一日の陽が昇る

九十婆またも私にお小遣い

十月の月は円熟無傷の輪

感謝和顔長寿の顔にふさわしい

玄人の缺で挑む庭の松

茨木市 島元ふみ

曾孫に年玉上げる果報かな

家族の中に期待と不安変わり種

泣きごとを言わぬお人で疲れます

今日までの借り払いますフルムーン

デーケアの看護士美男に在します

高槻市 井上照子

自由の身自己を忘れて遊べたら

万歩計つけてタクシーあてにする

鏡よ鏡たまには虚像でいい

捨てられぬゴミの正体過去の恋

お抹茶とまんじゅう女日が暮れる

高槻市 芦田静江

随門に水安かれと若き僧

千宗室たちばな香る空の青

勘亭流京たそがれて春にする

モノクロの縞にファッション生きてくる

茶の心雨の水無瀬の献茶祭

守口市 結城君子

萩の寺盛り過ぎたる静けさや

散り急ぐことはないのよ公孫樹の黄

行けども行けども芒と出合う大和路よ

ならまち散策 家の骨董思い出し

おとなりの奈良と京ゆばこの違い

守口市 森川まさお

四つ角でみなと別れて首寒し

大阪に近付けば山低くなる

入歯にもサクリ大和の富有柿

のれん分け奈良町の土産少しだけ

日本庭園整いすぎてよそよそし

寝屋川市 江口度

釣り針の見えがくれするコマージュ

マンションの窓から個性消えていく

また鎖国やってみたらと思う日も

熱下がりいつもの音で時計鳴る

列島の歴史トンボに聞いてみる

寝屋川市 柴田 英壬子
年に一二度サイコロステーキを食べる

太極拳の息がわたしに続かない
金盞花仏のころ癒やす彩
結構なお住居木賊植えてはる
新札に添えた言葉にはげまされ

寝屋川市 堀江 光子

コスモスの径を通過して秋がくる
悪役もその身の香る菊人形
秋深い京極の灯をいそぎ足
内陣の秋ひいやりと秘仏笑む
ひいやりと長い廊下を野天風呂

寝屋川市 平松 かすみ

着膨れて幸せを待つカレンダー
本家みなご無事で届く祭ずし
さんま寿司好物だったご仏前
仏様ざくろお好きか盛ってあり(根米寺)
尊厳死冗談でなく貸金庫

寝屋川市 岸野 あやめ

私にも元氣わけてと寅の年
来る年へ新しくする住所録
少年よ大志を持ってとアトム君
若いっていいねカップル初詣で
祝い膳ひとり迎えるお正月

寝屋川市 坂上 高栄
ゆずられて着太りの席小さく掛け
千載の一遇 富士の素顔見ゆ
クラクシヨンどうやら怒ってはるらしい

追い越せぬ影を追ってる白昼夢
信号無視きつと命のいらぬ人

寝屋川市 太田 とし子

パジャマ着てそこで主の顔になる
柏手が一番大きな受験生
泣き笑いごつちやな顔で立つポスト
冗談の続きも乗り込む特急車
冬の陽が心ならずもずれてくる

寝屋川市 北岡 波留吉

当り年祝って猛虎にもお神酒
初孫に妻を取られて寝正月
正月だけ自由にしてと恐妻家
お雑煮の湯気が今年の幕開ける
宇宙から電波に乗って年賀状

寝屋川市 後藤 黎之助

昭和史を語る残留孤児の皺
結び目を一寸ゆるめたお付合い
焚火した火種消し合う老夫婦
孫の守り妻に逃げ道おしえられ
菊人形人間にする菊師たち

寝屋川市 富山 ルイ子

何時も娘と間違えられる電話口

川柳を焼付けた皿贈られる

老母何時も見舞う柳友あり有難し

年女老母九十六になり給う

お守りを送る百までを祈りつつ

寝屋川市 森 茜

マンシヨンの窓に夕日が嵌まっている

比叡山からくつついてきたかたつむり

叫びそう起きたばかりの三面鏡

喧嘩して帰ったはずがピンポーン

お宮さん通り抜けたらビルラッシュ

寝屋川市 籠島 恵子

買ったばかりにおいしくなつてゆくりんこ

銀杏をたんと入れてと茶碗むし

思ひ出す顔は笑顔の方がよい

貧しいな誉める言葉が見つかからぬ

なにごともないかのように散る紅葉

寝屋川市 酒井 勇太郎

万歩計ノルマを阻む排気ガス

パソコンをなまじ使えて頼まれる

年金が帯に化けてる七五三

エリツインの笑顔も読めぬ腹の内

盲点を妻がやんわり突いてくる

枚方市 八田 敏

古希過ぎて終の住処を出る運命

車椅子押す老夫婦待つ新居

男手が大根を煮る秋夜更け

鉢植の銀杏が威張る庭の秋

つわぶきを南天覗き込む小庭

枚方市 森 本節子

早朝のひとり歩きに鹿が寄る(奈良にて)

朝もやの五重塔に感嘆す

四天王なかにもひかれる広目天

花過ぎた萩にも似合う元興寺

そぞろ歩く秋のならまち寺のかず

枚方市 海老池 洋

神様へ揉み手で頼みたいことも

男には涙を溶かす酒がある

同情へないとは言えぬ好奇心

約束を守る男がまだ来ない

灯台を探しあぐねている霧笛

交野市 福崎 しげお

天皇が間近に国体菊薫る

ほんやりと灯が見えた北の島

つけものが目刺しがうまい旅帰り

晩成に遠く囑託朝の靴

ブロンプター付きかおしやまな孫のTEL

東大阪市 森 下 愛 論

ベランダの緑にばさばさ鳥の恋

読めぬ碑の石に言問う風の中

風鈴の糸のもつれも秋さらり

我が酒のあてにコオロギ鳴く夜長

萩揺れる飲める女と小道ゆく

東大阪市 安 永 暁 子

平和しみじみ空間にみる京都駅

若者ばかり老いの仲間がまごまごと

そのうちに南座高いビルの中

おいでやと花火を上げて文化祭

もみじ狩まけじと燃える姥ざくら

東大阪市 指 宿 千 枝 子

リスボンの夜景千万弗に見ゆ

リスボンの焼き栗を食べ損ねた夜

憧れのナザレで鯛二匹食べ

雨に濡れナザレの浜にかもめと居

遂に来た此処は地の果てロカ岬

藤井寺市 吉 岡 美 房

溪谷の紅葉にあつた自己主張

枯葉舞い怒濤の如き冬が来る

独身は気楽だろうに逆らわず

賽銭をけちった財布すられけり

子に見せるほどの背中を探してる

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

ふぐ刺しもわたしも冬に透き通り

地に足をつけた恋なら恋でなし

恋ごころ泡と吐き出す蟹の居て

目を閉じて猫も愛撫に身じろぎぬ

人知れず我が身の弦をかき鳴らす

松原市 小 池 し げ お

先ず父に報告がある箱の酒

橋の長さを言わないこととしてやろう

三度目に逢うた鬼には角が無い

此処からはライバルとなる差し向い

愛されていると信じている軒

松原市 玉 置 重 人

ああ長寿ああ病院の待ち時間

野暮天で女結びがほどけない

柿みかんうれしい秋のホトケ様

おしゃれして恋でもしよう喜寿の春

タクシーに連れて来られた割りこそば

羽曳野市 酒 井 一 壺

へソクリを数えるときに部屋閉める

世界共通10個の数字すばらしい

枢焼くカマにもついている数字

子供づれ食べたい寿司がきまらない

落ち着かぬ回転寿司へ味が無い

白紙一枚決断を迫られる

だしぬけに冬が届いたこぼれ萩

鏡の裏にわたしに似てる鬼がいる

一枚のカルテと長い道づれに

保釈金罪を抹消したつもり

羽曳野市 福田満州

甘辛しゃんイントネーション気にかかり

木犀の香と父の忌がはや巡り

稲の穂が刈り株に出た暖かさ

白髪だとティッシュ配りに無視をされ

スピード出し過ぎカーナビ間に合わず

岸和田市 芳地狸村

楊貴妃の観音様がお出迎え(泉涌寺)

紅葉が赤絨氈の臥雲橋(東福寺)

主役より母が着飾る七五三

神様の顔がくずれる七五三

かあちゃんをはらはらさせる女文字

岸和田市 古野ひで

秋風へ古寺巡礼を思い立ち

言わぬが花 花の心のいさぎよさ

ひと言のつけが重たくのしかかり

にこにこ気安くお世辞言う天女

今は亡き師へ恩返し句に励み

何気ない言葉で急所ついでくる

感謝する姿へ神も味方する

じいちゃんがヒント一杯持っている

出不精な夫連れ出す色紙展

みんな留守へそくり出して数えてる

岸和田市 高須賀金太

この地球みな狂わせてエルニーニョ

四苦八苦している僕の新春句

今年こそ金利上昇願いたい

はかなさよ五歳も若いのが逝った(従兄弟の訃)

ごつい体が少しばかりの骨と灰

岸和田市 岩佐ダン吉

ひとりだと肝に銘じてからパワー

厚化粧の総理沖縄売りはった

人間の急所優しさなんだろう

同じ物食べているのに妻と僕

星条旗に頭を垂れている総理

岸和田市 田中文時

建築の現場に飽屑見えす

老婆のひと言多いのも愛か

この世より逢いたい人が多い空

神様も女難だなんて嘘をつく

酒の故それじゃあ酒が浮かばれぬ

岸和田市 井 齋 一 齋

母さんが見上げてくれるお年玉

神主が賽銭状況見て回る

未だ来ない賀状気になる友がいる

孫の酌長寿を祝う旨い酒

年明けて三面鏡が年を聞く

岸和田市 寺 田 甚 一

日の丸の国もリストラ言い始め

総会屋社長の首をなで切りし

晴れ姿親を従え七五三

飲んで騒いでやがてしんみりする別れ

よそ行きの顔で冷たいことを言う

岸和田市 長谷川 呂 万

年頃もあつたへ孫のげげん顔

すぐ落とす化粧も彼へ念入りに

定年後四季の巡りが早すぎる

大阪五輪二千八年鬼笑う

適齢と言われ続けてまだ独り

岸和田市 藪 野 けい子

お年頃体当りパワー秘めている

年頃の娘おります伝書バト

化粧して胸の葛藤かくしてる

商魂を表紙に載せて売っている

評判がソロバンの玉はじいてる

八尾市 内 海 幸 生

日記帳また懲りもせず買い替える

新春をせめて特級酒など供え

堀越えて隣の綺麗な花ざくろ

花の種小さな鉢でごめんよな

逃げてきたはずへポケットベルが鳴る

八尾市 宮 西 弥 生

芽を出した鉢から体をしばられる

叩いたら動く時計に起こされる

かけ出した足止まらない熟女たち

お返しが届いて心閉ざされる

結婚の挨拶状が来た別姓

八尾市 宮 崎 シマ子

丸ばかりつなぐやさしい絵ができる

ため息は橋を渡ればもうつかぬ

現況報告病んでいるとは知らせない

急所つく傷つけぬよにくるむよに

愚弟賢兄肩をこらしている兄よ

八尾市 高 橋 夕 花

これからは好きな絵をかく曲り角

灯台に顔を曝している余生

美味しい水わたしに過ぎた水をのむ

情死などできぬ私の名は人形

雨の日は静かに雨を聞く夫婦

八尾市 吉村 一風

筋通す父が大きく見えてくる

人の心読めても困ることがあり

十三夜母と一献かたむける

いい電話なんと空気も味がいい

水墨に妻の強さがにじんでる

八尾市 高杉 千歩

めでためて平成十年寅揃う

お年玉よりもトランプ二年生

仏の名誦んじ供す春の酒

いちにちの糧身に余る冬の天

歳月や苦勞したことみな忘れ

八尾市 大内 朝子

還暦へ産声あげて二度生きる

正月のひとりぼっちはひとりなり

こだわりをポイと捨てたら胃が軽い

若やいでコスモタワーの群れにいる

ビリケンさん異国で笑顔たやさない

八尾市 生 嶋 ますみ

逆上がりできてうれいしい声で呼ぶ

立ち食いの蕎麦をすすって時間待ち

若者に群がるように散る銀杏

煙草のけむり妻大げさに退避する

他人事のように撮られた胃を見てる

貝塚市 池田 寿美子

新春ですよ虎にそろそろお目覚めを

狸々の燃ゆる瞳に笛太鼓

クレオパトラ炎の渦にかなしさを

柚子しほる未練まだまだ残る掌よ

ラストダンス茶のみ友だちだけでよい

富田林市 池 森 子

つぶやきがいっぱい溜まる秋の耳

わたくしを薔薇に育てた父の庭

だから何だと父はボールを投げ返す

薄情な海でも浮かばねばならぬ

だからだからと秋は言い訳ばかりする

富田林市 松 本 今日子

萩の寺亡母に会えそう甘い風

花が咲く亡母が残した植木鉢

足元をすくわれそうな滝はげし

人間不信やかんが湯気を立てている

十月の桜は少し遠慮勝ち

富田林市 片 岡 智恵子

メダカの子宇宙とぶこと考える

寒椿春の笑顔がころげ出る

不況風ゴルフクラブが錆びてくる

悪友を演じる靴に履きかえる

風邪に臥す旅の疲れとわかる齡

河内長野市 井上喜酔

マイペース他人に変えて欲しくない
窓際で古いタイプが沈みかけ

この歳でネジ巻かれても欲は出す

切り札へ弱い企業の喉仏

引つ越しへ魂抜かれたご本尊

和泉市 西岡洛酔

再びの紅葉尋ね京二人

菊生けて日本の心少し汲む

ぬるま湯の一日欲しい苦労性

人生論吐いて登った古希の坂

物思う秋亡母の事亡父のこと

和泉市 岡井やすお

エルツイン氏日本パンクせぬうちと

八方美人足下を見ず

越後からエレキ診断してくれる

凧や肩を斜めに縄のれん

サザエさん消えず町子の味が消え

大阪府 榎山隆盛

初春の空にときめき頂きぬ

羽根ぶとん明治の母は知りません

エーデルワイス咲くまでに恋実らせる

洗濯のラベルをつけたままの席

大銀杏きりり鬨う貌になり

神戸市 中村ゆきを

正月の笑顔で春秋送らんや

銭湯に友あり二日の湯もあふれ

郷さんのようなふとん屋来ぬかしら

赤のれんくぐると蛸も煮えている

北大を夢見る生徒と仰ぐ星

神戸市 山口美穂

霜に咲く残菊の笑み愛おしむ

冬の詩 紅のぞかせる藪椿

やんわりとひよいと奥の手のぞかせる

片ちびの靴気に入ってますランランラン

砂時計さらさら時は過去となる

神戸市 木村貴代子

設計図窓は大きく明日向き

波風を立てよう愛が戻るかも

燕の子巢立って元の駅となる

黄信号いつも点っている暮らし

冬木立 株が上がりと下がろうと

尼崎市 春城年代

砂を吐くと貝のつぶやき深くなる

木守柿 母の青空澄み渡る

悪筆が疎遠にさせて末枯れの菊

古傷を思い出させる電信棒

新郎新婦どちらの親も若いこと

尼崎市 春城 武庫坊

紅葉燃え湖東三山塔揺れる

月が出る嘘を取消すのは今だ

年金で人並み生きるのは手品

不器用に生きて情けがよくわかる

足音の老いを知らずに歩いてる

尼崎市 長浜澄子

いい事がありそう月下美人咲く

あつけらかなとした首二つ午後の紅茶

逢いたいとひらがなで書きあと余白

弱点を互いに知ってから和音

どんな波越えたのだろう自画自賛

西宮市 奥田みつ子

初光 六甲山よおだやかに

今までの歩幅で歩く 今年また

空虚空虚逢わねば何も彼も空虚

喪服着て車内の一人目を開けず

南十字星 兄を沈めた海が吠え

西宮市 門谷たず子

喪服着て留袖と会うターミナル

眼の手術してから戻らないセンス

思いやり過ぎてあなたをおこらせる

淋しさにもつまらなさにも慣れてくる

たゆとうて葦の弱さとしたたかさ

西宮市 牧淵富喜子

露天風呂沈めばこわいものなし

まん丸な月の出に会うドッピンシャン

半月に引き摺る足を隠したし

さりながら少し痛みを言い過ぎる

燻ってる火は風を待っている

西宮市 山本義子

青々し母なる海に脱帽す(八重山諸島の旅)

鮮やかな色屋根に喜と哀を見る

マングロープ林 樹々の命のいとおしき

三線と唄で島びとみなガイド

南の花 雨には雨の彩になり

西宮市 秋元てる

風邪引くな転ばないでとやかましい

電話口大声を出す友も古い

酔うて来て父の我流の「北帰行」

へそ曲り言えばにんまりしてた亡夫

より迷う旅の土産の自分用

西宮市 亀岡哲子

地藏さまに帽子かぶせて秋深む

ごめんネと言えずゴメンと書いて置く

青信号どんだん続き疲れはて

雪国へドラマを運ぶ深夜バス

しあわせに暮らす我流のおまじない

西宮市 菊池 トミエ

千切れ雲お前も一人秋の空
虫の声じっくり聞いて長湯する
長すぎる生命線にふと不安
したたかにその日その日の母子手帳
本心を言えば波風立つ気配

西宮市 刈田 泰司

遠雷のようにときめく古日記
ささやきを文字にしている日記帳
老眼鏡のせいか世情が暗すぎる
持て余す暇には来ないおじやま虫
昆虫も金に換算子の会話

西宮市 久保 まさお

八十の坂しみじみ登り冬を迫る
老師在し彼の山遠し冬木立
冬布団ゆるりと干そう明日傘寿
あぐらかきどっとほぐれた初詣
背伸びして新世紀待つ福寿草

伊丹市 山崎 君子

信心も秋の季節の風の中
木守りは落ちた仲間をみつめてる
地球儀に旅の波音聞いている
仲直り鍋も程よく煮えてくる
しあわせは小鳩見ながら年賀書く

宝塚市 吉田 笑女

子を想う母の涙はあたたかい
アフリカで一人がんばる子を案じ
大声で亡き娘呼んでた夢の中
気の強い嫁に長男きたえられ
亡母よりも長く生きたいなと思ふ

宝塚市 上田 佳秋

松ぼっくり探しに亡母の森へ来る
十指みな起伏に耐えた自負がある
針の穴通らぬ夜半のボタンつけ
返答に困り眼鏡に手がかかる
縄一本秘密の場所に隠しとく

宝塚市 嵯峨根 保子

玄海のおとこエンヤと山を曳く
どよめきの辻で大鯛はね返る
この旅の一会記念の唐津焼
皮ジャンの潮の匂いと雑魚場ずし
六十の夢は掴めるものを追う

川西市 氏林 洋敏

聖書には日本人はでてこない
すこしだけ私のことも祈ってる
病人を相手に酒の話する
親孝行するのに金は要りません
悪妻といつもいるから元気です

芦屋市 黒田能子

軽い話から本題に入り出す
何げなく聞いた話が軽くない
プライドが高くて涙流さない
あつさりと絆の切れる秋の冷え
吊り橋の他人の揺れにじめない

加古川市 吐田公一

遠い娘の暮らしを思う秋日和
生活の匂いがついて来た息子
一生を託す人待つ紅椿

友達が減る隔週の医者通い
大江山の鬼より恐いうちの鬼

相生市 中塚礎石

抱き上げた孫の笑顔に迷い覚め
リストラをいか裂きながら夜更けまで
白足袋を脱いだ女の夢芝居
生活の流れを変えた石ひとつ
別れぎわ何か忘れたような指

奈良市 宮口笛生

一年で一番うまい新春の酒
いい話落ちてはいない十二月
肩書きが今日もスーツを替えて出る
みじん切り真似の出来ない妻の芸
人差し指でつぶされている冬の蠅

生駒市 麻生アート

年賀状さてさて眼鏡どこへいた
猫と坊ちゃん漱石読んだ事にする
あの頃は好かった敵も多かった
煩惱は煩惱として春やよし
今あればルーツどうでもよい男

生駒市 北山悟郎

日本に大和魂死語になる
こめかみに未だ残り火が燃えている
身障者の汗千金の値する
昨日忘れ今日一日を大切に

駄目な僕連れ添う妻よ有難う

大和郡山市 坊農柳弘

赤湯風呂慣れて甘えた有馬の湯
忘れたい事多すぎて暮れの酒
四年目の正月どない神戸っ子
幾度目の見合いか今年も柿熟れる
年玉の値上げ促す孫五人

大和高田市 岸本豊平次

船盛りでもう満腹の老いの旅
幼き日隠れ小屋作った森恋し
昭和を生き二十一世紀が覗けそう
人生を乗りつき乗りつき生きている
春夏秋冬装い変えて山の寺

和歌山市 川上大輪

和歌山市 堀端三男

猿のままでは満足できぬ猿がいる

サヨナラをしたのに電話かけてくる

止まったままの刻が柩の中にある

取り替えた言葉一つが温かい

蛸は蛸なりに信念持っている

和歌山市 川上富湖

悪口雑言ゴミが罵り合っている

福神漬け間の取り方を心得る

安全ピンがピアスの穴で揺れている

芽を出しているのはいつか埋めた憂さ

アンダーラインここで感動せよと言う

和歌山市 木本朱夏

坂の街曇天マリアの像の偏頭痛

バテレンの足音うしろから時雨

ゴルゴダの丘へも続く石畳

殉教を見届けてより黒揚羽

ここはむかし丸山遊郭曼珠沙華

和歌山市 田中みね

一番より追い越す夢がある二番

そつがない人と付き合う肩の凝り

牛歩よしいつか立つ気の山の峰

夫婦して同じ金庫という平和

神仏も結構なざる依怙蟲貞

消印が決め手になったミステリ

男の意地頭を下げるタイミング

冬を越す蠅と仲良く日向ぼこ

受話器の向こう舌を出してやるよな気配

立て替えが忘れた頃で儲けた気

和歌山市 福本英子

高山寺紅葉へ人が湧いてくる(三尾名利)

光明寺お茶一服に弾む足

神護寺の紅葉へ残照惜しみなく

辛口のカレーに暮らしも救われる

奉賀帳独り暮らしも容赦なし

和歌山市 桜井千秀

二股大根置き去りにして出荷済む

活字より声にしてよい句のリズム

焦燥が続きよろめくことばかり

身一点風に曝して生き延びる

溜め息のあとはニヤツとしておこう

和歌山市 垂井千寿子

思惑の通り育たぬ玩具箱

相談に乗る境遇が似てるから

編棒が日向ぼっこを陽をすくい

夫より妻矢面に立つ時代

老人を迷子にしてる都市砂漠

和歌山市 山田高夫

一石を投げて世に問うペンをとる
もう一人の自分を描く私小説
二の舞いは演じたくない父の轍
世のさだめ花も一刻咲いて散る
残り日を数え煩惱切り捨てる

和歌山市 宮口克子

わたくしの歴史にきみをインプット
少しだけ分けて下さいその時間
巢立たれた部屋で頬笑む藤娘
平成の社長見送りなく出社
腕力と知的暴力とはちがう

和歌山市 細川稚代

迎春へひとりの部屋に焚くお香
エレベーター思わぬ人に会う師走
粹の外端役一つを頂きぬ
ピエロにも魔女にもなれる面買いに
はずされた目線はきつと愛だろう

和歌山市 山口三千子

人間不信抱いて自分を追い詰める
嫌なことはかり心に氷雨する
洗車した屋根に隣の猫四匹
師の教え心に畳む露の臺
晴天に心の霧はまだ晴れず

和歌山市 玉置当代

友の声聞かねば今日が始まらぬ
昔からずつとあなたが好きでした
ワイドレンズで覗いた視野を持って余す
旅半ば一期一会の風に逢う
過去のこと鮮明になる恐怖感

和歌山市 堀畑靖子

自我の芽を摘めばのつべらぼうになる
悲しい女が女差別する
私を育ててなおしてくれた愛
私の山場昭和の中にある
雑草の嘆きか止まぬ虎落笛

和歌山市 古久保和子

万華鏡おんなが溢れすぎないか
上り列車の汽笛が届く風の夜
一匹の蟻が作っているケルン
物置の隅で化石になる時間
気が付くと息子が髭を剃っている

和歌山市 池永正甫

赤いのはポストと柿の里を往く
火の用心おでん熱燗冬仕度
会釈など遠い思い出版売機
月光にもシャンデリアにもロマンあり
青信号足踏みしたい時もある

和歌山市 岩本美智子

節料理日本の初春を子に送る

今年こそ子が翔んでいく青春になれ

虎の性古稀になつても吼えている

へそくりがマイナスになる株下落

徒花も咲かせて草木強くなる

和歌山市 榎原公子

金柑の実ころろと青い息

柿熟れて村東の間のフェスティバル

偶像へすがる情緒不安定

水洗で流したあとにくる痛み

反省をします孫はラーメン党

和歌山市 楠見章子

外からの光線あそぶ美術館

魚の絵並ぶと少し生臭い

わたくしの尻尾鏡の裏あたり

秋の空地球の厚着嘘のよう

観音様が金ヒカすぎる観光地

海南市 三宅保州

有為転変どうあろうとも福寿草

しるしだけ屠蘇振る舞われ初稽古

豪邸の門が開いた三が日

三回も同じ映画を観た昔

散髪をしたら迷いがふつ切れた

岡山市 川端柳子

迎春へおだやかな顔見繕う

狒犬と目が合い新春の宮参り

北風の中で育てた笑いじわ

鬼も好き仏恋しと行く旅路

この世の花蝶々結び許されよ

岡山市 井上柳五郎

いやな奴思われているとも知らず

真つ昼間虫の声聞く静に居る

錦繡の褥がつづく散歩道

速歩から小走りになる師走来る

秋の陽のストンと落ちる深い闇

岡山市 花田たけ志

日当りのいい部屋占領して句作

盆栽と余生の寿命を較べて見

枯れ落葉わが身にも似て掃きよせる

喜寿過ぎて怒りの炎が燃えたたぬ

落日に今日の余生を垣間見る

倉敷市 田辺灸六

生活の知恵で甘辛母の味

原点に戻って習う老いの筆

元気ですとは表面のご挨拶

趣味いまだ衰えません鯊を釣る

リハビリの足よしっかりしておくれ

倉敷市 井上富子

自立への布石になれと仕込む芸

果実酒に頬を染めてる割烹着

お若いが仲々隙のない瞳

流行には頓着のないマイペース

鋭敏な舌が盗んだシエフの味

岡山県 荻野 鮫虎狼

くだらない秘密も妻は大事がり

奥の手が街を行き交う十二月

銀行は大丈夫かと聞きに行き

手袋の温みに義手は包まれる

御先祖へ詫び仏壇は閉めたまま

岡山県 二宗 吟平

天女との愛を寿ぐ甘い酒

人の世の苦楽はげます詩を吟じ

老人大学手を叩くだけ遠い耳

句碑守る祖母の地藏さんへ花を立て

ジョギングの無念無想で心澄む

岡山県 小林 妻子

夕食に好きだと言った昼弁当

習うだけ習うてすうっと止められる

景気よい時の道具が残ってる

その釘は曲りまっせと元大工

労基法週休二日で食えと言う

岡山県 山本 玉恵

背信の男はのせぬ亀の背な

どんぐりころころやと果した親ばなれ

風百態音を奏でる水の嵩

自問自答愛の行方の様ざまに

残照にあずけましようか炎の想い

岡山県 矢内 寿恵子

にこりえの街で洗っている心

晩秋の日差し夢二の絵がゆれる

子等の子も巣立って柿の実はたわわ

乱れた世人情論も彩褪せる

無月の夜あと幾許の命とも

岡山県 福原 悦子

清濁を越えて夫婦の城守る

火の橋を渡った主義が一つある

幕のない喜劇の果てを抱きながら

終の絵に紅を添えたい筆を選る

親展に重い頼みが書いてある

岡山県 江口 有一朗

降る小雨楽しんでる下校の児

子の喧嘩どちらも詫びて仲直り

雑念をふるい落としている散歩

齢などは忘れて仰ぐ初春の空

千里走る気概はほしい老いの初春

岡山県 福原辰江

一年の早き身に沁む落葉散る
裏口は金の効き目を知っている
明日というその一日を追いかける
あさはかな私を笑う風のいろ
娘が巣立つ安否の鈴を振りながら

岡山県 大石あすなろ

罪のいろにじんだ爪を丸くきる
さらさらと命の重さ露光る
破調乱調いたすら好きに恋模様
赤トンボ歌えば風も丸く吹く
ハガキ一枚書いてわたしの草枕

広島市 森田文

心臓の鼓動のごとくアイヌ舞
キッチンの乱れは言えぬ旅帰り
顔色がまだ読めなくて犬のチロ
囁りを忘れた鳥のひとりごと
気の長い人と話せぬ夜の冷え

呉市 横田英詩

幽界に亡命したい時がある
涙流した数だけ強くなりました
趣味持たぬ男よ力萎えないか
改札口挟み指切り繰り返す
目覚しが次第に腹を立ててくる

竹原市 小島蘭幸

十六歳も十八歳もいて平和
雲は流れて妹よ幸福か
酒が言わせた父の言葉の軽からず
ひとりぼっちになったおふくろの力瘤
電話ではいつも笑っていた母よ

竹原市 森井菁居

独り来て冬的美濃路は佯しかり
一日中遊び釣果は無くて良い
ふるさとを訪う舗装路を避けて訪う
師を越える意地昂ぶれば師は逃げる
人生暮色叶わぬ愛を抱いたまま

竹原市 古谷節夫

果てしなく白にこだわり六十路坂
ふるさとで仕入れた知恵が通じない
一円が情け無用に落ちている
障子張り電光石火孫の指
蓄音機壊れたようにくどい酒

竹原市 時広一路

山頭火なら乗れそうな雲が浮く
枝揺する風よ考えまともならぬ
人はみな善人だよな青い海
懐かしの写真いつものベレー帽
航空路雲の上にも線がある

竹原市 石原 淑子

新年や小さな誓い膨らんで
思いきりはじけた柘榴ありがとう
気掛りも洗い流してしまひ風呂
口きりの季節無心に茶を点てる
今年こそ私の為の一時間

広島県 森川 抜智

世直しにまず廃絶は核と悪
温暖化もみじは冴えぬ嵐山
月下美人咲くまで待てず酒の宴
孫七人一番上が嫁にゆき
湯につかり浪曲を聞くよき時代

柳井市 弘津 柳慶

主張もう捨てて世間を狭く生き
リュック一つみじめな姿で敗戦記
単身赴任それから家庭狂い出し
血の絆異国へ預けた子と再会
エロ歌で派手な笑いの団体車

美祿市 安平次 弘道

子のために打たねばならぬ儀打の数
髭剃って見たが定年当てがない
腕組んでみたがこの場は引き下がり
怪獣も一緒に眠るオモチャ箱
銅鐸が出ると埴輪が喋り出し

宇部市 平田 実男

七人の敵に貰っている若さ
六十五笛も手綱も妻まかせ
脛かじる孫が生き甲斐かも知れぬ
納骨が済まないうちに翔んだ寡婦
大好きなドレスがきつくなつたウツ

下関市 石川 侃流洞

どんぐり一つ孫のお土産小さい秋
八十歳まだまだ奮辞書を買う
暖冬異変蠅取蜘蛛が這っている
川柳仲間もう肩書はみんな捨て
ゴミ出しに行くにも女少し塗り

鳥取市 両川 洋々

口紅の赤い曲者には弱い
たたき上げの僕で学歴恐くない
廃線の錆はレールの涙かも
総理の座降りると楽になれますよ
修羅抜けて女に恐いものがない

鳥取市 武田 帆雀

望遠鏡のように蟹の指覗く
立ち上がるのにも一二の三拍子
証拠湮滅ズボンに着けた草虱
髪一本置かずきれいに辞めなされ
秋の虫ここは黄門さまの宿

鳥取市 西村 黙光

お浄土のようにネオンの灯が招く
写経して感情線の補修する

呆け止めと戸締まりだけはちゃんとする

釣りに行き帰りは酒を買ってくる

豆アジで酷のようだが匂の味

鳥取市 岩原 喬水

まずい飯慣れた入院もう飽きた

腹切られ食えなくなつたまずい飯

麻醉から覚めたら妻が側に居り

病窓に秋晴れの空眩し過ぎ

注射針抜き退院の夢が覚め

鳥取市 春木 圭一郎

虎は死し皮を 私は借金を

虎の尾を踏んで行革進まない

虎打線ダイナマイトがなつかしい

虎の子の五万飲み屋に吸い取られ

虎になる夫と一緒にスナックへ

鳥取市 美田 旋風

生きるため葬儀屋チラシ攻めで来る

松茸が終ると蟹が来てくれる

強壯剤叶わぬ夢をそそのかす

ときどきは仮面はずして顔冷やす

あの世へに撮った写真が古くなる

鳥取市 坂田 和歌子

反乱を起すが如く紅葉ちる

ティッシュ取る娘が妙に色っぽい

おおらかに距離を隔てて愛に生き

うどん屋の狸さむかろ冬でっせ

開かずの間わけは貴女の深情け

鳥取市 杉本 孝男

人形になって浮世の風かわす

そばの花薫る故郷へ骨埋める

退屈な同士が寄ると酒になる

寂しさに負けて悪友誘いだす

こざっぱりした着こなしの娘に見とれ

鳥取市 植田 一京

のんびりと旅して爪がのびている

矢印のとおり無策のまま歩き

ひやひやと夢は大きな方を選ぶ

謎解いて生きてゆくのが面白い

本番にそろそろしよう日が暮れる

倉吉市 野中 御前

大きらい犬も私に尾を振らぬ

酒ぎらい和菓子と抹茶絶えさせぬ

公園ダンゴ外人さんもワンダフル

何処からか薪を割る音吊るし柿

夫より金が大事か保険金

倉吉市 最上和枝

相づちが止った船を漕いでいる
自販機のように硬貨が糧をする
時雨降る田圃のみが芽吹き出す
あけび爆ぜどこまで高い空の青
藁一本いただきたくて掌を合わす

倉吉市 淡路ゆり子

いずこに居てもふるさと近き眼裏に
煩悩の袋の口が締らない
生き延びるつもりで朝の梅ひとつ
この町は路地の奥まで知りつくす
餅ひとつ噛み切れないが年明け

倉吉市 野口節子

山削り人情消して行く文化
情け無用私好んでかこの鳥
厄介なお荷物だけが残される
風雪に堪えてまあるい鬼瓦
めし天こ盛りにしていざ出陣

倉吉市 山本玲子

担当医療の告知をする顔だ
今ここで貝になれよと父の訓
それなりに買い手があつてゴミの市
子育ての悔いを補うたまごっち
見覚えのない顔がある三面鏡

倉吉市 松本よしえ

お静かに感情線が乱れます
吊り橋の下に落としたいイヤリング
毒消しを飲みすぎて骨粗鬆症
もう後に引けなくなった腕まくり
虎の子が数える度に減ってくる

倉吉市 米田幸子

有難や眠気を誘ういい説経
ため息は止そう今夜は満月だ
ほどほどの浮世の風もくぐり抜け
血の通うめしにようやくありつける
若者と張り合う夢は捨てました

米子市 林荒介

消しゴムが足らぬ私の一代記
河口に漂う源流の落葉
ヒーローになれない椅子で空いている
千年の浪が浚った風穴だ
声にして呼ばねば誰も振り向かぬ

米子市 林瑞枝

ほんわかと春の音符が夫婦坂
新春の風はおんなの背に温い
春風に光っていたい位置を選び
神の抱く迷える羊たちの街
春の香りワインで漬けるお新香だ

米子市 石垣花子

ずる休みの訳は聞かずにパンを焼く
停年までは個性を殺し木偶通す
さてという時はエンジンかからない
何は置いても腹ごしらえをしてかかる
ノックせねば入れてくれない子供部屋

米子市 政岡日枝子

玄関の塩にも自尊心がある
黄昏と思う結び目のゆるさ
寺の鐘柿もカラスも聞き惚れる
鷹揚に枝張り柿の木は菩薩
朝露はきつとほとけの置き土産

米子市 野坂なみ

法話きく一刻鱗落ちたけど
君に似た帽子を今も追いかける
幻の花が見事に咲いている
ひびかないその足音に気を許す
突破口長い迷路を抜けてきた

米子市 光井玲子

遠い虹にみとれ足もと見失う
長生きするだろう夫は楽天家
針箱の底はだあれも気がつかぬ
傘寿の姉いつもわたしの防波堤
振り向いてばかりおられぬ冬の音

米子市 青戸田鶴

季節変るたびに大きな波がくる
セピア色の中で若さが光っている
花園をつくったはずが草畑
崖ぶちに立つてもこけぬようにしよう
目的地どこになっても驚かぬ

米子市 澤田千春

突然にわたくしの絵が吹雪き出す
大きくゆれる蓑虫恋をしたのかい
山の絵が霧の向こうで光りだす
鬼の子も祭りの店にやってくる
焼け落ちる音が耳底はなれない

米子市 田中亜弥

綿帽子眺めて吐息ついている
流されては困るわたしを縛りつけ
腰椎5此処にも悪魔巣をつくり
夕焼をゆっくり見せる神もいる
手の平のバイパス太くなるばかり

米子市 鷺見正子

元氣 金神は願いを仕分けする
東京のあの灯の下に息子の灯
バジャマから時どきあがる関の声
もみ手するポチに白髪がふえて来た
暖冬の子報 寒波の覚悟する

米子市 茂理 高代

秋風は恋をさすよな味がする
ブローチに負けずに光る赤い羽根
忘れてた笑顔をくれた菊花展
堀高く住んで医者だと噂され
もう駄目よそんな言葉が呆けさせる

米子市 白根 ふみ

菩提寺に受付けてあるわたくしが
活きのいい目のおじさんのサバを買う
笛たいこ神も露店で立ちどまる
ここからはひとりりで渡る終の橋
知っているつもりで渡る終の橋

米子市 木村 春枝

敵味方顔を揃えて箱の中
一人居の堀高くして鬱の虫
荒れた手の温もり伝え野菜売り
ペアルック他人寄せない武装する
ピンセットでつまんだほどの幸まもる

米子市 永井 三津子

暮引いた亡夫へ嗚咽の夜が続く
彼へ逢う口実花を買いに行く
再婚を義姉の目が背で急き立てる
仁愛が飽食の世で瘦せてゆく
人情に飢えた日温み買いに行く

鳥取県 新家 完司

誰か逝ったか明け方の風の音
今日のことだけを見詰めるいい雨だ
尊厳を崩さず蛇は退却す
酒瓶がゴロンと歌う終の部屋
指物師の鋸も満足して眠る

鳥取県 さえき やえ

候文が書きたくなつたそば畑
小さな辞書恥をかくなとついてくる
初雪や大脳のネジ巻きなおす
冬やよし鯛にたけめし松葉ガニ
寒小菊供えてひと日安らぎぬ

鳥取県 土橋 螢

かならずや往生迷うことはない
相席の女に自己紹介をして
午前午後そして一日棒にふる
夫婦でも似合うふたりの旅に出る
わたくしの木の葉返しかりもみか

鳥取県 土橋 はるお

居酒屋に男の厄日置きにゆく
中古のマイクで歌う枯れすすき
次の世も変らぬ心がけします
ガラス張りの部屋で密談してなさる
大胆に二度目だなんて言えませぬ

鳥取県 土橋 睦子

初詣でお寺の鐘をひとつ打つ
臍くりを大事に鍵を置き忘れ
ブランコを漕いで私を抜けどそ
点と点結ぶ縁に逢いたくて
さすらいの旅も此処らでひと休み

鳥取県 鈴木 公弘

寝返ろうバッグに金のある人だ
難しいことを言わないので光る
焚き火かな役所の壁が焦げている
紅葉を愛でる暇なしキリギリス
天下とつたら真つ先に昼寝する

鳥取県 谷口 次男

臆病で大きな熊の肝を飲む
豪胆に総理や知事を叱る祖母
人間が開けてはならぬ箱開けた
傘張りは今で言うならフリーター
大雨が止むまで父の傘の中

鳥取県 橋本 多哥由

女でも意地があるから石を蹴る
悟り切る姿で花は散ってゆく
いい店にいい娘が一人しかない
幸せの女神退屈かも知れぬ
損得を考えなくて役につく

鳥取県 上田 俊路

上塗りをした民主主義剥げている
魂の抜けてしまった案山子焼く
コーラスの妻が第九を待ちわびる
昭和史を駈けぬけた僕のマラソン
美しい十指が弾む手話の恋

鳥取県 林 露杖

秋晴れの敬老会にアベックで
柿をとる狙い外れる挟み竹
葬送は小春日和の大往生
一言を遂に告げ得ず罽雲
アンケート フィクション一つ入れておく

鳥取県 西原 艶子

さっぱりと恋思いのない息子
両面接着テープのようにゆかぬ自我
瀬戸内の夕陽と日本海の夕陽
満天の星座神話の絵が浮かぶ
父の絵に父の轍が描いてあり

鳥取県 石谷 美恵子

焼き栗は子期せぬ人の方へ爆ぜ
日銭追う軍手のままで陽を拝む
曲者は風の音にも身構える
ラッキョウを送り昆布の届く仲
ふわふわと浮く豆腐にも角があり

鳥取県 羽津川 公乃

どこからが初夢うつらうつら明け

正月も未練たつぷり日が暮れる

お年玉次は入学祝待つ

ゴールドを過ぎブラチナと言う余生

新聞も柳誌もひとつ井の蛙

鳥取県 黒田 くに子

夫婦してラストダンスをおどりたい

三世代同居をあまく見たようだ

夫婦茶碗甘い言葉に飢えている

千の祈り巣立つ子どもへ守り札

生半可では済まぬ年金七五三

鳥取県 岩崎 みさ江

母臥している錯覚の障子かな

辿りつく涯まで行くと大落暉

さりげない貌して水を抱く地球

年賀状とどいた友はもういない

子離れを思う株から枯れてくる

鳥取県 田村 きみ子

ラベンダー三本買って夢もらう

これからはわたしのために金使う

成りゆきでつい万歳を先にする

窓開けて見ようか夕陽エアポート

活け花展の招待状が嬉しくて

鳥取県 津村 八重子

幸せをもとめて今日も笑顔まく

直ぐい道歩くことだけ考える

素顔からもれる笑いが愛らしい

いい風呂につかりとび出す安来節

雪帽子かぶり大山威厳もつ

鳥取県 西川 和子

一枚も欠けずに友の賀状来る

じいちゃんの凧が一番よく上がる

余生まだアップダウンの道走る

忘れるわ転ぶわ落すわの厄日

古毛糸集め退屈などしない

鳥取県 太田 幸枝

目の前で手の平かえす嘘を言う

手に負えぬ子が一番に背負う父

手を抜いた子育て老いて気付いても

いばら道手さぐりで来た夫婦みち

手の平で夫ころころとよくころび

松江市 舟木 与根一

ゴキブリは出会いがしらに突然死

微笑んでいるけど耳が遠いだけ

勲章を貰うと老いが早くなる

書体まで変り者です右下がり

銭以外孫は相手にしてくれず

出雲市 板垣草丘

翔んでいる兎で何も聞えない
掛軸の夏そのままに障子張る
東京へ逆に吸われるパイプ敷く
逆なでのうろこが顔へ飛んでくる
冬眠はせぬがたっぷり食べておく

出雲市 久谷まこと

演技して九名まではごまかせる
口裏を合わせソロバン割り切ろう
狙の鯉になれない検診日
見ない振りしてから腹がふくれ出す
一杯を控え目にする体重計

出雲市 板垣夢酔

額縁を買って待つのに賞は来ず
割烹着着るとまな板はしやぎだす
募金箱夕陽と共に重くなり
強情なおんな寝顔が寂しそう
意地捨ててはいはいはいと機嫌よし

出雲市 竹治ちかし

故里の海と語ったのは昔
気が付けば語り口まで父に似る
コーヒーを冷まして夢を語り合い
また一つ年輪増やす除夜の鐘
予想せぬうねりが身内から起こる

出雲市 富田蘭水

やさしさの中にするどいコスモスが
古希も去る余生のとびら磨かねば
秋の味出ず包丁のせいにする
野仏とトンボしきりに世を嘆く
見たいのにガイド急がす土産店

出雲市 園山多賀子

あわよくば上昇気流に乗ってみる
私に負けたときには惚けるだろう
四六時中哀歎去来愚を重ね
羽繕いしてから明日の風を読む
虚しさが結んで開いた掌に残る

出雲市 岸桂子

年毎に過去美しくなる写真
中傷の中ではじた栗のいが
不器用で溜めた涙をついこぼす
満月に山の寝姿さらされる
見ぬ振りをしてる味方だっている

出雲市 吉岡きみえ

いい時季だ観光バスが連なって
生き残り闘志を見せるアドバルン
鬼にも蛇にも女の河渡る
ずるいかも知れぬわたしはほほかむり
じたんだふむわたしを見てるお月さま

出雲市 小白金 房子

負け牛の目には哀しい昼の月
手ばなした牛のひと声目に浮かぶ
デコボコの道に夫婦の詩がある
新築の障子影さす柿のれん
峠道消えて高速バスの旅

出雲市 小玉 満江

咳一つ二つ三つと秋深む
人形の家で楽しい話聞く
一人居の笛吹きやかん鳴っている
おしゃれ着に下駄とは恐れ入りました
花野行くあれば二十歳の頃でした

出雲市 石倉 芙佐子

千両万両実って吾が家も春が来る
寅年の烈しさ少し貰いましょう
婿殿の御礼も一言初詣で
裸木はおしゃれな雪の服を着る
ベレー帽深く被ってかくれんぼ

島根県 西村 早苗

かしわ手は四つはずもの大やしろ
偶然の出会いなどなしそれでよし
髭をそりながら瘦せたなと思ふ
正月早そう来る書留は何だろう
はやばやと雨の日ウインド灯つく

島根県 小砂 白汀

ピリオドを打って頂く酒の味
握手してエリツインさんの苦笑い
今日もまた新顔が出た犯罪史
年寄りを蹴ったり踏んだり撲ったり
達者だねえと言われ達者かも知れん

島根県 堀江 芳子

神有月いずもは神の懐に
とんとん昔話に亡母のいる炬燵
流れ雲一期一会のいとおしき
初春を呼ぶ風肌にしみる風
ご機嫌をころりと直す酌ぎ上手

島根県 松本文子

突然に呼ばれることが恐ろしい
芸がないから一生懸命手を叩く
身勝手な祈り神さま許してね
秋を描くゆとりもなく落葉する
老母のせわは人に任せてはおけぬ

島根県 佐々木 鳳笙

ダビングのテープの中の亡父の声
娘のルーズはソックスだけでなさそう
ワンマンが罷り通った四面楚歌
言い訳は聞きたくないと昼の月
口元はパパそっくりと孫を抱く

島根県 森 茂美

譲り合う無駄な時間で和を保ち
病床を窓にずらせる菊日和
那覇軍港真つ赤な夕陽いま沈む
ガイドライン昔の敵は今日の友
敬老会自分のことはまだ出来る

島根県 伊藤 寿美

山の辺の道万葉の文字拾う
親蟹を追うて子蟹も横歩き
打てば響く味方が側に居る怖さ
予感的中孫が訪ねてくる日和
孫と見る月が今夜はまんまるい

香川県 木村 あきら

松竹梅活けて部屋中初春にする
出目金の視界は三百六十度
チョンマゲが飛び出しそうな松並木
舟唄もシブキに濡れる川下り
家族には見られたくない隠し芸

香川県 工藤 吟笑

大波の音も島では子守唄
鈴の音が胸に沁み入る春遍路
卒寿まで後一息と粘ってる
懐に切り札持っている余裕
新築で先祖に済まぬ土地を売り

香川県 成重 放任

石摺で残しておきたい師の一句
警察が暇な世の中欲しいもの
サヌカイト神秘的な音をかもし出し
二千年目ざめた土器が欠伸する
納め札六十二歳とまだ書ける

香川県 川崎 ひかり

大海にど肝抜かれた牛蛙
動けない肩にトンボが止まってる
雑草の生命雑草心得る
孫の絵に松の青さを残さねば
贈られた言葉座右の銘とする

香川県 池内 かおり

松茸を貰う情けの味がする
止まったら転んでしまう躊躇だろう
金婚へ誕生石を選っている
松島で別れた人と鳩バスで
石ひとつ枯山水の置きどころ

松山市 丹下 美津子

川柳塔碑尋ねあぐねて高野山
川柳塔碑供養一葉納め札
顕微鏡に虫のいのちをさらされる
蝶になる少女ひらひら冬帽子
草刈り機野菊一株刈り残す

松山市 宮尾 みのり

子らの背ははるか向こうを行くばかり

しあわせな親で息子の背を見る

それでよし子の行く道が測られぬ

きれいな事言うて二男の嫁は済み

ナイフとフォークに肚を読まれているらしい

今治市 越智 一水

浮き沈みして人生に顔持たず

夫婦の営み老妻不潔のように言う

もうおけと野良の夫婦へ寺の鐘

陶芸の里を歩けば揚雲雀

雲までがただただ急ぐ世紀末

今治市 矢野 佳雲

ねじ伏せた風に気のある秋桜

旅疲れ湯疲れうちの風呂に入る

首をどう曲げればいいのピカソの絵

いい夢を見せてくれたと切れ言葉

傾くほどは積んでなかった宝船

今治市 野村 京子

三差路で血のこさうすき確かめる

柿熟れる猿が笑った声がする

歩いてもひとり影絵もまたひとり

人はみな水と情けに根をおろす

言い勝っていびつな形の目玉焼き

高知市 北川 竹萌

日田温泉早立ち急ぐ築城基地

航空ショー車車人人の築城基地

十万の視点ブルーインパレス

青の洞門ガイドの指で目に納め

へこたれず戦車に試乗八十半ば(日本原駐屯地)

高知県 小澤 幸泉

新しい朝日斜めにほほをなで

恐れつつ待つ診察も生きることに

このままでよいと自分に言い聞かせ

それぞれの人生 病衣に包み込む

そこだけは咲き競いにおう胡蝶蘭

北九州市 梅田 宣司

散策に手頃な歩幅で来る和布利

褒め言葉添えて敗者の顔になる

おとなしく呆けよう酒がまだ飲める

惚けたかな過去が点滅しはじめる

モノリザの顔して試着室を出る

唐津市 田口 虹汀

照る日曇る日傘寿の窓は春霞

打たれても張子は首を横に振る

妄執が虎視眈眈と狙う椅子

七五三孫が曾孫を抱いて来る

気概充分虎穴訪ねる杖を突き

唐津市 久保正劍

亡却の彼方九九式歩兵銃

降り立った富山は真紅花の海

唐津市 山門幸夫

過労死の蟻を覗いたキリギリス
寺普請施餓鬼法話にチラと出し

足腰を忘れて戦友が駆け寄って
開戦日来る頃孫娘が母になる

内面を映す鏡を持たぬひと

立冬に啓蟄までの暦繰り

校門の序列通りに着かぬ駅

雑踏に携帯電話縫っている

唐津市 仁部四郎

唐津市 山門タミ

とっておきの実話こぼれる三次会

ふしくれた手を控え目に出す握手

動かして理窟をつくる自衛隊

足腰をたたき起して出る旅路

掌に出ている謎が読める齡

お祭りが済んで町並冷えて来た

一卵性などと親子でもたれ合い

曳山ばやし雲が彼方へ連れて去に

趣味選び妻とテストを繰り返す

今冬は切り張りですよ障子たち

唐津市 山口高明

唐津市 市丸晴翠

髭だけは立派無職の風来坊

冬の旅バラの蕾を抱いている

週末は電子手帳でラブコール

手さぐりで私色の布を織る

役職に就いた途端に君で呼び

のびのびと嫁が笑って灯が丸い

拝観の仏像指でまるつくり

凸凹の道を笑顔で駆け抜ける

母さんが盗み読みした娘の日記

サンガラス外せばこの世まぶし過ぎ

唐津市 浜本ちよ

熊本県 高野宵草

虎の絵を画いて新年おめでとつ

悔しいがカタカナ辞典でばなせず

仏像を拝む時の柔和な瞳

歩きつつ電話で笑うスヌーピー

年末の新聞われより着膨れて

平常心確保腹式深呼吸

医者言う禁物ばかりが好きな亡夫

真夜中に眠り薬を飲みにつき

山茶花の紅曇り空打ち払い

流れ弾丸海の向こうのことでなし

弘前市 須 郷 井 蛙

親に似た運動会でビリを駆け
減反を止める政治の蓋がない
手応えが日に日に見える聴診器
お世辞役付けて楽しい旅に出る

十和田市 阿 部 進

渡る世の舵とり妻にまかせきり
一流のホテルに優る山の宿
さりげなく相づち打って大火傷
上司から期待され過ぎ疲れ果て

大阪市 清 水 利 武

居眠りをしてはおれないタイガース
元氣よく吠えろ今年のタイガース
トラトラトラ何かありそな寅の年
初日之出通天閣で虎が吠え

大阪市 藤 田 頂 留 子

初春の空いっばいにえがく夢
変りばえなど齡だけ増えるだけだろう
悪知恵がいつも先行く社会面
考えのまずさを笑う深い闇

大阪市 奥 田 良 子

年忘れテネシーワルツにしばしよ
孫の手に鈴ぶらさげて老い独居
清い恋おとき話のままにすぎ
旅好きは無理と承知の旅に出る

大阪市 清 水 絹 子

風邪の床手近な店のちらし寿司
満月や独りでいいよこれでいい
核地雷どこにあるのか星月夜
近頃のパンはうまいと米屋さん

大阪市 川 原 章 久

背を向けて女泣くから騙される
曲り角七つ曲って街の角
味気ない自動が鳴らす釣鐘町
この女のうしろフアスナー五十年

大阪市 黒 崎 恭 子

真心の友の花東いやされる
ポツポツと語らいながら栗をむく
友は喜寿わたしは古稀の年がくる
同病に話が合った長電話

堺市 黒 田 真 砂

亡母に似たこけしが今も胸に住む
三月振り我が家の風呂の心地良さ
旅する日夢に画いてりハビリス
おニューの服で病忘れて初通院

堺市 吉 本 菁 風

配役に見た目の悪い人もいり
下手な絵だからピカソかと思
ビッグバーン誰かパートになる日なり
ラ・クンパルシート俺にも若い血が残り

堺市 近藤 豊子

風ふけば桜もみじのつもる寺
十一歳その母よりもながい風呂
保育園父と帰る子見送る子
夜半の風呂わたしの息の音ばかり

豊中市 安藤 寿美子

この霧の中でこのまま眠りたし
心経を誦しながら行く杉の道
健康法それは私もやりました
早起きをしなくてもよい暮しです

豊中市 井上 直次

ミステリーもつれた糸を解くように
間違いの電話しばらく喋らせる
噂さえ立たぬ男の無味乾燥
頭数揃えるために呼ばれてる

豊中市 江口 明光

四季持たぬ花屋の花の無表情
欲捨てた顔が仏に見えてくる
無人駅別れの記憶ばかりある
桜餅葉っぱの薫りかみしめる

豊中市 松岡 久留美

経を読み小まめに動く祖母無欲
とざされた道にも光見えた朝
子等のため汗して稼ぐ父の愛
持ち前の演技で母を丸め込み

池田市 岡本 吉太郎

指輪には内緒話があるものだ
上からの支配は重くのしかかる
米国の蓋があるので安心です
曲った事しないと誇り父逝きぬ

池田市 栗田 久子

自己主張木はそれぞれに葉を染める
母を真似繕って未だ捨て切れず
日本名敢えて名乗らぬ里帰り
空言も聞いてるうちに納得し

箕面市 椎江 清芳

裏町に人情涸れぬポンプ井戸
錆びてても痛いほど効く父の釘
仰ぎ見る位置に飾ってある遺影
ふぐ鍋へ妻恐々と箸をつけ

枚方市 二宮 山久

紅葉の日暮まぶしき里帰り
妻の愚痴きいてる耳はそっぽ向き
まだ妻よ元気だローン終っても
仕事にも慣れたか息子の高いびき

枚方市 前 たもつ

年玉の半分サンタくれと言う
冬眠のオケラへそつと土をかけ
ぼくの右手 左手ばかり可愛がる
寒波きて喪中葉書をかき終える

藤井寺市 高田 美代子

すこし欲珈琲カップ温めて

去年の話も二つ三つよ置き炬燵

神妙な顔で鈴振る初詣で

誰彼となく新年のご挨拶

藤井寺市 中島 志洋

円満な家がお好きな福の神

幸せな文字で埋めたい日記帳

寝たはずの子が聞いている口喧嘩

負けん気を秘めた舞妓のおちよぼ口

藤井寺市 福元 みのる

ふりかけの茶漬けですます呑んだ朝

お茶漬けを噛みに噛んでる慎重派

孫の問い時にひんやりさせられる

曾孫誕生妻もわたしも背を伸ばす

河内長野市 植村 喜代

心齋橋娘に遅れぬようついで行く

結婚式よかったよかった秋日和

女優さんもまじる友来て娘の挙式

幸せと不安をだいて娘が嫁ぐ

神戸市 池田 善守

初春にいつもの道も光ってる

職業欄無職と書くに少し慣れ

柔らかい豆腐も角は持っている

時計の音夜中に一番元氣出し

川西市 松本 ただし

口笛に軽い弾みが乗せてある

立ち食いの駅で済ましたみそかそば

しきたりを守ってみなでお目出とう

言い訳の升目ととのいすぎている

伊丹市 小熊 江美

先頭に立って指揮した若い頃

私には目と目で話せる友が居る

ストレスが溜まると叫ぶ海がある

観覧車老母ははしゃいで子に返る

姫路市 古川 奮水

汗ばんだ空嘆いている温暖化

卒業の土産が話す貝細工

お隣の心がこもる五目飯

子育てを手伝い母は毛糸編む

奈良市 天正 千梢

大広間舟三艘の活づくり

家原寺に落書きしたるその昔

白川郷短い秋を尋ねて見

職業は消しゴム使える仕事です

奈良市 米田 恭昌

秋夜長本を読むより見るビデオ

おもらしをした父さんの哀しい目

窓際の手宛ねられた白昼夢

しきたりの部屋占拠するご結納

大和郡山市 柳原 慧心

うそ泣きの小粒の涙すぐ乾く
定年をけじめにしたい妻が増え
三浪をまたまた運のせいにする
初孫の笑顔笑顔の写真帳

奈良県 長谷川 春蘭

草木の衰えまざと夜に入る
優雅にもシャンソン聞いて散る落葉
失ってから恋しさが追っかける
伸び切った輪ゴム愛しく捨てられぬ

和歌山市 玉井 豊太

普段着の若者らしいお賽銭
奴唄遊んでくれる陣の風
防寒具陽に当てられて目を覚ます
今頃は紅葉 里山おもい出す

和歌山市 青枝 鉄治

屈しない媚びない敵を好きになる
冷やめしを覚悟の筋を通す意気
勇退の名で詰め腹を切らされる
稚魚なりの大志を抱いて群れを出る

和歌山市 山根 めぐみ

無言の行波打ち際に立つ女
しゃんとした生き方したい海くらげ
老いてなお嫁に負けずにアイライン
青い地球へ愚かな線を引いている

竹原市 岩本 笑子

美術館裸婦の乳房も張っている
軽井沢でなくとも秋はやってくる
ふとルーツ探してみよかイワシ雲
玉結び野心を包み込むために

広島県 藤解 静風

暗闇に磔を投げている思い
猿ぐつわして風鈴を仕舞いけり
老人の家か旗日に旗が立ち
美しき野心渋柿あかくなる

鳥取市 前田 一枝

忍び逢い足音のせぬ靴選ぶ
末っ子に嫁ぎ末席慣れて来る
年の瀬に思わぬつけが顔を出す
年金に慣れ平凡に暮す老い

米子市 木村 富美子

寿命だと言ひ聞かせてはみるけれど
ただねむる涙の乾くその日まで
今日泣いて明日は立とう そう思う
祈るだけあなたのために出来ること

鳥取県 幸家 単車

人生の節目に大きな罫がある
渡る世に鬼が多くて困らせる
完走の笑顔さわやか汗光る
ひとり居て酒を暮らしの友とする

鳥取県 乾 隆 風

あちこちで商売上の胡麻をする
冷えきった財布はたいて年用意
ずだ袋かけても首は括れない
こだわりを流して容れる鬻がある

鳥取県 石 尾 かつ乃

コスモスに未練が残る風の私語
木犀の薫り分け合う両隣
風呂桶に顔浮かばせて五七五
わたくしのお宝入れる箱つくる

島根県 藤 原 鈴 江

家族愛なんと素敵な言葉でしょう
油断なく私の体調診てもらう
外は晴れいつまで晴れぬわが心
ひっそりと独り病むのも楽しから

香川県 山 地 マツエ

退屈という幸せにゆれている
貧しさを包んだ風呂敷色あせる
身がまえて生きる悲しい癖がつき
思いつ切り笑おう淋しい日がつづく

高知県 赤 川 菊 野

小さい秋庭の紅葉も今見頃
探しもの出でから眠り深くなる
その時はホームと決めてひとり住む
イヤリング付けた案山子が千枚田

熊本市 永 田 俊 子

煩惱の数見せ柿が熟れている
淋しさを乗せてる無人の観覧車
足跡を波が消しゆく露の世や
世の中が乾いて泣かないメロドラマ

熊本県 岩 切 康 子

松原を抜けて語らう波の音
まぐれでもホールインワンの嬉しさよ
使い捨てアフターサービス忘れさせ
いろいろな考えがある怒るまい

平山繁夫句集『四季逍遙』発刊記念川柳大会

とき 10年3月1日(日)午後1時開場・ところ 新神戸オリエンタルホテル・会費2000円・「晴れる」卜部晴美選・「本」泉比呂史選・「生きる」奥山晴生選・「高い」橘高薫風選・「喝采」小松原爽介選・出句締切2時・各題2句・席題なし・欠席投句拝辞

第18回

ときせん賞作品募集

雑詠2句(未発表句)
選者 大野風柳 橘高薫風
寺尾俊平 去来川巨城
小松原爽介
締切 1月末日
発表 『時の川柳』4月号誌上
賞 ときせん賞 1名
準ときせん賞 2名
佳作 7名
投句料 誌友500円(定額小為替)
誌友外1000円(発表誌呈)
投句用紙 便箋大用紙に作品2句
と住所氏名を明記。
投句先 〒658 神戸市東灘区湊森台
2-10-206 河島いち子宛
選句方法 無記名清記の上、選句。
1句ごとに合計点で順位を決
め、上位10句を入賞とする。
時の川柳社

自選集

正本水客

手も足も出ないと思う空の青
なんとなく自分の影がこわくなり
口裏を合わしてる顔とみられまい
上むいて歩けば雲がたかくなる
澄んだ目で後ろ姿をつつんदै

月原宵明

俎板は不満のみじん切りに耐え
壊すのが面白くなってくる玩具
秋の陽がどすんと暮れて赤提灯
孤独とはポツンと灯一つだけ
漁師町の昼には猫も昼寝する

金井文秋

退屈もなく老いて行くありがたさ
二三次のくしゃみバランス崩す老い
子に楽をさせる長生きしたい
齧らせる嘴がまだまだある元氣
ひよっとしたらの不安もつけて風邪もらい

藤井明朗

あきらめが人生そこに運がある
奥山に暮しを包む長い冬
家庭の日対話が少し足りませぬ
少子化対策長寿日本はまだ続く
新年へうれしい氣力小さくなる

松川杜的

コマージュル岡本綾子も胃が痛む
下手ですが聞いてください般若經
譲られた席うれしさと淋しさと
杖一つ勇氣がないとつけません
耳朶になお飄々としたあのお声(親友I氏逝く)

遠山可住

男性用香水という無駄がある
ネガのまま今年も除夜の鐘を聞く
お賽銭どなたか千円入れたはる
元旦の計画拍手しておこう
君が撰るネクタイ春の風を切る

高杉鬼遊

大山を目いっぱい観て帰り
自由席となりは妻という人と
新聞を謝りながらお断り

飲めぬ酒さほど哀しきことならず
来たわよと訪ねてくれる人があり

波多野五楽庵

釈迦の手の広さを地平線だと思つ

独り言 連絡船はないのだよ

雪月花今年の雪も重かろう

三味線草おまえも消えてしまうのか
薔薇の芽には性教育をしておこう

辻 白溪子

仕合せになつてと女身を引く気

日本語が多少喋れてよく笑う

この頃は妻も負けずに浮気する

不精髭生やし善人らしくない

温泉が好きか夜中も顔が合う

小西雄々

いつの日か枯野は燃えるものを秘め
兄に童話読んでパートの妻を待つ

敬遠の訳知ってるか芸の虫

従順の胸しびれたり疼いたり

身内だと思えど虎は吼えて来る

黒川紫香

見晴らしは虹の松原だけでなし(唐津鏡山)

おくんちの熱気がさせる後ずさり(おくんち祭り)

ふり返ると向こうの女もふり返る

東奔西走まだ九十で落ちつけず

四世代囲み今年も雑煮祝う席

奥谷弘朗

満ち足りた暮しへ感謝忘れない

満足に限界のない欲でほけ

女房に振る白旗は持つている

この先は仏の面で生きてやる

素直には満足をせぬ腹の虫

野村太茂津

幸せは生まれ故郷に満ち溢れ

スケジュール満ちて早々旅仕度

世界地図展げてやがて行く印

新しい自己を探して旅最中

旅は静かに海の深さに溶けてゆく

野田素身郎

作句に集中寝るには惜しい夜のしじま

蠅を追うのも仕事の一つ鮮魚店

鼻くそも乾燥している注意報

孫の成長に反比例するわが身体

孫風邪を幼稚園から持ち帰り

西田柳宏子

いい朝だ妻ハミングの台所
朝市の魚の目玉に睨まれる
肩書がとれると気易い友許り
母の忌によってたかつて作る寿司
やんわりと言われじんわり効く叱言

八木千代

あらいざらい晒した箱は折りたたむ
平素からびっくり箱に慣れておく
大小の箱を使って逃げのびる
水際で貰う大きな玉手箱
身に合うた箱に合点して眠る

阿萬萬的

年金の枠で借金ない暮し
無精髭撫でも考えまとまらず
考えも空転沈む泥の舟
空威張りの男にも似た砂の城
胃薬も持ってグルメのフルムーン

恒松町紅

六畳に幸せ溢れ春を注ぐ
体は一つもう欲ばらぬ初日の出
自分では思っていないお節介
携帯電話太郎花子の文字離れ
まあいいかいとかと半ば諦める

小林由多香

朝のお茶求人欄に目を通す
花屋にはもう満開の春の花
不器用な腕に出合った釘が拗ね
アルバムの色あせてきたきのこ雲
晩学へいそしむ眼鏡買いかえる

藤村メ女

しみじみと愚痴を聞き合う姉妹
追伸に母の気遣い盛ってある
追伸の結び目にある深い愛
ロンドンの夜霧に濡れた子の便り
かさこそと落ち葉転がし遊ぶ風

河内天笑

ペテン師とペテン師の鼻ショートする
女房に営業笑いしてしま
すれ違いざまに火花を出すミンク
お人好しその弟もお人好し
八五〇号同人数と背くらべ

橘高薫風

寅年に候 寅の年の旦
元旦や温室効果ガス削減
箸紙もいの一は匠殿
四つの手が卍となりぬ歡喜天
冬の酒 唐竹割りに胃へ落ちる

同人特集

私の一句

元旦の母なる川は朱金の帯
 少しだけ神をおそれて恙無し
 逃げおおせたら蒔こうと思う花の種
 北の人北の形をして生きる
 一匹の蚊にためされてゐる座禪
 長い人生泣いて笑って夢芝居
 歳相応分相応へ風の私語
 わたしにも冬が来ました仏さま
 春宵千金北斗の水を頭から
 遠くから見れば私の絵も光る
 この街へ人の匂いがする安堵
 曾孫誕生桜満開喜寿歡喜
 寒牡丹の藁合掌のかたちして
 新妻に止まる螢が情そそる
 縄文の壺で咲く日を待った種

豊中市	橋	高	薫
竹原市	森	井	菁
和歌山市	桜	井	居
大阪市	榊	千	秀
八尾市	宮	西	生
高槻市	川	島	諷
大阪市	津	守	柳
呉市	榎	田	英
鳥取市	武	田	帆
米子市	青	戸	田
鳥取県	黒	田	く
尼崎市	春	城	に
尼崎市	春	城	子
寝屋川市	北	城	武
枚方市	海	岡	庫
	老		坊
	池		代
			吉
			洋

成人の写真で先祖と乾杯す
 ふっ切れてからは雑音だと思ふ
 満点の笑顔に騙されてあげる
 哀号と背をそらせて百済仏
 傘寿まで生きてこの世にまだ未練
 冠を捨ててひとりの軽さかも
 笛吹いて出れば見知らぬ人ばかり
 いい出逢い笑い仏の山の途
 押花展花は命を永らえる
 靴紐を結び直して米寿まで
 ドラの音に港の朝がやってくる
 新年を祝う御節は娘の心
 善人を演じて妻に叱られる
 雲の動きへ木の芽草の芽
 初孫を待つ紋風呂敷が温かい
 人間が透けて見えます秋彼岸
 突然で未だ受け皿が間に合わない
 花ぐもりまだ恩返ししていない
 恐ろしいことがはじまる多数決

海 南 市	松 原 市	出 雲 市	弘 前 市	出 雲 市	今 治 市	高 知 市	高 槻 市	香 川 県	香 川 県	島 根 県	東 大 阪 市	米 子 市	鳥 取 県	大 阪 市	和 歌 山 市	京 都 府	松 山 市	岡 山 県
三	小	園	一	富	越	川	井	工	木	小	森	八	石	井	木	稻	宮	二
宅	池	山	戸	田	智	竹	上	藤	村	玉	下	木	尾	上	本	葉	尾	宗
保	し	多	ツ	蘭	一	松	照	吟	あ	満	愛	千	か	白	朱	冬	み	吟
州	げ	賀	ネ	水	水	風	子	笑	き	江	論	代	乃	峰	夏	葉	の	平



米寿過ぎても酒と煙草はやめられぬ
 自分史も下巻に入る喜寿祝い
 子育てがペットののために手抜きされ
 親切に大小は無い手が温い
 新しい世でもどっこい古酒の味
 霧雨に金欄緞子も濡れてゆく
 君死に給うことなかれ粥を煮る
 おうおうと話が合うてお正月
 春や春心ときめくひともいて
 花の位置風の流れも丁度いい
 方位学行きたい方を吉とする
 滅却のできぬ心と生きている
 影を見てごらんよ人はみな同じ
 思い出が心の中で弾けそう
 凡人でよかった平和な日が続く
 満ち足りた一日猛暑気にならず
 今日も元気にポストへ種を播きにゆく
 やつと芽が出かかったのに踏みつける
 還付金が出る楽しみの申告書

倉敷市	柳井市	米子市	仙台市	岡山県	高知県	竹原市	和歌山市	和歌山市	廿日市市	和歌山市	吹田市	八尾市	出雲市	和歌山市	鳥取県	十和田市	茨木市	藤井寺市
野田	弘津	石垣	川村	荻野	赤川	時広	川上	川上	林野	宮口	栗谷	宮崎	石倉	池永	羽津川	阿部	藤井	笠原
素身郎	柳慶	花子	映輝	鮫虎	菊野	一路	富湖	大輪	魁光	克子	春子	シマ子	芙佐子	正甫	公乃	正進	正雄	吸江

言い訳は止そう男が軽くなる

名城に風情を添える雪月花

輪廻転生雪降りつもりまた消える

わが子らを鷹と信じて育て上げ

新たなる年へ余生の胸を張り

鳥瞰図わが家は物の陰にあり

絵の具よりわが自画像は墨がいい

人生のゆとりおじぎが深くなる

公園のバラも一輪車も笑う

産声のこの児と飲める齢を繰る

さよならのあなたの背なにある宇宙

ほっぺにチューーこんな親でもうれしか

予告なく来ても母なら出来る膳

杖買えば生涯の杖あると言う

紅潮の頬が語るよ大勝利

あたりまえと思ひ込んで有難いこと

心機一転太いパイプを切り離す

転ぶときは転びます杖持っても

階段を登る友みな軽快に

和歌山市 青枝 鉄治

藤井寺市 中島 志洋

弘前市 波多野 五楽庵

鳥取市 春木 圭一郎

堺市 黒田 真砂

生駒市 麻生 アート

鳥取市 西村 黙光

出雲市 岸村 桂子

寝屋川市 平松 かすみ

箕面市 椎江 清芳

米子市 鷲見 正子

今治市 矢野 佳雲

豊中市 江口 明光

豊中市 湯浅 馬洗

大阪市 松尾 柳右子

大阪市 本間 満津子

鳥取市 坂田 和歌子

大阪市 金井 文秋

松原市 北野 久子

ジャンプする新春の帽子を買いにゆく

明日こそは平安であれ蓮の白

敬遠を嫌う頑固な床柱

あわただし理事長の名を抱いたまま(智子さんに)

イルカショー中に似たような落ちこぼれ

軸足をすっかり二十一世紀

羽繕いせねば明日へ飛び立てぬ

弥陀の手に正しいものを止まらせる

究極のグルメと思うにぎり飯

恋をしてやせて結婚してこえる

遅い芽の方が追い越しそうになる

輝いていたいガラスが光恋う

階段を降りる一身上の都合

中心の狂った独楽は揺れに揺れ

お互いに生きようと言ひ別れけり

めぐり逢い残り少なき春帽子

リフレッシュの松竹座とは同い歳

この歳で迷うことなし今日の無事

二十一世紀は傘寿で乾盃だ

羽曳野市 吉川 寿美

京都市 都 倉 求 芽

岸和田市 芳 地 狸 村

大阪市 正 本 水 客

奈良市 米 田 恭 昌

加古川市 吐 田 公 一

吹田市 茂 見 田 公 一

倉吉市 最 上 和 枝

吹田市 石 原 靖 巳

大阪市 中 田 あい子

米子市 野 坂 なみ

大阪市 玉 置 英 子

米子市 政 岡 日 枝 子

大阪市 北 勝 美

豊中市 田 中 正 坊

貝塚市 池 田 寿 美 子

豊中市 滝 北 博 史

大阪市 辻 川 慶 子

大阪市 西 田 柳 宏 子

百歳を越えるつもり
の飯茶碗

親心美人と
思ってお振り袖

赤札は赤札
なりの消費税

チャンス到来
吹き矢を持たぬ蝸牛

人生の縮図
が見える駅勤務

豆腐崩す殺意
ではない愛である

どっこいしょ
よいしょが我が家の合言葉

仲直りどちら
か嘘を秘めている

座禅堂ミク
ロの風を聴きわけ

上向いて歩
きませんよ丸木橋

裸木のその
正直に脱帽し

謹んで御辞
退独居老人会

はずかしい
ほどの轍を振り返

六法を繰る
から敵にあなどら

曼陀羅の真
ん中へんに母在す

あるがまま
ひたすら生きて石の詩

喝采の消え
た舞台で妻と舞う

禁煙と書い
て地球と果てぬ旅

八月の海に
聖書を投げ捨てる

和歌山市 玉井豊太

茨木市 島元ふみ

庫津市 久保正劍

青森県 諏訪柳々

大阪市 川端一歩

今治市 野村京子

河内長野市 井上喜醉

富田林市 片岡智恵子

富山市 舟渡杏花

倉敷市 田辺灸六

奈良市 天正千梢

寝屋川市 岸野あやめ

岡山県 小林妻

美祿市 安平弘道

堺市 山本半銭

弘前市 岡本花匠

竹原市 古谷節夫

富山市 酒井輝

高知県 小澤幸泉

伊勢神樂見えていた日が疼きだす

思ひ出の中の嬉しいこと数え

矢面に立つと不器用ばかりでる

はじめのはじめ人間もやわらかい

男坂のぼりつめれば釈迦の風

じいちゃんの馬鹿その齡で二日酔い

雪を賜る馬鹿な私の頭にも

花ことば人のやさしさあたたかさ

親の愛重たすぎると言う若さ

にんげんと鬼と行ったり来たりする

脱皮した蝶は昔を語らない

月の出の大きさへ手をさしのべる

職業欄主婦と書いて泳いでる

水たまり五重の塔がまたげない

赤とんぼそうしてみんな居なくなる

アバウトが好きにじみ出る人間味

早春が待ち遠しいと猫の恋

現役でまだ狩人の目をしてる

仏にも鬼にも会わず余生なり

島根県	島根県	島根県	西宮市	芦屋市	相生市	箕面市	鳥取県	松原市	神戸市	兵庫県	熊本市	横浜市	熊本県	京都市	奈良県	豊中市	大阪市	和歌山市	守口市
堀	堀	堀	山	黒	中	岩	新	玉	木	遠	永	菱	岩	松	長	井	清	細	結
江	江	江	本	田	塚	津	家	置	村	山	田	田	切	川	谷	上	水	川	城
正	芳	義	能	礎	よ	完	重	貴	代	可	俊	満	康	杜	春	直	利	稚	君
朗	子	子	子	石	う	司	人	子	子	住	子	秋	子	的	蘭	次	武	代	子

足跡を思う人生一度きり
 もういいかいまあだだよとは死ぬ話
 いい夢の種を枕に入れておく
 矢印の道を私は歩まない
 海の絵に夕陽の赤がよく似合う
 故郷のすすきが招く急がねば
 どんな夢盛ろうか白い皿がある
 箸のある場所しつかりと見て座る
 身に覚えのないよろこびをあこがれて
 許そうよ天井をみる星をみる
 何にでも挑戦きらり輝く目
 いくつ切っても大根の白嘘がない
 良い話だったゆつくり受話器置く
 煩惱よ消えよ消えよと茶筌ふる
 過去憶う未来を思うしずかな日
 花びんから愛がこぼれるいい日和
 来年のことふと過ぎる花の下
 稲妻のようなひらめき妻の勤
 蟬しぐれ急に整理をしたくなり

八尾市	枚方市	鳥取県	出雲市	吹田市	富山市	岡山市	西宮市	寝屋川市	富山県	鳥取県	鳥取県	鳥取県	鳥取県	岸和田市	大阪市	大阪市	大阪市	
高橋	二宮	林	小白金	瀬戸	島	山本	門谷	富山	増田	土橋	田村	岩崎	土橋	土橋	岩佐	神夏磯	板東	町田
夕花	山久	露杖	房子	まさよ	ひかる	玉恵	たず子	ルイ子	紗弓	きみ子	みさ江	はるお	睦子	ダン吉	典子	倫子	達子	

生きている証明の現況届

小さな靴一つわが家にあるなごみ

半眼に内なるものを見つめる眼

お化粧がうまくていつも適齢期

のんびりと峠を下る明日も晴れ

夢多き少年だった白い眉

ゆっくりとして来たはずの旅づかれ

花がらを摘む穏やかな日に戻り

天国の妻から届く離縁状

声高に喋りたくなる自己過信

親ばかを笑った過去があるわたし

ようこそと明日を笑顔で迎えたい

その子にはその子の絵があり信じよう

目は開けているのに何も見ていない

母子の声ひびき風呂場の灯が温い

故障したカメラを提げて旅にいる

夫婦にも時効になった橋がある

松はみどり冠木門から出る明治

うつろうて気づかいあって四十年

和歌山市

豊中市

寝屋川市

黒石市

青森県

今治市

奈良市

京都市

宝塚市

堺市

横浜市

米子市

富田林市

鳥取県

八尾市

八尾市

香川県

高石市

神戸市

岩本美智子

吉田あずき

堀江光子

相馬一花

西谷大吾

月原宵明

宮口笛生

大河未佐子

上田佳秋

楊井二南

後藤早智

澤田千春

松本今日子

鈴木公弘

生嶋ますみ

内海幸生

池内かおり

浅野房子

池田善守



壇に立ち影一つなしえん尾服

燃えるまでじつと火の番しておこう

新しい入れ歯でさらうドイツ曲

リリーフの妻が後ろに居る安堵

逝きし人偲べよ泣けよ雨はげし(智子さんを悼んで)

まるぼちやの顔に老斑ばかり増え

五十年わたしの螢みな翔んだ

小遣いをやれば行方がわからない

雲流れる今日あるように明日もまた

土に還る証明などはいりません

友情の厚さへたまる肩の凝り

もう一つの旅路へ誘う露の臺

原風景にステッキの父がいる

爪研いで白旗振ったことがない

明日はあす今日懸命に咲いて生き

梅桜牡丹紫陽花大和みち

女三人体重計へかしましい

痛みすっかり忘れた頃にまた転ぶ

風化さす魔術をもっている時間

茨木市

米子市

町田市

宇部市

大阪市

出雲市

米子市

大阪市

大阪市

枚方市

和歌山市

茨木市

宝塚市

米子市

大阪市

大和高田市

岸和田市

吹田市

香川県

堀

田

竹

平

渡

吉

光

小

清

前

福

井

嵯

峨

小

岸

原

山

川

中

内

竹

部

岡

井

林

水

本

上

根

西

井

寺

本

本

本

崎

崎

良江

亜弥

紫鑄

実男

さと美

きみえ

玲子

トメ子

絹子

たもつ

英子

森生

保子

雄々

東雲

豊平次

さよ子

希久子

ひかり

蟻の行列みな味方です冬仕度

草繁る如く煩惱絶えもせず

これからを委ねる神の御手に会う

明日生きるめしをしつかり食べておく

真ん中で睨みの利いた駒ひとつ

限らない欲に生かされ生きている

恩讐の過去薄らぎて共に老い

軍歌といふかなしいものを口ずさむ

楷書から行書となつて生きのびる

パソコンの中で子供の樹が伸びる

復元の住居茶碗も置いてある

手さぐりにスローカーブを先ず投げる

赤藍青花ものがたり憶うひと

よく回る独楽は静かに立っている

きぬかつぎ口へつると温め酒

質問しただけ与党聞いただけ

深い秋絵皿にとかすひとり言

婦唱夫随また良しと説く披露宴

あつたかい巨樹だな尊敬してしまう

東大阪市

静岡県

横浜市

鳥取市

大阪市

西宮市

岡山市

豊中市

米子市

出雲市

和歌山市

大阪市

伊丹市

横浜市

大阪市

岸和田市

寝屋川市

和泉市

米子市

安永 曉子

蘭田 猿沓

清水 潮華

小林 由多香

河井 庸佑

奥田 みつ子

井上 柳五郎

安藤 寿美子

林 荒介

竹治 ちかし

堀端 三男

小林 周信

山崎 君子

菊地 政勝

大塚 節子

田中 文時

柴田 英壬子

岡井 やすお

林 瑞枝



この黒い土にいたたく生きがいよ
 ひっそりと恋の時効を待つ女
 待つ人の居るしあわせのベル鳴らし
 抜け殻になりたくなくて動いてる
 大黒柱がある古い愛の形
 どん底を気楽に生きて出られない
 傘寿まで一瞬でした仮りの宿
 山頂の露天風呂から見る夕日
 打ち込めることのひとつや深き天
 照り返す鏡が母の胸にある
 過疎語る父に淋しい子煩惱
 春の音まさしく木の芽草の芽に
 雲海の果ては極楽かも知れぬ
 ペダル漕ぐ子へ後押しの手を放す
 環境にやさしい顔のおばあさん
 風の告白ゆらりかわした風見鶏
 まっとうに生きた茶碗にあるひびき
 人生とは何ぞや風の吹くままに
 たしかさは老ゆることのみ深い皺

倉吉市	和歌山市	八尾市	弘前市	鳥取県	西宮市	寝屋川市	大阪市	松江市	鳥取県	和歌山市	唐津市	唐津市	羽曳野市	竹原市	米子市	岡山市	香川県	弘前市
淡路	玉置	大内	佐治	谷口	亀岡	高田	上江	恒松	西原	田中	山門	山門	酒井	小島	茂理	川端	山地	斉藤
ゆり子	当代	朝子	千加子	次男	哲子	博泉	勝子	町紅	艶子	輝子	夕ミ	幸夫	一壺	蘭幸	高代	柳子	マツエ	荔



確執へ雪が積ってゆく時間
 陋屋を守る決意を蜘蛛がくれ
 生かされているのも忘れ愚痴しきり
 風呂浴びる喜寿も一人じゃ浮き草か
 忘れたい人の手紙の封を切る
 やがて咲くやがて散るから美しい
 情熱の果てかもしれない流れ星
 流されているのであれば流れとく
 合鍵を売りに行こうか朧月
 魂に逢えたでしようか宇宙船
 定年の駅で自適の風に乗る
 初春や虎の尾しゃんと跳びはねる
 うっかりとしっかり我が家平和です
 心配へのほほんとして飲んでくる
 珈琲に砂糖たっぷり無頼なり
 ええ顔になってきはった笑い皺
 満八十これから自由な絵を描こう
 よろこびを勝ちとる汗は惜しまない
 簡単に振らぬ尻尾を持っている

尼崎市	大阪府	泉佐野市	八尾市	八尾市	西宮市	岸和田市	静岡市	鳥取県	寝屋川市	和歌山市	藤井寺市	大阪府	弘前市	寝屋川市	弘前市	出雲市	羽咋市	和歌山市
住	鈴	阿	高	高	西	高	安	上	太	古	高	奥	今	坂	蒔	久	三	福
谷	木	萬	杉	杉	口	須	本	田	田	久	田	田	上	上	苗	谷	宅	井
石	節	萬	千	鬼	い	金	晃	俊	と	和	美	良	生	高	果	ま	ろ	桂
舟	子	的	歩	遊	わ	太	授	路	し	子	代	子	恵	栄	林	こ	亭	香



師の恩に報いるために師になった
 悪い奴と言われみんなに親しまれ
 ホーランエンヤ覚えていました肩ぐるま
 温^ぬ水にひたり想いにひたり過去未来
 書き忘れ日記昨日が出てこない
 こぼれ種自分の居場所考える
 ソロバンに合わぬ余生の趣味に凝り
 飢えたこと伽話のように聞く
 長男といえども嫁にまるめられ
 しあわせのまん中少し腰を引く
 命ある限りすてきに輝こう
 マラソンの横で親父が走ってる
 栗飯の温さをくばる季のひとつ
 招かれておしどり夫婦演じきる
 長生きをする絵にトンボ飛んでいる
 風の音独り暮らしにじんとくる
 さて秋よまだ魂は渡せない
 梅生姜らつきょう漬けて梅雨たのし
 この森は初めてなのになつかしい

橋	本	多	哥	由	鳥取県	岸和田市	島根県	島根県	島根県	島根県	和歌山市	松山市	堺市	宝塚市	西宮市	吹田市	尼崎市	鳥取県	鳥取県	鳥取県	鳥取県	鳥取県	西宮市	尼崎市	堺市	堺市		
橋	本	多	哥	由	橋	寺	小	藤	石	山	白	山	口	田	石	春	嶺	千	代	笑	女	て	る	紫	香	香	中	
本	多	哥	由	由	本	寺	砂	原	原	口	石	口	田	田	田	田	田	元	村	村	元	元	元	元	元	元	元	
由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由

榎本聰夢

東野大八

「川柳という文芸は、五七五という器に、作者のその時々をの思いを無駄なく盛って、かつ、いささかの余情を残しつつ表現する文芸である」と私は考えている。

しかし、それは目標、または理想の姿であって、現実はなかなかむつかしく相当作句歴に富む作家にしても、自他ともに許す会心作を生む確率は極めて低いのである。

去る昭和四十八年刊行の近江砂人著『川柳実作入門』には、着想篇と表現篇に分類して説かれているが、私は近年現代川柳作品の表現スタイルについていわゆる整合性の欠けたものが頻出する傾向に少なからぬ関心と疑問を抱いているのである。

整合性とは何を指すかといえ、五七五のリズム感を堅持する反面、一切の首尾にロス

をさしはさまぬ配慮をすることであり、換言すれば字足らず作品について安易に五七五定型への補完をしないことである。

私は各柳誌の作品欄に、右のような句を丹念にチェックしながら、上位にランクされた中にも相当欠陥作の見出されることを不可解に思わざるを得ない。自選作を除いて、それは選者にも一半の責任のあることで、尚更困惑させられるのである。(以下略)

新聞柳壇に、ふと心惹かれて投句以来、かれこれ五十年、ほとんど浮気もせず、ひたすら『番傘』という長い橋を歩きつづけている私にとって五七五調と批判精神の、例えれば金科玉条というべきものである。ところが川柳界にも伝統を重んじ、保守に甘んずるを潔しとせず、各方面に革新・進歩的思想を以つ

て、川柳の向上、発展を図ろうとするグループが現れ、その主張に応じた作品の花を咲かせているのが現代川柳の鳥瞰図であろうかと思われる。(以下略)

以上は昭和62年6月号の「番傘」誌上における榎本聰夢稿の「柳論指定席」の「二つの疑問」と題する二頁にわたる柳論の抄録である。全文記載したいが紙幅がないので遺憾ながら割愛したが、あぶらの乗り切った筆者晩年の八十歳における筆峰である。

いかにも番傘本格川柳を多年一筋に歩き通した筆者の想念が凝り固まった一文と注目した次第である。

本名榎本靖、柳号は夫人の名の聰からとられたものとする。明治40年9月24日東京小石川生れ。旧制三高を経て京都帝大を卒業した昭和8年、大阪市役所に直ちに採用されたものの、海外勤務にもつづける東亜海運へ転じ、若干の上海勤務を経験したが、戦局の推移により同社は解散。戦後は行政監察局入りして公務員となり岡山・広島・神戸等を歩き、退官後は大阪家裁調停委員、大阪府民生児童委員などを勤めた。

川柳は昭和13年新聞投句から初め、岸本水府の「番傘」とウマがあい、同16年番傘本社

同人、同時に番傘川柳社山陽総局長を経て戦後は本社常任幹事、事務局長兼編集部長にも就き、一般近詠選者も勤めた。

終戦時には、東京番傘川柳社の創設にも加わり、中国新聞柳壇選者（S27）、広島放送局柳壇選者で岡山放送局柳壇選者も兼ね、番傘北斗会同人（S32）と共に堺番傘川柳会顧問も勤めた他、同会機関誌「ちぬ」や、東京移住後は、川柳新聞柳壇選者で新人育成につとめ、平成元年11月日本川柳クラブの創立には、満場一致で会長に押された。

何事によらず「スジを通す」人柄が、先生嫌いの極め付などで多くの番傘ファンを魅了した。

「★ある日の朝日の天声人語に―歌を訳すのはニワトリの羽をむしりとるようなものだ―といった人がいるが、歌は解釈される身を細らす。音律を響かせ、相像力を刺戟して、おのずと情趣をかます。繰り返し口ずさむうちに、いいなあ、と思うようになる」と記されていた。川柳においても同様、第一印象で「よい」と感じ何度でも鑑賞するうちに、何となく魅了されるといふことで充分であり、句の解釈をやかましくいふ必要はないように思われる。（昭49番傘後記）

番傘誌の編集手帖はこんな調子で

「川柳界に、先生」といふ言葉は要りません、小生は柳界に先生とか弟子とか門下生などという言葉は存在しないと思っているし、全く不必要であるというのが永年にわたる私の持論であります」

などには文句なくつむじ曲りの当方はイカれて、この「編集手帖」は久しい間、筆者の注目度となっていた。

「私は『詩性に軒を貸して川柳の母屋を失つては元も子もない。だが捨て難い一面のあるのも事実だから、それはそれで短詩としての『ジャンルを確立して独り歩きをすべきでないかと思ふ』の持論（二月号柳論指定席）の主張の結論に賛意を表する次第である」の一文は、この人物の川柳観のきわめ付として今も銘記している次第である。

平成9年1月24日死去、享年89、秋柳青。最後に「川柳番傘同人句集（昭60刊）誌上におけるアンケートの設問に対するこの人らしい答えとその作品を挙げておく。

▽あなたが川柳を作り初めたきっかけは。

―新聞柳壇に興味を感じ、投句入選以来です。

▽川柳のよいところを一つか二つ。:

―人間諷詠であり、反省の資となるもの

▽あなたにとって川柳とは…:

―よいパイロットで、アドバイザーです。

▽知の川柳、情の川柳、意の川柳のいずれをとるか。

―強いていえば知の川柳。

▽川柳は俳句、短歌を超えるだろうか。

―超える必要はない。同列になると思う。

▽次代の人々へのメッセージ。

―個性を尊重、一歩前進を心掛けて下さい。

▽あなたの好きな言葉。

―断じて行えば鬼神もこれを避く。（史記）

みなライバルですと心に鞭をあて

物忘れ甲乙がない老夫婦

天気予報に合わせて妻の選る外着

百歳がゴロゴロしてる御代がくる

私にも疑惑がかかる流れ弾

酒たばこ止めよといわぬ医者が好き

安請合した原稿へ徹夜する

ふえるのは白髪ばかりで知恵が出ず

厄年の男が迷う縄ばしご

▼次号は「櫻谷 寿馬」

『万歳』

清博美

なりて出入の家々をまはりしなり」とあり、また『詞葉の花』には、「アノ万歳は三河から来る、才蔵は上総房州のものが多く、それが四日市へ大みそかの晩に、いくらも列んで居ると、万歳の太夫が才蔵にをかしい事をしやべらして、いいのを見立て、抱へるといふ事ぢや」ともある。馬鹿面でしかも機転が利くという資質を要求されたのである。

万歳の起源やその他細かい事についてはよくわからないが、例えは、『百草』には、

「民間歳要記云、春の初に万歳とて色々の祝ごとを歌ひ無事あり。是も内裡の踏歌の事を下に学びたるにや、禁中の踏歌というは、昔は正月十五日の頃、京中の男女の声よき者を召集め、年の始祝ひ詞を作り舞をまはせ給ふとなり。又月の頃ならねども、やみの夜にも有しにや。四十代天武天皇三年正月、大極殿に渡御たまふて、男女分つ事なく、闇の夜踏歌の事ありとかや、一説に、仁明天皇の御宇、丹州より三百歳の民有と聞え候。召て仁寿殿にて寿を祝奉りて舞を誦れる。是今云ふ万歳の事にて、千寿万歳といふ是初なり」などとなり、また『三養雜記』も、「万歳は、

男踏歌の余風なり。花鳥余情に、正月十六日の節会をば、女踏歌といふ。舞妓す、みいづゆるぬなり。男踏歌は十四日にあり。殿上地

元旦の江戸の町には、はやくも万歳が姿をあらわし、その得意先の家々を廻つて、新春をこほぎ、御祝儀を貰い歩くのである。

江戸へ来る万歳は多くは三河から出たもので、従つて三河万歳とも称せられた。烏帽子大紋に両刀を帯し、才蔵なる脇師を伴い、鼓に合せて目出度い初春の辞を連ね、節面白く唄い囃す。多くは滑稽諧謔を交えて人を笑わすのだが、甚だ卑猥な文句を唄い、また所作をするため、若い女性達はさすがに正視出来なかつたようでもある。

『守貞漫稿』は、「江戸に来る者は三河を第一とす（故に専ら三河万歳を唱す）。而て遠江等もあり、尾張にも万歳あり、他国には不レ出狀。江戸に来る万歳の扮太夫は折烏帽子に麻布の素襖を着し大小二刀を帯る。素襖

色無レ定紺を専とし記号亦無レ定。袴惑はく、り袴又は常の袴をも着す者あり。侍烏帽子を不レ用ことは幕府無官の士着レ之歩行にて登城す、故に興レ之混ぜざる為也。才蔵は侍烏帽子に素襖を着して無レ袴也。或無三素襖一

是亦携ふ。此才蔵、多は総州の夫年末江戸は日本橋四日市と云所に集る。太夫扱レ之て履ふ。これを才蔵市と云ふ。……江戸に来る万歳の才蔵と云もの昔は下総あびこ村の農夫多し、近年はあびこの者もあり、或は太夫自国より伴ひ来るもあり」と説明している。

才蔵市については、『東都歳事記』に「(十二月)下旬の夜、日本橋の南詰四日市にありて、三河万歳江戸に下り才蔵を備ふ、才蔵は安房上総又は古河の辺より出る、太夫才蔵の巧拙をえらび、価を定て雇ひ、正月に

下の四位以下の輩、しかるべきところをめぐりて、さいばらをうたひ舞かなづることあり。これはむかし、正月十四五日に、京中の遊士、月に乗じて、あなたこなたへめぐり、うたひて舞しより事おこれり。末の代に千秋万歳といひて、逸興をもよほすことあるは、これらの余風なりと見えたり」ともある。

ところでこの万歳、誰でも営業出来たわけではなかった。『譚海』に、「三河万歳年初に来るもの、土御門家の証状を出さる。それを持ちて関所等も往來してくるなり。其証状板や行にせしものなり。万歳一人ごとに帶する事にて、三年に老度書替あり。総名代に一人証状を集め持参状況し、新証文に引き替へ帰るなり。引替の時一枚に付銀老兩づつ土御門へ指出すことなり」とある。土御門家は室町時代以後唱門師を支配していた家柄である。つまり土御門家の証状がないと万歳を営業できない。その証状を得るためには、三年に一度銀一兩づつを支払わなければならなかったのである。

さて、最後に面白い話が二つあるので、紹介しておく。

『貴賤上下考』に、「正月十一日を嘉例として、嵩谷の宅へ万歳来て祝ふ、その日は先生業みて万歳を待、祝儀済て、盃を出し、う

なぎの蒲焼を振舞て、共に酒くみかはして遊ぶ、先生が云、万歳は正月中いづれにても、ぞう煮、数の子、牛房、ごまめの重箱より外出さぬ故、うなぎを振舞てやれば、さを嬉しからんとと思ひ立にて、過つる年よりはじめし事が嘉例と成て、此祝儀を用ゆるとぞ、高名の人はどこかはりたる事ありと、子が父なるもの物語られたり」と。言われて見れば成程と思うが、うなぎの蒲焼とは少々油っこ過ぎはしないかとの懸念も出て来る。

また、『宝曆現來集』に、「文政四年之春、武家へ例年正月五日万歳来る、或時亭主尋るは、いつも被レ参し七十計の老人來りしに、当年は二十四五歳の男來故、いつもの老人いかゞなりやと問ければ、いつも健なると彼答けり。又其翌年彼若き万歳に、老人いかゞ成りと尋ければ、いつも健なりと又答けり、なる程万歳の答には能答なり、万歳は死すと云事忌みける、人死して骨肉は腐れても、魂迄腐る事なく、さすれば魂は万歳なり、彼の万歳の答面白答へなり」とある。父であろう老人が亡くなり、その息子が代つて江戸に出て来たのであろう。しかし、新年をことほぐ万歳に、「死」の言葉はタブーである。故に「いつも健なる」と答たというので

*

万歳は雑煮半ばの春の興

五 6

— 春興(春の楽しみ)だという洒落

わかま、な子八万歳を引いて来る

明三義 2

— 馴染ではないのに。

万才に三ツ四ツ風がおりるなり

明五智 1

— 風をあげていた子が万歳を見に。

こ、らでのぶげん万さい三日来る

安六礼 4

— 万歳が三日も来るとは大金持ち。

万才八座敷へ供をつれて来る

安四叶 1

— 万歳は部屋で舞つた。供は才藏

万歳の口ほどづみはたらかす

初 19

— 鼓は持っているが、それほど使わず。

かんじんの所を万さいそつといひ

一五 24

— 下がかったところは小声で。

まんさいハすつとの皮の足つかひ

拾一 12

— 抜き足差し足の足使い、腰使い。

万さいを姫はけいしてとぶざける

二二 9

— 卑猥な詞や所作に恐れをなして。

万歳を姫お、せつなく

傍一 1

— 万歳が未だ佳境に入らぬうちは。

万才を下女ありつたけ笑ふ也

七 5

— 下女は腹の底から笑う。

万才ハ舞ひ納めると不人々相

二二 28

— 演技を終ると常の顔に戻る。

秀句鑑賞

同人吟濱野奇童

—12月号から

ありがとう八十六の誕生日

堀江 正朗

川柳ブームと言われる今大切なことは、川柳人が、川柳に自信をもって川柳を愛することだと思ふ。

最近、ソフトバレエ、ビーチバレエなど、バレエボールに似て非なるスポーツが流行している。それぞれ、バレエボールを好む人達が、その目的によってルールを変えて独立したものだと聞いている。

575を基本とした文学にも、俳句そして川柳のほか、雑俳と言われるものまで、それぞれ活動している。川柳は苦難のあげくやつと文芸としての地位を確立したが、だからといって詩性のみ溺れていては、やがて俳句に吸収されてしまう。ある人が「やがて俳句は川柳に吸収されてしまっだろう」と言っておられたかということ聞いたが、それは川柳人の独りよがり過ぎない。

川柳には川柳独自の良さがあるはずである。川柳人が、本当に川柳を好きになり、川柳を愛して行くこと、これが今の川柳人に課せられた大切なことではないのだろうか。

心臓にお礼を言った事がない

林 荒介

水にしろ空気にしろ、最近公害が叫ばれ出してから関心が向けられるようになってきた。母親の胎内に宿ってから今日まで、一時の休む事も知らないで黙々と動き続ける心臓。何とお礼を言ったら良いのでしょうか。大切なものの大事なことを意識しないで暮らしていることが多い。そんなことを意識することが大切なのだろう。こんなところに川柳がある。

秋のピアノ恋は続いているようだ

小島 蘭 幸

窓越しに漏れて来るもの悲しいピアノの響きに、乙女心へ思いを馳せた作者。「いるようだ」の下の余韻に、何とも言えない温かさ、美しい詩情が漂う。

大欠伸ばかりしているしまい風呂

土 橋 はるお

家族主義の崩壊したといわれる今日、主婦がしまい風呂を使うとばかりは言えない。しかし、地方ではまだまだその仕来りが残っている。主婦が、しまい風呂でやっつくつろぐ作品は良く見かけるが、この句は大欠伸ばかりしているのである。疲れ果てた主婦の姿が浮彫にされている。川柳のユーモアはこんなところにある。

ロボットに斬られた首を売り歩く

吉川 寿美

現代を厳しく風刺した作品である。機械化された職場の働き手はロボットである。工場の中に働く人の姿は疎らである。農村で工場誘致が盛んに行われているが、雇用には程遠く、過疎の歯止めには焼石に水。リストラの名で職場を追われ職を失った人間は、職を求めて当てもなくさまよう。こんな深刻な内容をユーモアでまとめた作者の手腕に敬服。

ロダンの像も明日はきつと立ち上がる

梅田 宣司

考える人、いつまで考えたら名案が浮かぶのだろうか。考える人よ、人間は行動を起こすことが大切なんだよ。他人の言うことばかり気にするから、自分の票のことはかり気にするから動けないんだよ。明日はきつと立ち上がる。そう信じたいですね。ロダンはそう叫んでいるよつだ。

老人の家で野良猫欠伸する

荻野 鮫虎狼

情況は異なるが、「置炬燵猫も旦那の顔に倦き三太郎」の句を思い出して吹き出した。高齢化社会の中で、趣味も何ももたない人は哀れ、空虚である。住み着いた野良猫も退屈してしまつ。おおいに川柳を楽しもう。

目が開けば見える所に居てあげる

木村 富美子

重態のご主人の付き添いであろう。どうして上げることもできない焦燥感にかられながらの看病である。神に祈りながらただそばに居てあげるだけ。ふつと気がつかれたご主人との眼と眼の会話。中七に夫婦の愛情がひしひしと伝わって来る。全快の日の一刻も早いことをお祈り申し上げる。

啄木の小蟹が砂の足を這う

林 瑞枝

「砂の足を這う」とは言い得て妙。今のご本人は蟹と戯れるほどの境遇ではない。けれど、蟹の方から擦り寄って来ているのである。一向に明るさの見えてこない日本経済の動向を重ねると、砂の足はどうやら日本国民であるよつだ。空恐ろしさを感ぜさせられる句。

ベルシャ猫 鏡に恋をしています

岩崎 みさ江

絹状の毛のふさふさしたベルシャ猫が、鏡の前でしきりに顔を撫でている滑稽な姿。ただそれだけかもしれない情景から、化粧に余念のない妖艶な女性の姿が浮かんでくる。ベルシャ猫がドラマを生む。この恋がどう発展するのだろうか。いろいろと想像されて面白い。どんどん広がつて行く句は佳句である。

誰が死んでも時計は止つてはくれぬ

時 広 一路

考えてみれば、時間ほどすべてに平等なものはない。地球が回り続ける限り、寸秒の狂いもなく、社会の動きには関せず時を刻んで行く。この時の中で生を受け、やがて死を迎え次代に引継いで行く。さて残されている時間を予測するすべもないが、無駄にはしてなからぬ。時計は止まってくれぬから。

味方から子供を一人ずつ外す

鷺 見 正子

親離れよりも、子離れのできないのがどうも昨今の事情のようである。どんなときにも真に味方をしてくれるのは、血を分けた子供である。けれどもその子供がどうにか成長したとき、早く手元を離してやってこそ子供の自立を促すことができる。それが親の愛ではないだろうか。親の自我を振り切つて、ゆずり葉に習つて。

甘えてはならぬすつくと塔は立つ

奥田 みつ子

川柳塔の一翼をになつ、みつ子さんの実感であろう。川柳塔にもいろいろとあつた一年だった。思いもかけぬ出来事が起きるのは世の常である。でも微動だにしない塔である。川柳塔万歳。



西田柳宏子選

伊丹市 檜谷郁子

低金利億の吐息が聞こえそう
古稀過ぎてな お踏み迷う道ばかり
育つ芽に思い托して 散る落ち葉
酒の席亡夫をかさねて 飲むビール
艶聞も酒の肴の 遍路宿

河内長野市 大西文次

断るの苦手 誰とも見合する
落書の金釘流が 目にとまる
医療費にペットの分も 含まれる
節穴を覗く 踏台置いてある
会長が社長に戻る 杜のピンチ

鳥取市 山本益子

先の先未来は きっと大吉だ
あれこれと 辞書の言葉に 老い迷う
立ち話 急ぐわたしの 足を止め
耳早い友が 噂をまきに来る
コスモスに 囲まれ 幸の深呼吸

八尾市 篠原いつふみ

ライバルの 笑いの中にある 自信
待合室医者より 詳しい人がいる
本心を酒が 言わせた 寒い夜
関東煮 二日目の 味妻に似る
ご都合で 姑の耳 遠くなる

富田林市 藤田泰子

新世紀に 似合う 仮面を 彫っている
罪の意識で だんだん 重くなる 小指
陰膳に 夫の好きな 栗きんとん
細く長く 燃やし つづけて いる炎
背信を知った 時から 曲り出す

尼崎市 田辺鹿太

大阪で 採れた おこめも 越ひかり
束の間の 自由が 欲しい プーマラン
計算は 下手でも 妻は 貯め上手
たこ壺に 蛸が 居るとは 限らない
五円貨の 重さ 軽さよ 消費税

豊中市 石川 勝

ドナー登録やってこの世へ恩返し
無精ひげあなたは夢を捨てたのか
コレクトコール娘の声がパリーから
ぜいたくは言わんころっと死ぬるなら
鼻の汗あなたはなんと嘘が下手

大阪市 立 蔵 信 子

ことわりも言うより言われ慣れている
すいている冬こそ京で雪を見る
また電話かけますからと逃げ言葉
ポケベルを持って親から逃げていた
根っからのさびしがりやで電話好き

今治市 野 村 清 美

さんま焼く煙に非常ベルが鳴る
弾む毬抱いていそいそ趣味の会
偶然の出逢い友の名度忘れる
一期一会声かけあって輪に溶ける
うれしくてわたしの部屋へ花を生け

伊丹市 延寿庵 野 鶴

法話聞く安心の証すぐ眠る
釘ひとつ入れて煮豆が祖母の味
孫の便り味な事する手漉き和紙
うらおもてじっくり見ている低い腰
烏賊のれん風の情けが旨くする

今治市 渡 辺 南 奉

ワンテンポいつも遅れるお人好し
珍道中夫婦どちらもそう思う
掃除するのに許可がいる子供部屋
丸く住むため三猿を守りぬく
まだ欲があるから開けぬ玉手箱

横浜市 金 森 徳 三

正月の番組笑うことにする
宝くじ拝むついでに神仏
湯豆腐の季節に迷う温暖化
CMをよく見ておこう紙おむつ
持ち切れぬ土産に気づくバスタワー

京都市 勝 山 美 千 代

背を伸ばし春を迎える障子張り
しきたりの重さに堪えて喜寿迎え
亡母の忌につどう姉妹喜寿米寿
時代です国際婚を許す父
国際化頑固親父も気の弱い

兵庫県 大 谷 幸 次 郎

南向きの窓が嬉しい秋日和
真実を演じることは難しい
外面は従うばかりの妻でいる
したたかに根を張り枯野春を待つ
如才ない姑を演じて細くなる

鳥取県 原 みさを

枯野ゆくみな旅人の影ひいて
冬の陽をもらう老後の広い窓
人嫌い世間ぎらいの二重窓
癌告知ドラマの幕は今あがる
演じきる賢母良妻すわりだこ

羽曳野市 徳山 みつこ

素颜知る人へも見栄を張ってみる
タカノツメ刻み私を活性化
エルニーニョ元氣いっぱい冬の蠅
九十の父が楽しむ窓の空
青空の下で小さな傷が消え

堺市 矢倉 五月

ストレスを溜めて動かぬ換気扇
転換キー押す指先を温める
正直なルージューをひいて出かれます
辞書にないことばで初孫しゃべり出す
髪洗う私がおたしに戻る時

海南市 谷口 義男

数多の死看取って生きて古希過ぎる
古希過ぎて生きる証の髭伸びる
決断が揺れに揺れてる迷い箸
終焉の日まで毒舌吐く積り
手の届く所に妻が居る安堵

福岡県 本田 忠男

働いた手の瘤老後なくさめる
涙腺の弱さ柩を曇らせる
退役の肩のパッドが錆びてくる
老醜は人傷つけて省みぬ
片棒を担いで朋輩顔をする

兵庫県 西川 一 繁

打つ釘も抜く釘もある古希の路
凡夫婦軽い掟で家平和
ていねいな言葉で過去の傷に触れ
恋破れ女一人が傷を負い
横向いた神にお百度踏んでいる

和歌山県 中後 清史

下駄預けられて己の未熟知る
他人なら喧嘩にならず済む気儘
ファミコンで孫が仇を取りに来る
鼻をかむ素振りて拭うもらい泣き
岩石になる夢を抱くさざれ石

島根県 梶谷 伸子

娘来て親子で京の旅自慢
秋祭り野菊ススキも出むかえる
たまに来る孫のおしゃべり真似してみる
文化祭子供の出品親がほめ
一服のお茶ものどかな文化祭

尼崎市 松下比呂志

和歌山市 松本良

人生の三分の一を寝て過し

振り返るといくつもあつた曲り角

バランスを崩す度毎皮が剥け

心満ちてぼんやり妻の傍にいる

紅葉を巻き込み滝は冬の音

泉佐野市 稲葉洋

家計簿にテトラポットを置く師走

減額の賽銭詫びて初詣で

柵越えてみた花園も茨道

雑念と妄想昼と夜の凡夫

心経の無と僕の無が唱和せぬ

羽曳野市 西村りつえ

まっ先に冬と出合った足先

光るものないが笑顔を持ち歩く

脇役の割には目立つ紅生姜

気まぐれでその日その日の舵をとり

使い捨てまだ溶けこめぬ姑の部屋

河内長野市 木太久 正一

美術展かくれ画伯が影を見せ

思いきりまとめ買いする妻の性

答弁ではつきり与党の頼りなさ

晩秋の能勢の里にてボランティア

秋の日の釣瓶落しについ遅れ

よく聞けば幸せなのに愚痴を言う

はらわたをえぐられやつと非を悟る

死者も出るだんじり祭り待ち焦がれ

図に乗らぬ程度にしとく褒め言葉

揉めさせぬ遺書が出てきて揉めている

尾張旭市 三浦きぬ

夢を追うに遅きはないと言いつ聞かせ

聞き役はこうもあくびが出るものよ

白すぎるどころをスプレー茶髪にし

言動を正当化して老い孤独

今日の日も自問自答と二人連れ

枚方市 大昇隆 広

戦争が壊した遺跡口閉ざす

熱血漢気付かず隅につくる影

からむ酒 路傍の石になり切れず

向き不向きいまさら何と仕事言う

飲む打つ買う卒業をして仕事好き

尼崎市 小川富江

いい夢で胸の振り子が止まらない

うっかりと本音喋らす聞き上手

保証期限あと十年と女燃え

五十年妻の手作り口に合

声いっばい亡夫を呼びたし山紅葉

八尾市 平川幸枝

空想の孫の未来は宇宙人にこやかに聞いて忘れた健康法

蟻の列働きすぎた五十肩

兄ちゃんが好きで急須をしぼり切る

鳥取市 西村半畳

献体に妻が印鑑まだ押さず

神無月ちよつと浮気の虫が鳴く

伝来の沢庵石が味の素

仲よしの和尚しつかり布施ねだる

東大阪市 北村賢子

年輪の心やすらぐ妻の顔

再会へ二の足を踏む顔のしわ

生きざまをずっと見て来た影法師

孫抱いてこの上もない老婆の顔

池田市 木村一笛

大声で右翼が走る宣伝カー

古傷は嘘も方便生きる道

うだうだと御託並べて叩き売り

取り敢えず腹ごしらえはぶぶ漬けで

益田市 岡田たけを

窓際の椅子へ冬日が温かい

どっちかが呆ける明日が恐ろしい

病む妻の愚痴はやさしく聞いてやる

金持っているから嫁と仲が良い

横浜市 三村八重子

老いてなお視線は先に置いておく

秋日和シヨパンの曲でレース編む

にぎやかな声まで紅いもみじ狩り

のびた背にまず座らせて子を諭す

今治市 中村好恵

寒月へ武者ぶるいする鬼瓦

ポケベルに四六時中を繋かれる

嫁がせた日から無口な父になる

木犀の香に遠出する万歩計

岡山市 清水金太郎

忠臣も孝子も出ない国になり

気がつけば息子が老眼かける齡

死に土産のように叙勲を貰ってる

あげたいが私の臓器は古すぎる

大阪市 一本勇太

親馬鹿かバカな親かを自問する

処世術こ一番に土下座する

納得がゆけば鴉もカアと啼く

岸和田市 不破仁緑

終章の鬼の瞳は澄んでいた

一番の権太に世話になってる

湿っぽい話湯豆腐冷めてくる

風でさえ選り好みする風の顔

大阪市 尾崎黄紅

考え直し消しゴムの跡を視る

茶碗がちさい箸もみじかい老妻がいる

格言はほどよく知っていて無学

蠟燭の灯の揺れるは亡母のお小言だ

八尾市 村上剛治

青空の深さへ仏信じたい

酔うほどに本音がこぼれだす無口

いつからか老母が牛乳飲んでゐる

日本を叱る怒涛が寄せてくる

高槻市 江原秀夫

年金夫婦 旅の相談文化の日

年寄りの集まるところ文化祭

万歩計朝の街角犬を連れ

冷えてきた公園茶髪たむろせず

日立市 加藤権悟

いい汗が父の足跡から溢れ

真っ直ぐに歩くしかない無位無冠

一日の余白を埋める夕茜

本当は泣き虫なんだ影法師

大阪市 中井正秀

ストレスを追払うのにバー二軒

百歳も民謡聞けば手が踊る

大声で勝った負けたのへボ将棋
嬉しいな信心深い嫁が来た

高知市 細木子龍

コンビニで習い始めた寝正月

箒目の寺に木魚の丸い音

神様が此の頃通う英会話

鈍行の土佐に似合いの海がある

米子市 大野蒼流

さようならきれいな女を演技する

裏切りの背を吹き抜ける冬の風

雁帰る国境深く冬を抱く

子を抱いてぎりぎり生きる花名刺

出雲市 川島和歌子

待つ者の身にもなつてと時間見る

時間掛け編んだセーター気にいらす

おみくじに今日の運勢吉と出る

お祭は亡母の得意の魚寿司

綾部市 藤田芳郎

父の峰越えたが脱皮まだできぬ

嫁った娘に叱られて呑む旨い酒

輪廻転生あとは子が描く未完の絵

足して2で割れば何処にもいる夫婦

尼崎市 森安夢之助

父さんが荒れてる早く寝るが勝ち

病院の時計足ぶみばかりする

母の愚痴聞くのも役目長電話
片隅の意見空気が動きだす

尼崎市 中澤 向 西

泣き落し昭和女のしたたかさ
手のとどく柿へ道草したくなる
老化への一步踏み出すもの忘れ
何事もなかったような秋日和

兵庫県 北川 とみ子

ふり向けばそれなりの旗もたされる
子は宝立派な勲章とも思ひ
家中の空気を干して帰省待つ
祈るしか知らぬ母子の未来地図

和歌山市 木村 初子

輪の中で温いごはんを頂いた(敬老会にて二句)
ほろほろと偲ぶむかしの芋茶粥
一期一会はかないものをずっと抱く
姿見に姿勢正して一步出る

徳島県 安宅 美代子

行く末を結る息子の背が広い
菜園を嫁がヒールで見回り
髪染めて年も隠したレオタード
白紙にも言い分がある裏表

岸和田市 亀井 皎月

若い二人早お元日恙なし
よい歳にして下さいと祈る朝
またひとつ余分に歳を貰いけり
義理からの賀状今だに尾をひいて

兵庫県 仲井 素水

欲の皮また上張りをして九十
迷わずに添うて良かった今の幸
すぐ下ろす年金だから利もつかず
苦勞せぬ金は湯水の如く捨て

松江市 佐野木 みえ

小菊でも精一杯の満足感
神在月 出雲へ神様おいでませ
奥出雲ひなびた駅に名水が
嫌な事忘れたいから髪洗う

横浜市 荒井 広和

矛先が鈍る見上げる背へ小言
さりげない厚意は躊躇なく甘え
酒の威を借りて女将へ愚痴不満
お隣の肩を終点まで借りる

松江市 浦辺 静江

やんわりと言う事知らぬ頑固もの
久々に出会った友は若そうで
小半日歩き疲れたショッピンク
腰痛は強気で趣味を生きがい

今治市 村上 久美子

当然の如く老化とイヤな医者
死に水はとってくれない犬と棲む
デザートは赤青黄の糖衣錠
ニトロお供にそれでも旅に憧れる

和歌山県 村中悦男

なじまない指の宝石ひとりごと

寒月を窓に家内のごごと聞く

土の香を体臭にして野良話

逢えばまた過去の若さがよみがえる

鳥取市 山本 崇

肩並べ歩けば歩幅共に合い

大山に初冠雪と紅葉狩

子の絆恙無いかと来る電話

生意気に気楽を選ぶ子供達

鳥取県 近藤 春恵

父の日へちよつときばって洋酒買う

休耕田の叫び政府にとどかない

迷わずに選んだ道突っ走る

退院の朝はうれしい陽が昇る

豊中市 岸田 知香子

皇居前静けさうっとり一休み

祝日のビジネス街で深呼吸

風に舞う色とりどりの吹きだまり

路地の奥菊の競作秋日和

寝屋川市 角野 仁清

深情け酒が私に付き纏う

何にでも馴染む大根色が無い

野良猫のひもじい声につい負ける

男にはもう懲り懲りと慣れた酌

高槻市 傍島 克治

音たてず食べる茶漬けのまずいこと

和解したはずの握手が冷たすぎ

伝言板怒りの文字の待ちぼうけ

内政干渉うちらのことはほつといて

豊中市 みき わきみ

余生とや好奇と諦観こもごもに

兆の字がノーマルになる世に生きる

マスコミに煽てられてた日の遠く

奈落とはこの事だったバブル裂く

横浜市 近藤 道子

脳死論いつか自分におきかえる

あの世までついて来そうな携帯電話

墓だけの故郷花が生けてある

愛去って風の白さにめまいする

兵庫県 倉垣 恵美

ふとこんなところに野菊生き残り

痛いのは山へ飛んだと撫でてやる

牛臭いところで座るコップ酒

逆らっているエンジンの黙秘権

八尾市 神原 まさと

温暖化裾割れ服が流行り出し

買戻し付のグイヤで騙される

自転車に空気入れたら息が切れ

ばけたかな妻の旧姓出てこない

羽曳野市 川田 晋
人の名で会話が止まる老夫婦
家庭では社長も平も好々爺
修理費が買うより高い置時計
知らぬ間に私を越えた子の背丈

散骨を望むも息子空返事
木枯しに一連の柿甘さ増す
鏡からだんだん母似教えられ
名ばかりの世帯主でも意地はある

米子市 小塩 智加恵

鼻唄のベダル追い越す赤トンボ
百歳で茶の間の人気コマーシヤル
窓際でリストラ一位指名され
法螺吹くが口程にない弱虫で

羽曳野市 森田 四三郎

病窓の空晴れわたり夕景色
安眠を咳がじやまする夜更けなり
妻のいて天国となる病床よ
手を振ってサヨナラ バイバイまたあした

八尾市 鷺見 章

生け造り鯛の目玉に睨まれる
評判が評判生んで客がくる
おんなじ話途中で孫が先をいう
澄んだ川知らないままに魚泳ぐ

和歌山市 福重 美子

天高く干した布団も深呼吸
手探りの会話名と顔結びつけ
孫達の絵にフックスが忙しい
不摂生 手術の跡が戒める

横浜市 野瀬 昌子

新米の松茸飯で待つ祭り
笑う児も泣く児もあって稚児の列
独り居が寂しく人と群れたがる
天気予報に急かされている冬仕度

富田林市 大橋 鐘造

ライバルが居る幸せを噛みしめる
肩の荷を下ろして春を待つ梢
手を打てば水琴窟が返事する
床柱でんと構えている安堵

大阪府 米澤 俣子

本からの良い知恵知らぬ間に出合ふ
御多忙中すみませんねと長電話
趣味忙し今日も手抜き家事仕事
我が娘より気楽に嫁と昼御飯

鳥取市 福田 登美

塗り変えた戦後ゆっくり振り返る
黒い腕朱の温もりを内に抱く
線引きの内素直に生きる老い
いい出合い胸の振り子が早くなる

藤井寺市 太田 扶美代

坂道の真ん中辺から一人ぼち
鳩胸がまだ何やらを主張する
遊ぶ事知らずに母はよく笑う
故里の塩をちよっぴり舐めてくる

大阪府 井上 千代子

里帰り磯の香消えた海になり
お世辞だと分かって居るが乗ってやる
争いに勝ち残る悔い眠れぬ夜
雨降りを待たずに孫の傘歩く

唐津市 樋口 輝夫

誘惑の最初は軍艦マーチです
打ち返すバット持たないお人好し
ママの顔ほんとは化粧の下にある
リモコンは妻の手にある胸にある

尼崎市 的場 十四郎

起死回生リングは赤く熟れている
放浪の息子を母は忘れない
白壁に墨痕鮮やか和の一字
褒め上手叱り上手も親ごころ

大阪市 川久保 睦子

出掛けきわ幾度も鏡見る不安
老いてなお父権の椅子を守りぬく
近所まで行って来ますと香港へ
ストレスの解消近所の銭湯へ

鳥取県 藤山 弘子

大都会蛙の声になごまされ
薬膳へ柿の葉寿司とお茶を添え
柿の実を鳥と分け合い年を越す
干柿が軒下飾り冬を待つ

松江市 松浦 登志子

新品の郵便受けて待つ便り
散る前に特上の愛咲かせます
新車買う若さと度胸持った父
柳歴に新しい風ひきよせる

鳥取市 宮脇 道子

女坂枯れ野のトゲが痛かった
呆け三分可愛く生きる夢を見る
幸福は隣の人が信じれる
塗ることで気持治めて鏡見る

愛媛県 黒田 茂代

冬の日を弾くざくろのルビー色
躓いた女に寒い北の窓
所変われば六角形の島の井戸
晴れててもカラコロ下駄が好きだから

松江市 安食 友子

一杯のコーヒーからの腐れ縁
戦場を駆けた男の影法師
マスコットお祈りされて悩んでる
幼虫のでんぐり返り強かだ

八尾市 山本 宏

酒を呑む眉間のしわが消えている
おかげさまだ生きている不摂生

耳うちが隣近所に波立てる

大阪市 榎本 日出子

親ばなれ残る町内親ばかり

理解あるお人と言われ出世せず

折り返し人生まずは若作り

和歌山市 木村 親路

ああ言えばこう言う妻に押しきられ

似合わない顔と服とでやって来る

ふつくと二十歳の胸が自己主張

大阪市 中澤 孝子

御堂筋姿勢正しく渡ってる

ジーパンを切らずに穿けるのが自慢

この歳で世間知らずと言われても

島根県 福岡 博利

特技です長い電話と立ち話

屋根にねて星と話がしてみたい

たのしみがあるから遺書は書いてない

富田林市 山原 昭水

寅年も地が裂けぬよう鈴をふる

大阪で織田作さんが生き続け

夜食つくる手には大きな夢があり

高槻市 乙倉 武史

親譲り頑固なところを褒められる

何げなく言った言葉が刺となる

老いたかな形状記憶戻らない

唐津市 宗 弘

唐津っ子血潮がたぎる曳山ばやし

血のたぎり冷やしてくると祭好き

お日様に笑われながら昼寝する

羽曳野市 安芸田 泰子

片言がわたしを丸くしてくれる

花一杯抱いて亡夫に逢いにゆく

暮れの街電話せかせか行き違う

島根県 菅田 かつ子

よろよると寄って来る蠅叩かれぬ

百円で売るには惜しい古本屋

願わくば灰になる日は晴がよい

島根県 武島 ちよえ

大根が美味しくなった北の風

床柱背負うて足が崩されず

充たされて骨の無い子が多くなり

和歌山市 吉村 さち子

人間に負けぬカラスの知恵袋

一枚を着たり脱いだり秋深む

晩秋の蚊の一匹の強かさ

八尾市 村上ミツ子

和歌山市 森口美羽

年頃と張り合っている負けている

生き上手甘え上手な片笑くぼ

順風に乗って心を置き忘れ

大阪府 澤田和重

東大阪市 今岡貞人

手話の恋しずかに炎抱いている

生卵 命ひとつを丸飲み

少しルーズに生きる一病持つてから

高槻市 執行稲子

神戸市 船津とみ子

迷惑な乙女の髪が頬撫でる

ときめいて見よう誘いに乗ってみる

ひたむきな女で何故か捨てられる

姫路市 服部一典

寝屋川市 瀧本八十八

イライラを適度に癒す畑仕事

死んでまで自我を通さず遺言書

見舞客ただ頑張れと言うばかり

東大阪市 松山隆

鳥取市 近藤秋星

過去帳が紙魚一匹に犯される

快適な生活に慣れたオゾンホール

弁えてネクタイ選ぶ白い髪

河内長野市 妹背尽呂久

愛媛県 安野案山子

公園の鳩は弁当見逃さず

公園で傘寿同士の高笑い

未だ若い心算が席を譲られる

ライバルがこつこつやっていた努力
貫禄のある仲裁に押し切られ
言うだけは言うところを託す子だ

横浜市 川島良子

現在が幸せならばそれでよい

てのひらの幸せだけは逃がすまい

歩行者天国ソフトクリーム二つ買う

島根県 松本聖子

病窓で見る街平和で穏やかで

農道をつたばかりに迷いこみ

迷い道亡母に逢いたい墓参り

高槻市 左右田泰雄

目頭をおさえたままのご対面

バルサンの煙に部屋を明け渡す

犬の名で挨拶交わす散歩道

泉佐野市 大工静子

暇閉じ遙か彼方の無事祈る

墓参する黄色ばかりの花抱いて

夫逝き妻に重荷の蜜柑山

吹田市 野下之男

露天風呂こっそり覗く蒼い月

しゃんとした背筋に明治まだ遺り

孤児達の幸せ祈る初詣で

横浜市 北沢街湖

へそくりはいまわの際に打ち明ける

海外で五七五と指を折る

悪口を酒の肴に飲んでいる

出雲市 梅ミツエ

ねこが来て人の話を聞いている

コスモスのゆれる小道で時間待ち

秋日和栗飯たいて友を呼ぶ

唐津市 井上勝視

焼芋に話尽きない古い二人

味付けが変る二人が共に古い

生かされて掌を合わせてる喜寿の春

大阪市 杉澤汀

黒い靴 茶色がひとり朝の駅

トンビにもタカにもならん無精卵

貧しいが悪を憎んで生きている

宝塚市 飯西ミサヲ

正月はせめて眼ぐすりピンクにし

誕生日自分を祝う花一輪

ワンルーム三面鏡がどまん中

兵庫県 植村雄太郎

書評見てつんどくにする新刊書

只のもの諺通り高くつき

正座して僧はよく飲みよく食べる

兵庫県 緒方美津子

花作り育てる人と切る私

長風呂へ生きているかと声をかけ

故郷の風がみたくて柿吊す

大阪府 団野 つね子

爽やかに始まる朝のストレッチ
マイペースいつものリズム万歩踏む
うす紫のスカート求め春を待つ

枚方市 二宮 紫 鳳

丸い背に日ざし集めて縁の祖母
七五三晴着の子らに枯葉舞う
コツコツと働き続けて得たお城

大阪狭山市 伊藤 尚子

すし折りを先に差し出すちどり足
部屋に鍵かけて家の子反抗期
どの家も国旗を持たず文化の日

八尾市 井尻 民子

今日だけは吞んで下さい感謝の日
総会屋と切れぬ企業の腐れ縁
たこの足一本つまみワンカップ

今治市 塩路 よしみ

いつからか素顔で朝の膳につき
小さい手が上がってダンブ止められる
あきらめて歩くあとからバスが来る

吹田市 西岡 豊

脱線の多い先生で親生まれ
ほろ酔いの女の癖を見てしまっ
好々爺三本目から癖が出る

熊本市 北川 一進

味だけは自信を持った古のれん
平等にわけた積りにある不満
トラブルはご免欠席する積り

横浜市 明渡 トヨ子

この余暇が若い時代に欲しかった
死にたいとも思えど矢張り未練あり
四季のある日本矢つ張り有難い

羽曳野市 三好 専平

湿布薬貼って働く笑顔です
天牛のおやじなつかし法善寺
携帯電話地べたでしゃべっている若さ

大阪市 三浦 千津子

元旦や空気も水も澄んでいる
酒あれば何の不平もない夕べ
世が病んで人の命が軽すぎる

鳥取県 西垣 美知子

今日よりは明日すてきな夢を追う
原爆を浴びた広島四季帰る
姿なき神と約束して帰る

松江市 川本 畔

水飲めばいのちに秋が透けてくる
空いっぱい書く秋の日の落書き
いつまでも生きたし不老不死と書く

出雲市 加藤 スズコ

秋祭り皿舞い上がる伊勢神楽

船帰る港賑わう朝ドラマ

故郷はやっぱり丸いお月様

鳥取市 岸 本 宏 章

言い訳を二度目は冷めた目で見られ

大病がすっかり毒を抜いてくれ

日本海暗いドラマに仕立てられ

鳥取県 橋 谷 静 江

長い夜の話し相手はやはり妻

月末はサイフの中を抜ける風

嫉だと口喧しい母である

和歌山市 武 本 碧

ぬるま湯へ刺激が欲しい平和ほけ

母の着た着物の似会う齢となり

清濁を併せて吞んで海青し

和歌山市 上 地 登美代

酸欠が起こって来そう結果待ち

オーブンに生きれば何と気が軽い

一坪の畑駆け込み寺にする

兵庫県 井 上 信 子

孫からは糸を通した針がきた

根気なく毛糸編み機に暇もらい

毎日が日曜となり朝の風呂

和歌山市 上 地 忍

老母が待つ里は甘柿熟れている

相槌を打って嘘にも乗ってやる

ライバルがあつてカラオケ熱が入る

羽曳野市 山 本 たけし

まだ先と思うた歳が来た恐さ

医療費が年金家計赤く染め

郵便のバイク素通りして寂し

羽曳野市 芦 田 絢 子

十二月 母の練り言多くなる

まともすぎるのも変人のうちに入れ

オンとオフだけの器械が性に合う

倉吉市 田 中 八太朗

死ぬまでは着きれないのにまたも買い

去んてから妻の機嫌をとつておき

おとつあん売られない土地なら要らん

静岡市 大 村 正 雄

先祖の地小間切れにする相続税

大学を出ても君が代唄えない

ふるさとの母は達者か柚味噌焼く

西宮市 古 谷 ひろ子

水を売る町にもあつたダイオキシソ

粥を炊く火かけん妻に仕込まれる

軒下の花卉息づく路地の朝

横浜市 平 達也

尼崎市 内 田 美也子

神の技教えてくれた菊花展
不可思議な縁と流れの中で生き
老いの贅茶そば肴の昼寝酒

横浜市 生 坂 サト子

愛媛県 中 居 善 信

流行語戸惑いながら試してみ
末筆でしっかり詫びてしめくくる
馴染めないデジタル時計朝を告げ

兵庫県 円 増 純 子

鳥取市 有 沢 せつ子

二枚舌うまく使って世を渡る
子育てにえこひいきなど無いものを
独り居の窓へまんまるお月さま

横浜市 豊 田 羊 子

和泉市 横 山 捷 也

残り火の一人芝居へ幕下りる
悪ぶっている正直を目が語る
2Bが走る心の機微にふれるまま

大宮市 新 井 朋 子

鳥取市 藤 ふうこ

ころげでた言葉山越え谷を越え
でかい夢持てず納豆まぜている
世辞ひとつ言わぬ体重計に乗る

熊本県 増 田 一 乗

富田林市 中 井 ア キ

年忘れ出演楽し文化祭
難聴で情報が半分届かない
軍歌集ともに戦跡歩くごと

風紋に月の砂漠の夢を追う
泣き笑い昔に還るクラス会
だんだんと里の集いに花が咲き

百姓をいじめた付けはきつと来る
目が会ったところからドラマ始まった
いっばしの陶工気取り作務衣着る

家事をするロボットほしい三が日
クラス会乙女気分の高い声
つり銭は数えるものと夜気付く

腕よりも碁盤自慢にさそわれる
おあいそでつき合う妻が長続き
自転車を押して秋刀魚の匂う坂

泥つきの大根を売る安い店
新築は窓を大きく開けはなち
忘れ上手いつも明るく生きてゆく

火種抱きじつくり風を待っている
鉛筆を丸く削って明日を待つ
欲望に歯止めかからぬ十七歳

少年の眼にもまぶしいイルカショー
初鏡拭いて心の晴れるまで
初日の出 恒例となる海がある

岡山県 土居 ひでの
東京都 井上 つよし

新年はポチの茶碗も花模様
縄文の頃賑わった過疎の村
今だから言える話に花が咲き

東大阪府 谷口 義

親不孝者を待つてる散らし寿司
寝ごちの良い椅子だった文楽座
今になり姑はほんとにえらかった

八王子市 井上 京一郎

快眠の朝の剃刀よく滑り
左遷地でめっきり上げた釣りの腕
雨の日の日記 反省録となり

横浜市 岡田 芳江

山は紅 私も色を変えてみる
化粧する 私をきくと強くする
読書用眼鏡スーパード用となり

横浜市 長島 亜希子

他人の目が落ちてる金を拾わせず
負けたなと思う料理を娘が作り
内定が出て父親とクラブ振る

八王子市 播本 充子
正直に生きて大人になりきれず
友情のかけらも持たず友でいる
来年は何処まで飛ばう若い種

札幌市 三浦 強一

休肝日守れなかった嬉しい日
胃カメラに禁酒約束させられる
昭和史に慰安婦というわだかまり

尼崎市 軸丸 勝巳

バスに乗る杖が挑戦する段差
歴史散歩怪しい説が面白い
盆栽はいじめに耐えて褒められる

滋賀県 中 宗明

老いの坂趣味がとりもつふたりです
老境に邪魔な肩書き捨てました
ふたりして築く幸せ共白髪

京都市 高島 啓子

片ことを孫の心で聞いている
東山色づくころの京が好き
八ヶ月孫は早くも立っており

米子市 猪森 スミエ

自販機が留守番してる村の店
野良に出る嫁にやりたい努力賞
うどん食べ土産にうどん買う旅路

秋を行く鹿児島弁に大阪弁
ささやかなオシャレ鏡に初春の帯
命長き時代細く楽しく生きてます

寢屋川市 井上 すみれ

他人の死に泣く幸せを持っている
娘が嫁ぎさてと何から始めよう
きっかけを待っている胸底のマグマ

川崎市 和泉 見早子

新年の寅が勢い振っている
言い訳をすれば空気がこわれそう
子の居ない枯れ野に犬の日向ぼこ

倉吉市 山中 康子

不揃いで紅い絆が結べない
裏切った男が洗う寒い首
豊作を祈るは首を締めること

香川県 神保 坊太郎

自画像に昭和の意地がまだ残る
友情を温めているワンカッパ
折々に箸置かえて妻の贅

北九州市 岡田 幸生

五分でもロビーで待つ身落着けず
子離れをしようと思う近いうち
また来いとおいしい蟹と酒が出る

倉吉市 大下 智子

秀才のように見られていた無口
待ち切れず歩いてバスに追いこされ
糠漬けと番茶がうまい旅帰り

静岡市 増田 扶美

悟りから遠く離れて行く修業
スパーで地球の裏の魚に逢い
日本語を覚え帰れぬ熱帯魚

今治市 渡邊 伊津志

世渡りに笑顔の種をまいてます
卒業まで重い手紙の船を漕ぐ
古椅子と共に絆で生きて来た

米子市 門脇 晶子

負担増病気を少し整理する
晩酌の型それぞれに呑み仲間
悪政と俺にもわかる消費税

新潟県 高野 不二

爪を噛む癖が孤独を攻め立てる
火傷してから読み返す但し書
勇退という名で秋へ吐き出され

鳴門市 八木 芳水

朝顔が種を残して燃え尽きる
今朝咲いた菊一輪を活けて秋
言い過ぎて空しさだけが胃に残る

大阪市 小泉 久子

秋田県 湊 修水
稔る穂に聞かせたくない米あまり
お弁当純国産はお米だけ

千葉県 大川 晚 翠
冗舌ななまはげさんは面白い
相合傘何処の何方かありがとつ

富田林市 欄 智 久
久しぶりいきいきとして戦友会
見せかけはいきいき老兵草臥れる

堺市 梶 本 哲 平
松島のあわれや石油基地の見ゆ
高度成長浮かれ育ったトップです

大阪市 亀 井 円 女
口ほどに動かぬ腰の歯がゆさよ
揉めるのもゲームになった老夫婦

交野市 山 川 日出子
六十路からつるべ落して七十歳
薬屋で漢方歴史長々と

和歌山市 水 田 秀 男
亀よりもやっぱり僕は兎です
コンビニの灯に若者が寄ってくる

鳥取市 石 上 悦 子
身に覚えなくても顔に出る私
知り合いの表札に遇う迷い道

三重県 佐々木 森 哉
浮かれ酒妻の頬つべにキスをす
川柳が骨まで染みる秋灯下

大阪府 奥 野 義 夫
飽食の時代も飽きぬにぎりめし
火の車舞うて人情花が咲き

今治市 越 智 青 園
初春の耳朗報だけを聞きましよう
たとう紙のふり袖二十歳待ちわびる

新宮市 橋 爪 五 雄
自慢にもならぬが千枚田が名所
山の中でも町と名がつく猿の里

北海道 中 里 つね一
亡妻の写真せめて彼岸に拭いてやる
秋晴れに朝顔二度咲きしてみせる

静岡市 中 西 雅
ちぐはぐの幼児の絵から虎が出る
アイドルのルーズソックス似合う足

横浜市 保 田 絹 子
残したい枝切りたがる天邪鬼
伏兵の鴉農夫の夢碎き

東京都 清 原 悦 子
受験からピアノが眠り続けている
ふだん着の顔で正月過ごしてる

新築の部屋物置きになっている
友達が居て楽しみな医者通い

檀原市 西本保夫

横浜市 伊藤ふみ

山路来て枯れ葉と共に露天風呂

秋の夕日大きく今日を締めくくる

尼崎市 清水久美子

三世代住んで食卓地球規模
健康で笑ってられる共白髪

横浜市 山下省子

誰にでもやさしくしよう冬うらら
ホリ深い男見直す月明り

横浜市 秋元和可

逆境にあつて身に沁む思いやり
人生を変えたひと言忘れない

兵庫県 安達厚

仏壇を開いて日課動き出す
菊花展作者の笑顔見えてくる

松江市 松本知恵子

あの辺り静かに論す星がある
街路樹は秋色茶店から眺め

河内長野市 水谷笙子

月天心 梢は銀のペール着る
こたつぶとん亡き子の煙草跡も出る

定年のない私にある割烹着
物おじをしない毒だみの白い花

鳥取市 森明美

西宮市 井上俊二

クラス会病気ばなしが多くなる

紅葉が近くに見える秋日和

横浜市 結城明玄

マイナスのない人間で魅力なし
趣味の芽を少しのばしてゆくとする

兵庫県 徳平毬子

内孫の笑顔 片言 福の神
今夜また暗いニュースにゆがむ顔

大阪市 平井露芳

ひよろひよろとコスモス伸びて秋深む
掬われて飼われて永生きした金魚

和歌山市 岡本八重子

阿弥陀様の大の花瓶に秋を活け
会釈され誰だか名前出てこない

八尾市 興田明

勿体ない言葉じたいを忘れてる
医療費の負担自然に首をしめ

兵庫県 高見末野

おでん鍋湯気がほかほか孫を待つ
三日月が淋しく照らす秋の夜半

美谷室帰りは年を置いて出る
初詣で値上げしている拝観料

鳥取県 国森 武子
高校生無口になってギターひき
傘寿すぎ眉動かさず生きている

島根県 谷岡 ふみ
年賀状涙流して喪中です
杖ついて畳の上を歩く許可

出雲市 岡 あきら
平凡に歩いた靴の片チビリ
世話できるこの仕合せを噛みしめる

尼崎市 古川 正子
夕やけやモネの彩あり秋の空
小魚を毎日食べる骨粗鬆症

八尾市 高橋 明子
地球儀を回せば何処かで戦ある
切手張る北から南ハガキ旅

尼崎市 河津 正治
先頭が揺れて神輿の血が騒ぐ
ワンテンポ遅れて孫のハーモニー

枚方市 寺川 弘一
他所の子の泣き声好きになれません
耳鳴りとだんだん仲良くなって来る

鳥取県 吉田 孔美子
やがて冬 歩きなさいと医者と言う
おみやげにランドキヤニオン観てくるよ

和歌山県 中村 君枝
欲の皮はげば小さな肝っ玉
聞き役の夫にもあろう悩み事

尼崎市 長谷川 佳山
石が皆 石のままで通りすぎ
飛ぶ鳥は名も知らないが話をし

大阪市 鈴木 トヨ子
底なしの悪事重ねた総会屋
ファッションを母と娘で競い合う

島根県 谷光 光徳
平凡な運でよかつた高笑い
おらが村桃が流れて来なくなり

高知県 桑名 孝雄
コマージュルだけは景気が良さそうだ
何でも反対みんな似たようなデモの顔

岡山県 富坂 志重
母の疵子の思い出をたぐりよせ
八十路過ぎたダルマも転んだままとなり

川西市 田中 喜俊
新聞はまず高齢の愚痴を読む
手をあげて杖もつ人のうしろ行く

感謝して辞退をされる献血車
姉妹に見られて母の上機嫌

尾宮弘治

言うまいと思う小言が滑りでる

高知県 百田幸

愚痴も言う嬉しいことも分けてやる

愛媛県 宮本末子

蜜蜂の巣にも試練の向い風

古里の誇りは祭り日本一

米子市 池尾保子

汗だくで貯めたお金のあほらしさ
三度のめし忘れていても薬のむ

和歌山市 和田美寿子

墓参り吾が名刻んでいる安堵
長生きも粗大ゴミとは失礼な

横浜市 山梨雅子

トンネルを出て紅葉に驚かされ
お隣へ伸びた枝にも柿がなり

沖縄県 杉谷一栄

おけいこに若松生けて嬉しがる
長寿国私が長生きしてるから

香川県 向山治延

ふさいでも人の口には戸が立たぬ
なごやかに鶴亀の舞古希の宴

狭い部屋菊の香りが占めている
飼猫と話し心の隙埋める

鳥取市 谷岡清子

飽食の後に減量する努力

鳥取県 高尾京

宣伝費肉と一緒に食べている

鳥取市 岸本孝子

幸せは三度のめしのうまいこと
取り替えのきかぬ部品が痛みだす

横浜市 田中笑子

微笑みがいつか幸せ呼んでくる
若い氣に独りなってる赤い服

兵庫県 中野とよ子

張りのある声に希望をつないでる
ストレスを仲間の声が消してくれ

兵庫県 谷田多美子

初競りで蟹の手足の威勢よく
老い二人血圧計を譲り合い

静岡市 中西雅

遺族の皺増々深く終戦日
言い訳は筋の通らぬ意地っぱり

生駒市 半澤無眼子

如是我聞足場を払う時は今
法を説く落ちた久米様澄まし顔

沙湖抄

八木千代選

秋の陽にいっぱい晒す衣食住
先回りして矢印を曲げておく
持ち越した昨日の中の通り雨
電子音ばかりが溜まる冬の部屋
旅人として黙禱の列につく
椿落つ 宴は不意に終わるもの
ふうふうとなだめふうし冬あそび
寒椿 わたしも両親も離婚
私に分からないので寝てしまふ
起承転結 今は転がる時だろうか
ゲルニカの前で泣けたら本物か
妖怪になろう人生楽しそう
少しずつ死んでいのに夢を追う
ふいに電話もしや救世主かも知れぬ
あの家が好きだったのに流し雛
しがらみをゆっくりと解く鳥になりたし
上段の構えのような大手門
エルニーニョ 豪雨は不意を突いてくる
ころがるとばかり思っていたボール
右を向き左を向いて落伍する

寝屋川市 岸野あやめ
和歌山市 川上 大輪
西宮市 牧瀬富喜子
和歌山市 木本 朱夏
同
鳥取県 新家 完司
米子市 白根 ふみ
富田林市 池 森子
鳥取県 鈴木 公弘
和歌山市 川上 富湖
和歌山市 古久保和子
八王子市 播本 充子
唐津市 井上 勝規
尼崎市 長浜 澄子
東大阪市 谷口 義
鳥根県 松本 文子
和歌山市 三宅 保州
米子市 林 荒介
豊中市 石川 勝
横浜市 清水 潮華

尻餅をついた程度と割り切ろう
不易流行 一に帰すとも思われず
砂埃立って広場は人嫌い
鏡から目を逸らさない逸らさない
濡れた猫 濡れた地面におろせない
的はずす恩返しにはなるまいか
この浜で何を見て行く波頭
流されつつ吠えてる声が届かない
負いめある背なへ刃を向けたがる
台所の殺意に気付かない家族
ゆっくり転がりやさしい苔をつける
原色の夢を見たくて君と逢う
今ならば迷わず軽い方をとる
この箱の中で私は終わりたい
越えられぬ山は高いと限らない
ふところに何時も厄日を抱いている
風の狂ひぐらし遠くいったまま
楷書より書けぬ根性謀反する
観世音積もる塵さえ美しい
死ぬことも明日につなぐ駒となる
抜けてきた白髪と長い話する
その上に父の日が来る有難さ
追伸で抜かれた小骨かみくだく
年輪を溶かすと枯葉色になる
レクイエム今年も咲いた夾竹桃
魚嫌いの猫を探しているのです

羽曳野市 吉川 寿美
岡山県 小林 妻子
和歌山市 桜井 千秀
西宮市 奥田みつ子
堺市 志田 千代
米子市 政岡日枝子
横浜市 三村八重子
大阪市 本間満津子
寝屋川市 森 茜
寝屋川市 籠島 恵子
松江市 川本 畔
大宮市 新井 朋子
枚方市 前 たもつ
米子市 青戸 田鶴
倉敷市 田辺 炎六
鳥取県 土橋はるお
和歌山市 野々 圭子
尼崎市 春城武庫坊
大阪市 榊本 落児
弘前市 一戸 ツネ
砂川市 大橋 政良
松原市 小池しげお
岡山県 富坂 志重
和歌山市 堀畑 靖子
唐津市 久保 正剣
弘前市 佐治千加子

等身大の影と冬道で迷う

祝日に旗の寝息がきこえます

怠け癖移るんですよ移すなよ

一本の藁をも灰にせぬように

光るものみな外して旅に出る

手さぐりのうしろボタンに試される

いい話ちよつぱり逃げて考える

丸い石願うてなつた訳でなし

辞書にない事檜山へ聞きに行く

遣伝子の昔むかしが跳ね騒ぐ

爪を切る度に本音が零れ出す

チンと言うカンと答えるから好きだ

人間の奢り昨日を食い残す

ひらがなですらりすらりといひ手紙

消防車の梯子気構え持っている

木枯しに放置自転車歩きだす

狂ったのかまた動きだした時計

反応の出るまで我慢して吠える

テレビから今日も流れている笑い

公園の仔犬は今日も淋しそう

人形になると座れるところがある

おもちゃ箱いくさするほど揃ってる

うとましいこの世が好きで苦にもせず

残り時間の長さで妻に負けている

一坪でも花壇は花壇 蝶が来る
短日を探してばかりいて暮れる

藤井寺市 高田美代子

米子市 門脇 晶子

鳥取県 谷口 次男

弘前市 斉藤 嘉

羽曳野市 田中 透太

西宮市 門谷たず子

大阪市 立蔵 信子

枚方市 海老池 洋

八尾市 山本 宏

兵庫県 大谷幸次郎

米子市 鷺見 正子

愛媛県 中居 善信

鳥取県 土橋 螢

京都市 都倉 求芽

米子市 野坂 なみ

倉吉市 最上 和枝

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 福本 英子

米子市 木村富美子

和歌山市 玉井 豊太

今治市 矢野 佳雲

八尾市 吉村 一風

吹田市 栗谷 春子

寝屋川市 江口 度

米子市 石垣 花子
今治市 月原 宵明

裏切りの面がいつばい万華鏡

波風の立つことばかりしてしまふ

かたくなに蓄のままで冬の蓄微

贈られた隠居部屋から陽が昇る

お化粧を剥ぐと五歳も若くなり

残照へ少し足りない彩を足す

苦しきもじつくり嗜めば味が出る

特技なしけれど少々余技がある

初雪が父を都会に連れてゆく

ライバルに蓄微を送っている立場

寅年や神農さんの虎揺れる

認め印に笑顔演じた節がある

罪深しほとけに供養されている

訳もなく溜める和菓子の包み紙

渴水の池に菩薩が五六滴

枯葉舞うあの世この世を分ける風

コンパスの軸がすべてを知っている

柿のれん皮剥いたのは男たち

故郷へタイムマシンになる電車

雪女貴女は柿が好きかもね

終止符を打たねばならぬ花鉢

花の首落ちて熟女と名を変えり

薬にも毒にもなつて数の内

その時はそれですくいなつた嘘

カタカナも漢字もきらい説明書
飾り棚の人形だつて老いてゆく

倉敷市 小野 克枝

八尾市 村上ミツ子

倉吉市 淡路ゆり子

鳥取県 さえきやえ

黒石市 相馬 一花

和歌山市 武本 碧

米子市 茂理 高代

吹田市 石原 靖巳

青森県 西谷 大吾

和歌山市 福井 桂香

豊中市 田中 正坊

綾部市 藤田 芳郎

鳥取県 乾 隆風

川崎市 和泉見早子

倉吉市 米田 幸子

富田林市 片岡智恵子

鳥取市 武田 帆雀

米子市 林 瑞枝

富田林市 藤田 泰子

鳥取市 坂田和歌子

大阪市 津守 柳伸

奈良県 鍛原 千里

羽曳野市 酒井 一壺

鳥取市 森 明美

寝屋川市 平松かすみ
横浜市 川島 良子

電柱に犬は情報詰めて行く

頼りない父にハーブを飲まそうか

過疎の町 敵を作ってどう生きる

ふわふわと落ちて着きのない影法師

茶柱が必ず立つ茶うちのお茶

持たず絵は熟れた柘榴の実沢山

人工のレンズに眼鏡いるのです

望郷千里 皿に遊ばす赤まんま

木枯しに吹かれたからっぽの時間

鍵束の喜怒哀楽を持ち歩く

耐えること古い女の守り札

自己陶醉コップの中で揺れている

レトルトの封切るだけの包丁よ

いつの日も母思うなり大根煮る

眠らない鏡へわたし小さ過ぎ

つぎつぎと書きたい夜は朝がせく

甘い言葉好きなふたつの耳叱る

仏壇の花いっぱいにして旅に出る

悪役の自負を持つてる斬られ役

なりふりを捨てて走ったことがある

おいハアアイ他人の声が符する

ボタン穴合わずながい日が暮れて

南天の赤幸せであればよい

人恋しザワザワと風も冬

空の青 策略などは使わぬ

片男波女が離婚言いたてる

唐津市 市丸 晴翠

鳥取県 橋本多哥由

和歌山市 上地 忍

鳥取県 石谷美恵子

唐津市 仁部 四郎

大阪市 川原 章久

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 山根めぐみ

和歌山市 岩本美智子

札幌市 三浦 強一

岡山県 矢内寿恵子

大阪市 日阪 秋子

横浜市 菱田 満秋

神戸市 船津とみ子

今治市 越智 一水

河内長野市 植村 喜代

大阪市 小泉 久子

大阪市 鈴木 節子

大阪府 沢田 和重

倉吉市 松本よしえ

東大阪市 松山 隆

富田田市 中井 アキ

松原市 玉置 重人

岡山県 山本 玉恵

西宮市 西口いわゑ

八尾市 宮崎シマ子

反論のすがあえなき失語症

すぐ妥協したがる人の手がぬくい

青春は八絃一字の時代劇

穴の中 平穩無事と気がつかず

長い列しばらく眺め引き返す

塚ちかく血のいろして赤まんま

ひとりすむ姉へきのうを書いて出す

パイパスに乗りそなた老いの旅

箸の先つまんだジャコ目の出合い

失言が今も尾を引くのも他人

パン屋の前通ればパンの香りする

やさしさに呼びとめられて花を買う

古希間近 夢なら面のポケットに

初霜が今年早いと母の文

一周忌立派な墓をなでてる

北風に向かい私が試される

秋草の最後を床の間で愛でる

大阪市 板東 倫子

今治市 塩路よしみ

鳥取県 林 露杖

大阪市 神夏磯典子

米子市 澤田 千春

枚方市 森本 節子

羽曳野市 徳山みつこ

唐津市 山門 タミ

熊本県 高野 宵草

和歌山市 田中 みね

鳥取県 上田 俊路

八尾市 大内 朝子

三重県 佐々木森哉

羽曳野市 川田 晋

八戸市 島田 昭治

横浜市 近藤 道子

倉敷市 井上 富子

岸野あやめさんの秋の陽の高い透明度には、私の指までも日光消

毒された感じでした。日々のいとなみに密着する「衣食住」というこ

く平凡な言葉を、さほど技巧をこらしたというでもなく下品の悪戯っ

ぽい新鮮な詩語として登場させてあります。川上大輪さんの悪戯っ

ぽい矢印は今の世相にびったりですね。それが善にしても悪にし

ても矢印を曲げておくなんて、暗示もそうですし大仕掛小仕掛け根

回し、談合、指定席の予約などなど、大きな仕組みを戯画風に描いて

大成功です。ときには神さまだって、この手の悪さをなさいますから。

牧測富喜子さんの通り雨はよく経験することで、この持ち越しはつ

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこゝろ

(84)

橘高薫風

凡聖一如元旦のころ知る

麻生路郎のこの一句から昭和十年の『川柳雑誌』が始まったことは「大空のこゝろ(7)」で紹介した。今回は久しぶりに路郎先生の作品を多く並記する。総てこの年の作である。

諷風松竹梅の会にて

酒なんか呑んでいられぬ酒を呑む

悼 鶴治郎

君の計に炬燵の穴もさびしまれ

千畳敷にて

新婚が太平洋をバックにし

湯崎白浜遊覧バスの霞むとこ

子が病んで帆の動かぬもさびしうて

育て親のなげき酸素にけつまずき

四男洋逝く

母の輸血も空しく春の息をひき

三男一步尋一に入る

百貨店子の入学を見逃がさず

折靴麦酒を飲むに放さない

葉忘れて机の埃り見えていたり

置電燈―只一冊の聖書あり

消すにしのびぬ娘の夢の華やかさ

君の顔で僕の顔でと呑みにゆく

長靴がある玄關のみじめなり

忘れ難きキスとなれ夏の夜の青さ

愛は濃まやかサンドキツチを運ぶ

父と子のダブルベッドをのぞかれる

一銭の瓦斯もうれしい父と子よ

諦めた暮らしママちゃんアツパツパ

老眼と知りそめし日を宮仕え

葉鶏頭昼の枕を胸へあて

赤心一票やりどころなし

人妻となつて卑怯な眼をつかい

字をくずす稽古もしてる老博士

先生としては句の収穫では不本意な年であ

つたらしい。雑詠では、句集「旅人」に掲載

されたのは凡聖一如をふくめ五句しかない。

私の目からして、鶴治郎の句や「子が病ん

で」「折靴」「父と子の」「老眼と」「葉鶏

頭」などは句集の句に遜色はないと思ふ。

置電燈の句は後に「旅人」に掲載の
聖書一冊 菊一輪の二階也

に定着し、諦めたの句は市場没食子氏の句

アツパツバ恋の勝利者とは見えず

を触発したように思える。

四男洋逝く、三男一步の尋一に入る、など

個人的に愛情措くあたわずと思える句も歸に

掛けられて厳しい自選をされている。

次に句会の題詠のうちめばしい句を記す。

チョコレート春の日永を思わされ

西部戦線わが童貞に異状なし

子沢山女湯へ又忘れもの

そろそろとすき焼になる松の内

何んと云われても新婚はもう帰り

今日も亦先を越されて留守をやる

金借りに来たのも連れて松竹座

国境を出て君が代に涙する

浪人をして支店へだけは寄り

さびしさは洋傘の影老いの影

剃刀の一握持つて旅に病み

職人と見えぬマントへ身を包み

貧しくともおしっこをする庭があり

晩酌は虫が鳴こうが鳴くまいが

虫を聴きに來いと新築見せたがり

虫なんか聴く顔でなし実業家

課題吟は一樣に軽いタッチで通しておられるが、焦点の決まっついてご自身のリズム感のあること、これが晩年まで続くのである。

首香のむ

宮西弥生選

世間くるくる見ているつもり鬼やんま

晩学の辞書が重くて寝てしまい

庭の松伐ってころに穴があく

対決に疲れましたと菊が枯れ

涙流して人間らしく生きている

風は素通りやさしくなんかしてくれぬ

鰯 秋刀魚だいいじな人に食べさせる

競う気を捨てると風が温かい

無人駅で長い欠伸をして独り

母だから火中の栗も拾えます

箱書きが無いので信用されぬ壺

割り箸が斜に割れたら何故さわぐ

たまごっち居てさえ秋の夜は寂し

表札を二つ並べて夫婦です

若者と同じ空気を吸う怖さ

熟柿墮つおんなじ刻を生きたのに

コーヒーの香私に元気づけました

幻を捨てまっすぐに明日を見る

アドバルーンももう下ろせないけもの道

今治市 村上久美子

鳥取県 土橋 睦子

米子市 光井 玲子

西宮市 門谷たず子

芦屋市 黒田 能子

藤井寺市 高田美代子

和泉市 中川 楓

岡山県 福原 悦子

倉敷市 小野 克枝

大阪市 稲本 凡子

和歌山市 福本 英子

米子市 石垣 花子

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 吉川 寿美

大阪市 板東 倫子

尼崎市 長浜 澄子

吹田市 山本希久子

西宮市 奥田みつ子

横浜市 清水 潮華

友の愚痴終るまで聞く歌がある

ピンセットころの疵にとどかない

守備範囲手頃な辞書を置いている

その先がもつと聞きたい市場籠

何が嬉しいはずんで毬となる小猫

危篤という針の筵で待たされる

終わつた恋を軽く原稿用紙に包む

誘う水誘う風ありおんな坂

塀の外いつもと同じ風の音

沈黙のふたりをつなぐちろ虫

口封じされて乾いてくる唾液

老松がくの字になって立っている

本箱に雑な私が見えている

母の炉の求心力にかなわない

炎えている掌です火中の栗拾う

紅葉散る思い想いの舞を見せ

目覚しがつつと鳴ってる留守の家

モナリザも眼を閉じたい日世紀末

耳打ちをなせしたのかと悔いている

七十路にもまだまだ続く未来絵図

今年また笑顔に磨きかけて生く

嬉しさも哀しさも皆仏さま

悲しみを捨てたのしみ拾う万歩計

叱られて母さんがわりになる枕

シャボン玉の輪に遠い日の子の幻影

米子市 林 瑞枝

米子市 白根 ふみ

西宮市 牧瀬富喜子

寝屋川市 井上すみれ

弘前市 佐治千加子

倉敷市 井上 富子

米子市 政岡日枝子

富田林市 藤田 泰子

米子市 木村富美子

西宮市 西口いわゑ

富田林市 片岡智恵子

倉吉市 野口 節子

米子市 青戸 田鶴

和歌山市 川上 富湖

出雲市 園山多賀子

鳥取県 石谷美恵子

寝屋川市 森 茜

貝塚市 池田寿美子

松江市 川本 畔

大阪市 鈴木 節子

八尾市 大内 朝子

弘前市 一戸 ツネ

岡山県 矢内寿恵子

岡山県 富坂 志重

愛媛県 黒田 茂代

野を渡る同行二人の笠に風

笹舟に乗って見たくて棹を出る

ははに似た仏を描いた手の驕り

この町がやっぱり一番好きやねん

上げ底の世間にいつも腹を立て

ひらきなおっていつそ女を捨てようか

これほどの贅沢はなし絵具皿

実益に遠いが趣味に生かされる

ワープロへゆっくり動く指一本

余生なれば心の化粧など思う

日まわりの今年の貌よ小さく咲く

わが暮は何処で誰が下ろすのか

ふんぎりをつける覚悟の石を蹴る

ひよっとしてひよっとしたらと宝くじ

老眼鏡嘘が言えないから困る

胃袋にストンと落ちるいい話

山山がわたしの色で燃えている

玉手箱開けて煙になる命

美しい指で殺意のページ繰る

親なんてかなしいと言うのどぼとけ

結ばれた糸も時にはもつれます

老いの皿緑黄野菜を大盛り

美しく老いるケイコを重ねて

ユートピア砂丘の果てにきつとある
材料の貧しいなかをした料理

寮屋川市 岸野あやめ

鳥取県 西川 和子

今治市 野村 京子

大阪市 川久保睦子

奈良県 鍛原 千里

八尾市 高橋 夕花

八尾市 高杉 千歩

鳥取県 西原 艶子

岡山県 大石あすなろ

大阪市 町田 達子

岡山市 川端 柳子

唐津市 浜本 ちよ

倉吉市 淡路ゆり子

八尾市 村上ミツ子

今治市 塩路よしみ

大阪市 三浦千津子

横浜市 岡田 芳江

寮屋川市 坂上 高栄

和歌山市 福井 桂香

米子市 鷺見 正子

横浜市 田中 笑子

兵庫県 中野とよ子

香川県 川崎ひかり

鳥取市 植田 一京
尼崎市 春城 年代

輪の外で見てる波紋が美しい

うまそうな匂いが洩れてごはん炊け

美容院出ると真っ直ぐ帰れない

角曲がそれからちさい旅となる

花いっぱいあるのに野菊摘んでくる

仏の子仏心を裏切らぬ

なよりの馳走温泉三姉妹

三角あげを三角で煮る母の癖

木枯しに飛び散ってゆく蟬の殻

七分咲き私そろそろ薫ります

私の愛は紙一枚の厚さかも

羽曳野市 芦田 絢子

今治市 野村 清美

和歌山市 楠見 章子

横浜市 秋元 和可

藤井寺市 太田扶美代

和歌山市 山根めぐみ

大阪市 津守 柳伸

神戸市 船津とみ子

和歌山市 桜井 千秀

倉吉市 米田 幸子

鳥取市 坂田和歌子

久美子さんの句―着想がユニークで楽しい。世間くる

くる、とんぼの眼玉に人間の生活がどのように見えてく

るのだろうか、きつと人間さまも大変なんだなあ。生

きる事のむずかしさをとんぼもわが身に比べてるのだろ

うか。睦子さんの句―生涯現役でありたいという願望の

作者、前向きとひたむきな姿勢がよく出ている。特に晩

学でこの句が一層崇高なものになりました。長い人間生

活の今日、私も含め毎日疑問から疑問への繰返しであり

ます。玲子さんの句―久し振りに美しい句と出会い川柳

の醍醐味に酔わされました。松はその家を形造ると申し

ます。故あって伐られ、心の痛みが通じます。たず子さ

んの句―毎年菊のシーズンの訪れに眺められる情景。痛

いほど菊の気持が分かるような気がします。

初

蒔苗果林選



初りんご津軽のほっぺ赤く染め
 麦畑一本一本に初日影
 初夢もなくて雪かき精をだし
 我が力試したような初任給
 初めての使い五歳が兄らしく
 初詣で祈りは一つ大往生
 この年で初めての事多すぎる
 初めての涙をみせて父叱る
 最初から奥の手見せるお人好し
 朝の戸を開けぬと今日がはじまらぬ
 新しい畳へ灯ありったけ
 初日の出紙をはみだすクレヨン画
 孫娶る急げ爺似の初曾孫
 初春は老いも若きもめでたがり
 品評会ききょうは仔牛の初舞台
 振袖がパソコン叩く初出社
 初物を沢山食べて百二歳
 初雪へ大根甘く干し上がる
 初孫を寄ってたかつて抱きに来る
 作業衣の折り目ピシッと初仕事
 恋を知り初めて友が邪魔になる
 初せりのりんごが色で叫んでる

順三
 あきら
 つね一
 凡々子
 まさと
 あずき
 雅楓
 宵草
 徳三
 和重
 英子
 京子
 幸夫
 美津子
 和枝
 良
 美子
 たもつ
 一齋
 勇太
 時弘
 雅城

米寿でも忘れはしない初キッス
 初めての人が私を知っていた
 初釜の足袋のこはぜにいじめられ
 手のひらにのせたら消える初の夢
 初恋のむかしのままでいるおさげ
 産声に空の蒼さが透き通る
 こめかみに初老の鬱が刻まれる
 生かされて初心忘れることはない
 このことは初めてですと許される
 物忘れ初老の坂で一休み
 忘れない初めて姑と呼ばれた日
 初の子がつけば背筋がのびてくる
 ひとつでも初心つらぬくむずかしさ
 まっとうに生きてゆきます初詣で
 笑い初め泣き初めもあるお元日
 佳
 今日という日は誰にでも初めてだ
 あちこちが少し痛んで来た初老
 つまずいてつまずいて初心に還る
 初霜に耐える野菊に声かける
 初恋のままで終った日記帳
 人
 初雪に蕾のバラを窓に置く
 地
 お隣もみそラーメンの初霰
 天
 毎日が初心であると悟る朝
 軸
 初巻頭人生最高記念塔
 松本ただし

一花
 とし子
 登美
 志重
 権悟
 ツネ
 岳水
 はるお
 一壺
 扶美代
 ひかり
 信子
 朝子
 恭昌
 保州
 度
 俊子
 一風
 愛論
 茂代
 瓜

光

松尾柳右子選



再生紙栄光の過去あったはず
 光つてるあなた とほけている私
 みな出前愛妻弁当なお光り
 命がけ野良猫の眼が光ってる
 床しくてちらり内面光る人
 いらだちへ女は鍋を光らせる
 逆光で見れば弱点見えてくる
 天辺で白髪がひかり主張する
 自己記録破る靴先光ってる
 スリの目が動くとテカの目が光る
 童話聞く子等の瞳が光り出す
 脇役のきらりと光るいぶし銀
 金はないけど青春は光ってた
 門限は六時父さんの目が光る
 初着ぬう光る手元の針の先
 標識が一際光る地獄坂
 金バッジほど光らぬ永田町
 目に光もらって隅のごみまでも
 うす暗い部屋だと三日月が覗く
 まっとうな光を嫌うサングラス
 不況下に欲しい一すじの光でも
 まっ直ぐに歩きたい靴光らせる

東雲
 あやめ
 和重
 勝盛
 隆盛
 京子
 良子
 和歌子
 洞庵
 正剣
 宏
 高夫
 佳雲
 正子
 志重
 ツネ
 弘
 美子
 美代子
 満秋
 倫子
 典子

路 集

光りもの身体にいいと騒がれる
絶望に光をくれた妻である
ピカピカの車ばい捨てして通る
光へと進んでいるか日本丸
せめてもの靴光らせる定年日
母さんが来ると家中光りだす
時を経て光り輝く師の言葉
名工のノミ光らせて鬼を彫る
父よりも光ってほしいランドセル
月影が光って避けた水溜り
栄光の過去には触れぬ二度の職
ピカドンの悪夢よ風化せぬように
ご来光拝む姿に嘘はない
菜園に汗光らせて土と生き
有象無象流れに光る川の色

住 佳

光るものあるはずと子を抱きしめる
陽光々々胃カメラ異常なし
ほんとうの光どん底からもらう
持ち時間たっぷり若さ光ってる
日本のてっぺんに付つ御来光

人

白杖にいつも貰っている光

地

命拾う医師が光って見えてくる

天

合格通知今日のお前は眩しいぞ

川上 大輪

御来光 紆余曲折を耐えた雪

軸

早智 三郎 剛治 みつこ 潮華 ひかり 岳水 帆雀 盛夫 ただし 鉄治 次男 仁緑 周信 章久 晴翠 重人 隆風 寿美 可住

花名刺馴染みの客で離れない
パン食になじむ異国も苦にならぬ
わたしにはなじむTシャツたんとある
マンションになじまぬ母は里を出す
補聴器もなじみ話の輪に入る
日一日婚家になじむ娘の無沙汰
家訓一なじみ客として油断すな
たき火の輪みんな馴染の貌になる
ブライドを捨てたら誰にでもなじむ
よおで来てまたなで帰る顔なじみ
ネクタイを緩めなじみの客となる
何度たててもハンバカーになじめない
おなじみについ一品を添えている
おなじみが年始の顔で来る三日
ひよっこにおかめの面の外はなし

薄味になじんで老後つつがない
御来光土になじんだ手を合せ

青い目が村に馴染んで労られ
人見知りする子が保父になじんでる
グループになじめ顔がひとつある
ふるりは温い馴染の風が吹き
無礼講でも上役になじめない

あきら 旋風 信子 倫翠 晴翠 美子 さち子 大輪 正匍 荔

なじむ

榎田英詩選



アラツとアラ昔なじみの名が出ない
君が代へなじむ昭和が遠くなり
雑居ビルなじみの顔にあるぬくみ
ゆつくりと煮こんで味をなじませる
ハイヒールなじまぬ足と思ひ知る
新しい靴がなじんで坂越える
おとなりの美女となじんで困ります
始発駅やあとやあとの顔なじみ
戒名にまだなじめない一周忌
わたくしの素足がなじむ古畳
この町になじんで町の蟲屑する
なじみよいお方の処世術学ぶ
中堅といわれて席順になじむ
平成十年なじんだ帽子も脱ごう
鳴となじみ陸にさよならする覚悟

住 佳

心眼の持つ手になじむ白い杖
古里になじむ野仏花あかり
薄味になじんで鬼の角が取れ
体臭になじむ頃には雪となる
おなじみがやさしい言葉くれました

人

旅帰りこの枕だよこの枕

地

なじみ気はなく飄飄と街をゆく

天

風雪になじんだ傘が干してある

上田 俊路

軸

パンの屑鳩よなじんでくれますか

勝風 隆風 和歌子 ミツ子 潮華 典子 狸村 佳雲 保州 正子 とし子 帆雀 英王子 あずき 日枝子 高夫 登美 強一 螢

初歩教室

題一動く

吐田公一

明けましておめでとうございます。

今年もまた皆さんと一緒に勉強をして行きたいと思います。

さて、今年初めの「動く」の題ですが、色々な動くを詠まれた中にはハッとさせられる見付け(着想)があり、選者冥利に尽きる句もあつて楽しい次第。だが

あの尊目で確かめることにする

この句が果して動くの範疇に入るのかどうか目で確かめることは目を動かすことでもあり確かめることはその行動を指すことでもある。しかしこれは理屈であつて、本来この句を読んで素直に動くに結びつけられるかどうかは甚だ疑問といえましよう。

添削句

○一言が私の心動かせる

一言の内容が欲しかった。

▽好きですの一言心揺れはじめ

克巳

○体先動くも思慮がついてこぬ

通當年とると先ず体の方が衰える。ま・ま・な・らぬで動きが思ふようにならぬの意。

▽ままならぬ体を思慮がもてあまし

動かずに案山子の用が済んで冬 多美子

下五が余分な表現と思ふ。

▽動かずに案山子かがしの用がすみ

独楽のやう動ける母はまだ達者 ミツオ

俳句と違つて川柳は現代かなづかいによる。

▽コマねずみのように動いて母達者

○選挙毎口コミすでに動いてる

選挙毎の毎とすでにが不要。

▽水面下動きはけしい選挙戦

○失恋の痛み癒えたか動き出す

敢て動くを使つたのでしようが、題を詠み込まなくても動きが表現されればいい。

▽失恋の痛み癒えたか旅に出る

○古時計振子は今も元気です

この句に思い出につながる言葉があれば

▽まだ動く遺品となつた古時計

○山動く名もない民の底力

有名な文句を用いた作句は難かしい。

▽山動く奇跡を望む民の声

○世の中の早い動きに惑う老

上八音字の流れが冗長

▽老いらくについて行けない世の動き

信幸

○吉凶に動かされない年となり

発想の転換が必要。占いに動かされない人が逆におみくじを引く人間の弱さを詠めば

▽吉凶に動じぬ人が引くみくじ

○胎動を感じ電話をかけまくり

嬉しさと不安交々でしようが、この場合嬉しさを表面に出すようにすれば

▽胎動の嬉しさ電話かけまくり

○動いても動かなくても良く食べる 美寿子

原句はただ単に食べることだけ。食べられることの幸せを詠むこと。

▽よく食べて動いて傘寿まだ達者

○再会の張り子の虎が会釈する 利徳

何を言わんとしているのか意図が通じない。原句と趣旨は異なるが再会には時事吟が

▽日本人妻の心は揺れ動き

○内緒話に勝手ツンボの耳動く 志重

勝手ツンボは差別用語。最近差別用語は幅広く禁止されているのでご注意を。

▽片隅の内緒話へ動く耳

○戦いの動きに余裕ある女

上半句と下半句が連動していない。

▽眼の動き女のいくさまだ続く

○風車動かす風を吹いてやる

見付け(着想)はいい。誰が吹くのか

▽児をあやす母が吹いてる風車

○風車動かす風を吹いてやる

見付け(着想)はいい。誰が吹くのか

▽児をあやす母が吹いてる風車

専平

○誰を待つ風に動かぬブランコが 茂代

ブランコを擬人法にして心の揺れを詠む。

▽乗る人を持つブランコが風に揺れ

○風で動く白いマストに帆掛け船 晩翠

今少し川柳を理解して欲しい。人間の姿

（生活・動作・感情等）を句に入れる。

▽孫が乗るヨットレースの白い波

○動くのか止まっているか蝸牛 崇

▽かたつむりゆっくり動きどこまでも

▽頂点へゆっくり上る蝸牛

一度ご自分でこの違いを考えてみて下さい。

○簡単なサインに億の桁動く 明美

着眼はいいが句に含蓄がない。今は亡き

今西静子さんの句に

億が舞う世に百円を握りしめ

○はえば立て子供の動き早いこと 宏

下八がこの句を駄目にしている。

▽はえば立て孫の動きに追いつけず

○動く恐さにタンステレビの位置を変え 郁子

動く恐さというのは多分「地震」のことと

思うので、率直に詠めば「地震・位置を

変えるも動くです。

▽地震からタンステレビの位置を変え

○親兄弟みんな動かす七五三 宗明

上九が冗長すぎる。

▽家中が騒動してる七五三

○ゆれ動く高値円安市場株 トシエ

円安とか株とかは一括して相場で片付けて、

そこへ人間の感情を詠み込むこと。

▽揺れ動く相場へ一喜一憂し

○シャッターが行進する子受け止める サト子

下五に要一考。参考句も感心しないが

▽鼓笛隊シャッターチャンス子の笑顔

○歩から香車馬から飛車へ早よ動く 哲平

将棋を詠んでも単に早く動く駒を詠むより、

その駒を動かす人の心理を――

▽秒読みに駒の運びがせかされる

○釣天国浮子の動きに気も揺れる 一乗

原句と異なるが、故事に因むと

▽太公望浮子の動きが気にならず

○取成してあげると母の目の動き まさ

取成してあげるとは冗句。母の目の動きは

感謝のそれだからそのまま表現すれば

▽いたわりへ母の感謝の目の動き

○喉ごくり酒屋の前は急ぎ足 まさと

酒屋の前を急ぐのは懐具合でしよう。

▽不景気に赤提灯を通り過ぎ

○健やかに動ける明日を信じてる 登美

○時々羽ばたきながら動いてる 登美

二句共冗長な部分と詠み足りない部分があり、これをまとめてみると

▽時どきは羽ばたく明日の夢を追つ

佳句

動く事できぬ選挙の裏事情 義男

悪知恵に動きの早い脳を持つ 省子

胎動に母となる日を心待ち 純子

リハビリの動く手足に拍手する 苑子

妻退院動きも軽い車イス 捷也

宮仕え紙一枚で動かされ 君江

（儂いサラリーマンの宿命） 芳水

一斉に朝を動かすママの声 芳水

（明るい家庭が浮ぶ） 啓子

たそがれる明日へ今日をよく動き 啓子

（人生のたそがれの着想がいい） 啓子

運動会母の目祖母の目忙しい 啓子

（情景が浮ぶすばらしい句） トヨ子

空耳か動きを止めた母の声 幸枝

（思いやりの心が） 幸枝

小錦が前に動けば湧く土俵 徳三

（ファン心理の面白い見付け） 徳三

大都会動く歩道を急ぐ足 和可

（都会人の性格を如実に） 和可

よく動く孫のお守りがグアイエット 智加恵

（アングルがいい） 智加恵

快方のベッドにあごで動かされ 幸子

（文句なしの句） 幸子

私の句 少々なこと動かぬ太い眉

スペイン紀行

田中正坊



サグラダ・ファミリア聖堂

平成九年の十月二十三日から三十日まで、スペイン八日間のツアーに参加した。第一日は関西空港から英国航空で出発、スペインへは日本からの直航便がないため、ロンドン空港でイベリア航空に乗り継ぎ、バルセロナ空港に到着した。スチュワードスは、黒髪 of 典型的なスペイン美人であった。

翌二十四日の市内観光では、まず一九九二年に開かれたオリンピックのメイン会場となつたモンジェイクの丘に上った。なだらかな丘陵のあちこちに各種のスタジアムがあり、地中海の玄関口であるバルセロナ港が一望の下に見渡せる景勝の地で、ソテツやシユロなどの熱帯性植物が生い茂っていた。

次いで有名な建築家として知られるガウディ・イ・コルネツが設計したグエール公園を訪れた。もともと分譲住宅地として造成された跡地だが、さまざまな建物の壁や広場の周囲の石のベンチには、色とりどりの陶片がはめこまれている。立柱で支えられた石の橋は、上は馬車の道、下は遊歩道となっており、起伏の多い公園全体が市民のいこいの場として利用されている。そしてこれらの建造物は、自然には直線はないというガウディの考え方からすべて曲線を描いている。

サグラダ・ファミリアという聖堂の巨大で複雑な建築には、一見して圧倒された。聖家族教会ともいわれ、敬虔な信者であったガウ

ディの構想・設計にもとづくもので三つのサファドの中央と両側には、高さ百メートルの双塔が建ち並んでいる。「石の聖書」と言われるように、建築物のすべての柱や壁には、キリスト教にちなむ人物や聖書物語が刻まれており、着工してから百年経つが、完成にはあと百年かかるといわれている。

バルセロナを含むカタルーニヤ地方は、イベリア半島で最初にローマの植民地となつたところで、バレンシアへ行く道で通つたコスタ・ドラダには円形劇場があり、町のどこを掘つても、ローマ時代の遺跡があるという。

翌日はドライブの一日で、バレンシアの朝のバザールを見学した後、地中海沿いに南下し、海水浴場のあるアリカンテに立ち寄り、浜辺を散策した。波静かな海に面して白い砂浜がどこまでも広がり、サボテンやハイビスカスの咲く浜辺の道には、半袖や水着姿の男女が行き交い、海浜では太陽に肌を焼くトツプレスのセニョリータを見かけた。まさに南国の風景であった。

第四日に訪問したグラナダは、イスラム・スペインの首都がおかれていた都市で、「回教文化の華」といわれるアルハンブラ宮殿を訪れた。前夜、バスで市内の丘に上り、ライト・アップされた宮殿を展望し、幻想的な光

景に感動したが、実際に入場してみてもその広大な規模におどろかされた。アルハンブラは「赤い城」という意味で、もともと岩として造られたが、代々の王によって拡張され、王宮として使われた。すべての建物の壁面には精緻なアラビヤ文様が彫刻され、隣接のヘネラーリフェ庭園も美しく、アラブの町に迷いこんだよつであつた。

イベリア半島の南端にあるジブラルタルには軍港があり、イギリス領となっているが、ここに近いミハスを訪れた。リゾートを兼ねた観光地となっており、陽光を浴びた丘には白い壁の家が軒を並べている。皮製品を中心にスペインの特産品を売る店が多く、若い日



古都トレドを背景に

本人夫婦が手づくりのアクセサリーを売っていた。旅も四日目で、多くのスペイン人に出会ったわけだが、他のヨーロッパ人と比べて身長は高くはなく、アラブの血が入っているためか、男女ともに眉が濃い。髪は黒または茶褐色で、金髪はほとんど見かけなかった。イタリヤ人によく似ていると思った。

次の日はモーツアルトのオペラで知られるセビーリアで、回教建築のアルカサルとカテドラル（大聖堂）を見学した。イスラム建造物や文様ももう珍しくなくなつたが、この建物はキリスト教徒の国王によって大規模な改修が加えられている。一方、カテドラルは後期ゴシック様式のキリスト教寺院で、ローマのサン・ピエトロ寺院、ロンドンのセント・ポール寺院に次いで三番目に大きい。寺院内にコロンブスの墓があり、いくつもの礼拝堂が並んでいる。鐘楼となっているヒラルダの塔は、回教寺院のミナレットを改築した七十メートルの塔で、内部は螺旋状のスロープとなっており、頂上からの市内の眺めはまた格別であつた。

ゴルドバの回教寺院メスキナは、ピークにあつたイスラム建築技術の粋を集めた建物で、見事の一語につきる。ただ寺院内の中央部分に、とつてつけたようにルネッサンス様

式の聖堂があり、イスラム教とキリスト教との角逐を見る思いであつた。午後から新幹線 AVE でマドリッドに行き、五つ星の名門ホテル・リッツに宿泊した。

いよいよ最終日、ホテルのすぐ隣にブラド美術館があつた。日本人画家のガイドで見学したが、ゴヤ・グレコ・ベラスケスの作品をはじめ収蔵絵画約三千点、質量ともに世界有数のコレクションといわれ、日本にも来て評判になつたゴヤの「着衣のマハ」「裸のマハ」も展覧されていた。スペイン広場では、おなじみのドン・キホーテの銅像に対面した。

「もしスペインに一日しか滞在できないとしたら迷わずにトレドへ行け」といわれる世界文化遺産の古都トレド。司馬遼太郎が「南蛮の道」でも絶賛しているが、三方がタホ川に囲まれ、サン・ヒルハンド橋を渡つて石造の門をくぐると、ローマ文化・イスラム教・ユダヤ教・キリスト教の四大文明が堆積し、中世がそのまま凍結したような町がそこに横たわつていた。

さて終わりにフラメンコ、セビーリアとマドリッドの二か所で見学した。ギターとサパテアード（足の踏みならし）、パルマ（手拍子）で踊る姿はさすがに迫力はあつたが、期待したほどの感激はなかつた。



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔みちのく(前月分)小寺 花叢報

ハエトリシメジ蠅がいないと強請られる
初物でないのに笑い続けている
毒きのこ香りがまませれば味もなし
毒きのこあるがまま生き還浄土
そつと舐める甘辛味の笑い茸
笑い茸食べて聞いている癌告知
怒鳴られて無事でよかつた毒茸
オーロラと契つたらしい月夜茸
悲しみを忘れてみたい笑い茸
日本の空にも生えた毒キノコ
阿部定がニタニタ笑う毒キノコ
内閣に毒茸混じっていた怖さ
女五人笑いキノコが効き過ぎる
紅天狗よくぞと思う厚化粧
毒キノコひとつふたつは腹にある
檜山で探しています笑い茸
うつの日に試してみたい笑い茸
月夜茸きつとあなたを狂わせる
月夜茸満月の夜を情死する

順三 龍人 生恵子 花匠 ヒサ子 アサ 井蛙 黙人 花峯 雅城 一花 凡々子 柳々 北歩 隆樹 ツネ ふさま あかり しげる

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

おおむかしそのまま掘られ顔を出す
おトイレの窓で悲しい月を見る
洪柿へ歯形残してそのまんま
布団並べて小春日和のペランダー
自分だけ老女と思わぬ老人会
そのままにお受けしますと頬を染め
退職金私自由にしてと妻
忘れてた借金取りがちやんと来る
歯を磨く再出発をするも良し
吊り皮で携帯電話よう喋る
自由紙に墨痕さやか和の一字
シャンソンが流れて街は秋の彩
雑巾に花咲く時の夢を追う
雑巾が白い新婚さんだつう
雑巾は手縫一途に母達者
雑巾の面子玄関光っている

川柳塔打吹

米田 幸子報

ほどほどをセーブ出来ずに肥える秋
ほどほどの距離おいてます好きだから
止めろとは言わぬが酒はほどほどに
ころころと寿命がのびる飴を舐め
日本人妻戦の重み肌で知る
ため息に心の動く秋ぎくく
ほどほどを知らぬヤングの暴走車
家計簿が妻のため息知っている
相槌の下手なカラスが森追われ

いわお ハツエ 向西 すみ 鈴 満寿蔵 勇次郎 昌子 澄子 石舟 十四郎 鹿太 江美 弘治 正治 夢之助 陸子 きみ子 勝見 螢 たけの 雄々 みほの 芳光 小康子

ほどほどの幸せがある湯気の中
ほどほどの苦味が良くて捨てられぬ
ほどほどに妥協し合って行く旅路
ロボットに相槌を打たされている
ほどほどにしないといふ矢飛んでくる
新妻のつくため息が気にかかる
ほどほどに坂のない道選んでる
色もきて弾む御輿に花が咲く
胸まわり財布ふくらみ景気づき
スクープも仕事とはいえてほどほどに
年金の額にため息ついている
相槌を打ち打ち思いう別の道
相槌のうまい男にしてやられ
ほどほどに抱いて下さい折れるから
陽が落ちた海へため息ひとつ吐く
大トロの握りため息ホツと出る
ため息も拾って行こう秋の道
ため息は老眼鏡が見えぬ時
ため息が身体の不調ついで出る
ため息は止そう美人が傍に居る

川柳塔みちのく

小寺 花叢報

母近きて懺悔尽きない夜半の月
木枯しがははと一緒に叱咤する
三世代住むと信じている古希だ
封のまま亡母秘伝のブドウ酒
木枯しにただ一葉がしがみつくと
親と子の願い落差が有りすぎる
一ベンに二児の父親舞の海

孝恵 よしえ 節子 玲子 和枝 佳女 明美 セツ子 禎元 京子 しろう 弘朗 御前 季芳 博文 克枝 玲泉 富枝 幸子 哲郎 ふさえ 順三 凡々子 ヒサ子 龍人 隼人

舞の海土俵に奏でる円舞曲

巨峰食う巨乳の乳首吸うように

木枯しに冬眠のこと考える

人を許した日本枯しが鳴いていた

落ちぶどう転がる先は阿弥陀池

完熟のぶどうワインの旅に出る

ぶどう粒愚痴を醸して人酔わす

辞令一枚しばし会話のない夫婦

木枯しが吹いて野仏くしゃみする

涙ひと粒言いつつ知る親の老い

豊作の汗がつかりする安値

木枯しと虹が振り向くまで喋る

木枯しが吹いて津軽は眠くなる

木枯しよなんと大きな挫折感

川柳高知

川竹

松風報

愚痴ばかりこぼしヤクルト勝っている

嫁だけが笑顔で聞いてくれる愚痴

愚痴言うて気が暗れるなら聞いてやろ

ムツゴロウ愚痴が聞える干拓地

愚痴詰めた袋実家へ開けに来る

手鉄を騙して使う年の功

花鉄花といのちの話など

レトルトへ鉄欠かさぬ台所

花鉄女らしさを取り戻す

福祉切る鉄も研いでいる役所

街路樹を刈込む鉄秋間近

親展の封書鉄で開けられる

七五三やがてはそむく子に見えず

隆樹

柳々

生恵子

北歩

ツネ

銀波

花匠

井蛙

一花

千加子

黙人

花峯

五楽庵

一日の哀欲抱いて陽がしずむ

秋分の夜長 邯鄲鳴き止まず

おでんには思い出がある冬の酒

留守電の中味ゼロです今日終わる

岬川柳会

八十田洞庵報

鋭い目消えてボス猿座をゆする

疲れます鋭い視線背にうけて

国宝の鋭い太刀に身ぶるいが

鋭くも修業で切れる芸の道

着飾って別人にする魔の衣

今日の羽化孫がするどく追う日記

税関の鋭い目付きぎよつとする

すまして鋭い爪が見えてます

着飾って出合う六十路に華がある

刃物より鋭いベンの恐さかな

鋭い目国民の味方オンブズマン

直感の鋭い妻に借りができ

老いの耳底う鋭い目が光る

吊り上げた鳥賊が睨んだ鋭い目

丁寧な言葉のうらに鋭い刃

外人が日本を鋭く衝いてくる

背信へ鋭い言葉攻めてくる

英会話母に教えて月謝とり

盛装を脱げば乳房もホツとする

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

手のひらに薬劑並べひと安心

匂うから妻の監視の眼が光る

菊野

竹萌

千恵子

幸泉

年子

朋子

龍弘

正美

令子

浪速子

みつ子

とみ

幸子

ユミ子

孝子

勇

みやこ

悦子

俣子

里子

信博

ヤエ

洞庵

英雄

一男

弱い子も安心できる母の胸

満足で軽い寝息の母の胸

一本の電話で安心できるのに

俄か雨急いで店も傘並べ

ごさぶりに夫婦喧嘩の腰が折れ

秋暹路女房の腰を押ししている

古くても磨けば光るパパの靴

不意の各ママの日頃の腕光る

情報が渦を巻いてる取引所

つよい陽を気にしながらのショッピング

強者ほど譲るマナーを知るゆとり

腰つきで踊りの師匠物を言い

誠実が家族潤す父の靴

蟻地獄下でかい知らせ待っている

情報も仕入れて帰る縄のれん

佳句地十選

(12月号から)

海老池

洋

風の都合で宙ぶらりんのころ

断ち切ったはずの心が揺れて秋

その中のひとりこつそり手を下ろす

満月になったら告白をしよう

煩惱を捨てると石も温かい

片方のガラスの靴は城にある

たそがれて塔は仏の顔になる

その度に父を支えた小さな母

自然界に余分なものは何もない

ああヒト科地球に残す負の遺産

永寿

満寿蔵

晴子

吉昭

昌三

喜久造

鈴三

三歩

好治

富美子

東園

久美子

風琴

野鶴

勇次郎

僕が座ると美人が寄ってくる不思議 夢之助

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

相談を受けて本人より悩む 富湖

本箱が読みや読みやと言つてゐる 金太

残照へ紅葉と共に炎えてみる 英子

無人駅紅葉迎える村祭り 美子

残照へ燃える紅葉と地の酒と 稚代

逆療法別れるはれとけしかける 保州

相談がすぐぐにまとまる好きな道 利治

相談はいつもと違ふ顔でくる 和重

鏡と相談矢張りしし買いました 紀久子

腹立ちまぎれ箱から本音出たしまつ 良

心の箱へ熱い約束伏せておく 寿子

箱の中に見たこともない鍵がある 誠子

くじ箱の中で掴んだ夢のゆめ ふみえ

みる勇氣見ない勇氣の玉手箱 精子

道具箱男の命かも知れぬ 美羽

後世へ残す汚れを拭いておく 豊太

愛してゐる証を残す傘マーク 呑天

絶筆の残る余白にあるドラマ 正博

子へ託す亡父が残した未完の絵 高夫

生き残りかけた企業の長い耳 武春

単身赴任心残して帰る朝 大輪

富湖 金太 英子 美子 稚代 保州 利治 和重 紀久子 良 寿子 誠子 ふみえ 精子 美羽 豊太 呑天 正博 高夫 武春 大輪 さち子 輝子 泰子 富美子

少年法を守る賛否が残される 千寿子
誠実な父の生き様 子に残す 紀美女
根が残る限りまだまだ花咲かす 佐代子
身に覚えあつて相談つまされる 克子

川柳塔みぞくち 小西 雄々報

ふる里を思いださせる柿送る 康女

ことさらに隣の柿の葉が落ちる 正光

夕映えに陶工しのぶ柿の色 久子

柿供え位牌の前でひとり言 智恵子

最後には小鳥の餌へ木守柿 豊枝

柿熟れて山の紅葉が楽しみだ 信教

味の良い柿の木祖父の植えたもの 静江

干し柿が軒下飾り冬を待つ 弘子

廢屋の庭の柿の実淋しそつ 鈴枝

豊作へ甘味十分庭の柿 雄々

ローズ川柳会 山崎 君子報

秋海棠名前を先に好きになり てる

窓際も住めば都よケセラセラ ミサヲ

心の裏を見せる眼はやはり窓 キク子

亡き友と語り明かした窓の星 みつ子

蘇生してまな裏で見た窓明り 藍

愛ぬくしいろんな人と手をつなぐ 哲子

恙なし沈む夕日の窓に佇つ トミエ

冬木立株が上がると下がらうと 貴代子
終戦日窓に点りし灯の赤さ まさお
目をつむる心の窓を開け放つ いわゑ
控え目に生きて波には逆らわす 武庫坊

覗き窓に遊女が住んでいそうなり 年代
遠い日の夢よみがえる波の音 雅子
波底で仏の声を聞いている はつ絵
マンシヨンの窓それなりの風入れる 民平
夕焼けの紅葉の中に友といる 君子
引き潮の一途さをただ見習おう 義子
海なりは幼い日々の子守唄 笑女

サークル檸檬 小林 一夫報

当りくじ一枚家庭崩壊す あずき

ささやかなギャンブルくじを引いてみる いわゑ

くじ運がつきて故郷に帰るゆく おみくじが笑うピラカンサは真つ赤 雅子

流されぬ杭 憎まれるかも知れぬ 房子

シナリオを書きかえながら生きてる みつ子

解き放つはずの趣味にも縛られる 智恵子

菊人形武者ぶるいして匂い出す 希久子

匿名の男女でありし 牡蠣する 喜美子

携帯を柩の中に入れてゐる 薫

一夫

はびきの市民川柳会 芦田 絢子報

難聴は少し悲しい笑顔添え りつえ

葱ききむ一人がひとり音の音をたて 泰子

検査する度に薬がふえていく 晋

物ばかり増えて小さくなつて住み さとみ
雨音もまた良しと聞く秋なけば 恭子
夢のない話にくれる老人会 敦子
すんなりと来た訳でない共白髪 志洋
飼ひ葉補ければコスモス二つ三つ 猿杏

好きですと言いつせなくて空を見る
運動会ママパラッ秋の空
その言葉空々しいど解ってる
独りつ子旅に出す日の空模様
ちよつと一服見上げる空にちぎれ雲
曇り空日本の景気思わせる
美人画を紙め回しての絵画展
傷なめる小犬のたりわりそつと抱く
紙められているとは知らぬベレー帽
釣書に舐める程度と書くお酒
旬の味やはり御当地舐め歩く
がたがたと言うから酒がますますなる
がたがたになつてもプラス志向です
がたがたの自転車きみも卒業だ
七転び八起きがたがたせんでいい
がたがた言うな風が運んだ噂だよ
クラーク博士疲れていますボーイ達
ボーイフレンド出来てあつさり髪を切る
ラッキーボーイ負けてる試合覆す
少年が愛という字を書きなぐる
金づるを追つてたびたび党を変え
初孫をたびたび覗き叱られる

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

宇宙にもいじめがあるのか流れ星
朝市の野菜は露を抱いたまま
いつからか曲つた腰にへソが泣く
知らぬ間に会員という担ぎ手に
はすかひになつた感情流す酒

辰子 たけし はるよ 一壺 四三郎 かつみ 俊男 吐来 昭平 重人 絢子 悦子 洞庵 ゲン吉 みつこ 庸佑 扶美代 金太 敏

新婚は朝市までも手をつなぎ
会員にならねば取り残されそう
朝市がくると亡母の背ながみえ
決断にふんぎりつけた流れ星
会員にされて一票たてまつり

西宮北口川柳会 亀岡 哲子報

病む人に寄せ書きくすりより効いた
片仮名で書く薬はよく売れる
カラオケは心をなおす薬かも
病人のふところ寒し高薬価
百薬の効なく巡る百度石
薬と毒のはざまて酒は人に媚び
信号を読みちがえると森へいく
黄信号急ぐ用事のないわたし
信号など無視したような恋である
日銭追うくらしに菊が活けてある
オアシスを追つて砂漠に迷い込む
追いかけて行方不明の青い鳥
裏通り吠えない犬が追うてくる
今はもう一兎も追えぬ足となり
牛追つてはや虎の絵の年賀買う
落とす蓋コトコト亡母の声を聞く
ゆつくりと私に返る紅落とす
ブランコの鍵つ子置いてゆく夕日
情熱を燃やしつくして散る落葉
落ちて行くのが分かる日の吃水線
秋刀魚焼く株の下落を聞きながら
まだこりずまた落された陥し穴

かつ子 聖子 博利 清泉 白汀 二南 トミエ 正坊 香子 絹子 義子 佳秋 いわゑ たず子 鹿太 能子 紫香 てる 哲子 諷云児 澄子 石舟 春蘭 房子 透太 江美

かきこそと落葉転がし遊ぶ風
ピアス片方に帰つてみれば無い
目のうろこ落とす広辞苑の一ページ
なんべんも落ちてお医者を諦める
あまり翔びすぎてアランが落ちる
日陰ばかり歩きたくなる落ちこぼれ
珍客へます座布団を裏返す
鼻毛抜いて思案なかなかまとまらず

城北川柳会 吐田 公一報

千魁に集落現るグムの底
松茸につられて旅行申し込み
写経百巻迷いに愛の深さ知る
うれしさを何と申して手を合わせ
残り火をかき立て今日も無事に過ぎ
秋風の恋はせつなく散りいそぐ
老いてなおバスの底にある慕情
底のない泉のような親の愛
積ん読を崩す読書の秋だもの
懸命に咲く朝顔を抜きかねる
落ち込むと胸一杯の深呼吸
秋の雲繚紗として街遠し
青い空雲とのダンス平和なり
結願の四天王寺は秋の雨
あいりんに落ちつくまでの人生譜
悪友だやがやっぱ開いた夏休み
ロマンスの花が咲いた夏休み
ラストダンス茶呑み友達だけでよい
千円で済む道草がくせになり

静子 美智子 白湯子 晴美 夜船 曙蝶 萬的 政子 美代子 典子 義江 トヨ子 史風 高栄 達子 あきよ 昭子 春蘭 和歌子 あい子 あやめ 陸子 久留美 寿美子 扇帆

肩書きがとれて親しみ湧く笑顔
向日葵が狂い咲くよな火のマンボ
アングルをかえると見えてくるあした
風の吹くままに揺れてる葱坊主
大臣が素顔を見せた辞任劇
ここだけの話空気に運ばれる
赤い羽根つけて白寿の万歩計
姑の立場でめがね替えてみる
蟬しくれ蟬の命が降ってくる(追加分)
軸足をしっかりと二十一世紀

京都塔の会

松川 杜的報

手分けして探した犬が恋してた
父の墓洗う姿が父に似る
耐えている姿が本当の私です
湯上がりの姿モンローを越えている
才能に恵まれすぎて友がいず
子玉に恵まれ母は村を出ず
恵まれた老後無心に鶴を折る
飽食の恵み陰に心飢え
頭脳には恵まれ心病んでいる
ふるりの恵みが届く宅急便
手をつなぐ友に恵まれ良い余生
お恵みの命の先が見えてくる
威勢のいい女神で弾む舟御輿
逆光に女神の黒い髪ひかる
音も立てずに女神は去ってゆきました
影のない女神とエレベーターに乗る
女神にも夜叉にもなつて添いとける

一枝 一 朝子 白峰 倫子 千歩 八重 とし子 達子 公一 克治 淳朗 吉之助 京子 白浜子 紫香 杜的 巨詩 福子 諷云児 メ女 英一 波留吉 百合子 磯 豊次 芳子

私の女神 福沢諭吉の札でよい
女神だと両手合わせて困らせる
女神にも夜叉にするのもみな夫
岩戸からそつと覗いている女神
コツはもう掴めた女神のすねる時
ガサゴソと義理で芝居に來たらしい
自分の年考えたらと子に言われ
花と対話の時の流れを大事がる
足の先から秋を感じて歳思つ
おどおどと歩けばろくなことはない
中流の暮しを自負し秋刀魚焼く
忘れんといてじやがいの芽がのぞく
金婚へいよいよ高し秋の天

川柳ささやま

酒井 靖子報

舞台裏叱ってくれる友がいる
火傷せぬうちに大事な舌しまつ
銀の波すすきヶ原が月を呼ぶ
香水に縁なく農に命かけ
余生とや祭り太鼓を遠く聞く
いい声に騙されました電話口
淋しい日親の遺影に声かける
どなり声好きで出してる訳じやない
香水を一滴落し敬老会
天の声地の声亡妻の声で生き
ふるさとの母の声するソバ枕
香水のかおりが残る日の若さ
ふり向けば亡夫の声聞く里の山
香水を妻には買ったことがない

とし子 高栄 庸佑 求芽 てる 笑女 達子 武庫坊 年代 春蘭 美穂 水客 惠美 とよ子 純子 美智子 多美子 すす子 末野 一 梨 八重子 素水 とみ子 つや子 ヒサ子 和子

大声になって勝負はついている
酒が出てから本当の声になる
子も孫もワイワイ揃う村まつり
ほたる川柳同好会 井上 直次報
もう泣かぬつもりで駅に來たけれど
無人駅別れの記憶ばかりある
眼科医は駅で時々会う女性
喜寿の駅純行列車に乗り換える
エキデンが世界の言葉に昇格し
句碑のあるローカル駅に下りてみる
人生のドラマが回る駅舞台
千円で行けるとこまでいった駅
両親も逝きて通過の駅となる
高架駅いつも夏なら良いのだが
駅弁に古里捜す日の孤独
柔らかな言葉で強い京女
柔らかな乳房思わずちぎれ雲
柔らかな乳房に眠る生命抱き
柔らかく言われ反論出來ぬまま
することは柔らか頭だけ固い
柔らかな日ざしに猫と眠くなる
やわらかい頬つべ突ついて起すパパ
隙突いてもいつも暗示にかけられる
いつも私待つ事になれ強くなる
ライバルの背中をいつも視野に入れ
いつもより早く目ざめる日曜日
妻病んでいつもの日々の有難さ
もう日課不精夫婦のばやき合い

芳郎 可住 靖子 螢柳 明光 博史 直次 祥風 たけお 清史 保子 敞子 まみ子 セツ子 正安 竹二 よしろう 昭子 久子 桂子 雪子 ただし 吉太郎 馬洗 善守 正三郎 勝

子育てで褒めずにも叱つてた
恋敵いつも笑顔をとやさない
喫茶店いつもの顔を探してる

川柳塔まつえ吟社

恒松 叮紅報

宅急便母の愛情詰まつてる

朽ちた箱亡母の結んだ紐のまま
上げ底の箱に溜まつた不信念

菓子箱に小さな義理を背負わせる
硯箱今日はめでたい墨をする

ふりだしはリンゴの箱の新世帯
葉が散つて急に無口になる梢

気が散ると何もしないことにする
わたくしが散る日は神の手の中だ

柿の葉の未練一会の風に散る
地平線南で散つた兄のこと

コーヒーに嫌われている私です
コーヒーの染みを残したまま別れ

山頂で沸くコーヒーと雲を呑む
雨の午後ひとりコーヒーかきまわす

コーヒーを飲んだぐらいの仲でいる
コーヒーを一気呑みして恋終る

煩惱の虫は死ぬまで飼っている
無器用な指がムカデに刺されてる

謳歌した虫が行きつく無縁塚
私にも虫にもあつた反抗期

ああ大地虫はゆたかな土愛す
こおろぎが無人の駅を秋にする

英子 けいすえ
キヨ子

みえ

多賀子

房美

久枝

邦代

桂子

早苗

一葉

静江

博子

奏子

きみえ

蝋

勝平

長吉

午朗

友子

登志子

日出子

太泡

台風が去つて落ち葉の吹きだまり
葉ばたんに期待をかけて年終る
打ち明ける話落ち葉も耳にする
春の夢託して枯れ葉散つていく
根も葉もない噂が一人歩きする
最後の一枚枯れ葉アライド持っている

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

金木犀祭り囃子も乗せて来る
嫌煙に一家の柱蝋並み

至るとこ子孫栄えて泡立草
入れ食いの足場恨めし潮洗う

街の灯を全部消したい今日の月
日の丸の真つ赤な太陽顔を出し

天の声地の声生かす民の声
手になじむグイ呑み撫でる老いの章

あの飲み屋女房の方が顔が利き
朝飯が済めば白紙の予定表

十六夜と読めばやさしい月の貌
ゆつくりもできぬと祖父に村の役

金バッジ黒い光がつきまとい
初場所の枡にモンゴル服の客

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

弥次郎兵衛の中心父は傾かぬ
傾いた夕陽よ今日もありがとう

傾いた脳から少し案が出る
ライバルが先に傾きぼくの勝ち

ひぎ迄の水でSOSと泣く

米子 義良 芳枝 静恵 与根一

叮紅

晴翠

タ弘

幸夫

虹汀

久仁於

勝視

輝夫

高明

あき

四郎

公一朗

正剣

ロボットが走り職場の絆浅くなる
浅い小鉢に沢山盛つてこぼしている
眠り浅い時は私の罪洗う
浅いはす女の渡る川がある
眠り浅くて春の水車がかしましい
ラブレター出した夜から夢浅い
母の味にやつとなつたよ浅漬けが
まだ解けぬ浅い所に埋めておく
ふる里に深くて浅くなる絆
浅瀬から岸のようすを見ておこ
懐の浅いわたしの爆裂音
おとし穴浅い自力で這いあがる
妖精のプールが浅いスूप皿
神さまとひと休みする浅い棚
父母の教えは浅いところに埋めてある
蛇が身を隠すに浅い花の下
独り善がりて未だに浅い壺を出す
浅瀬から川の流れが速くなる
浅くなった井戸の話はもうしない
水鏡浅いわたしが揺れている

うぶみ川柳会

西村 黙光報

三男の青天井と五十年
悪いこと次は良いこと待つゆとり

良心の音が聞こえてなお迷い
良心を売つてもほしい椅子がある

口笛が響く良いことあるらしい
良識の府に悪霊が棲んでいる

嘘なんか吐かない百舌の声がする

玲子 恵子 田鶴 亜弥 ふみ 天雀 弘子 紫布 富美子 千春

美世

寿々子

てい子

晶子

日枝子

瑞枝

荒介

花子

千代

ユリ子

華子

雄人

明美

ひろ子

鬼桜

蝋

するどい百舌の声に蛙がふるえてる
よく通る道だがいやにけつまずく
亡き夫の袖も通さぬ躰糸
均等法男の意地を通させぬ
決断を迫られそうな百舌の声
再会のみち通り名が生きている
子を通す道を確かな凶に残す
美人が通る鬼のデスクも背伸びした
通行止めの道が通って見たくなる
通って来た道を静かに振り返る
里の道通るといっても若返る
思わずも腰をおとして葬の家
素通りの泣き顔何があつたのか
針めどを何度通って来たことか

大原川柳社

矢内寿恵子報

手を振って歩こう秋の空高い
友よなせ六十歳を散り急ぐ
髪型を変えて女を持ち直す
産声を聞いてその父手術台
何時までを舞える蝶かと問いかける
場違いと思つて入る美術館
玉入れの出番うれしい祖母を連れ
ゆずり合う心が温い三世代
豊年の祭り太鼓に獅子が舞う
ネオン街怖い話がたんとある
本当の事は知らない影法師
秋空へ追慕の夢を雲にのせ
利口そうな女の知恵が頭打つ

銀嶺 孝男 明美 静生 あづま 葉士人 蛙泡 天人 一枝 黙光 天和 朱雀 宣子 登美枝

こふゆ 敏子 正己 巴子 喜美子 悦子 辰江

娘の家でお客になつた秋祭り
秋祭り屋台も揃う空の青
旅先の一皿亡母の味に似て
少年の笑み復興の芽が伸びる
ゆきずりの風が残した謎ひとつ
ああ世相びつくりばかりニュース欄
仏塔よ郷原の徒を刺す如し
子を庇うかたちに母の背が曲る

川柳後楽吟社

從野 健一報

くり返す出会いと別れ流れ雲
みんな手を上げたから味方と思つた
あつさりと蟻の主張は斬り捨てる
何ごともなかつたように朝のみそ汁
地球の呻きを静かに聞いている
人生は意外もあつて面白い
ロボットに背を見せるる負け戦
バージンロード妊婦肅々歩を運び
米作れ作るな百姓はピエロ
この先を言えば私もうすく傷
シャボン玉そよ風受けてどこへ行く
踊る尾を残して逃げる青蜻蜓
私語をして罪を消す気の席を選ぶ
頑張れと笑顔のナースに励まされ
豆腐売りラッパ空しく路地の暮れ
舌戦に負けて悔しい花いちもんめ
窓際で眼鏡がみてた裏表
正論を誰も相手にせぬ不安
老い多忙趣味の一つも捨てられず

朝代 美佐子 美さえ ひでの 和子 あすなろ 妻子 寿恵子

たけ志 正秀 桃風 忠成 青銅 哲郎 博友 邦季 金吾 美智子 浄美 佐加恵 吉則 秋月 道博 幸子 拓治 まさお 柳五郎

竹原川柳会

時広

一路報

その場飛び孫の就職まで生きる
松茸の小さいながらも持つ香り
線香の煙がゆらり手を招く
テレビ電話化粧をして受話器取る
助けた男に小舟を盗まれる
美女ひとり次の期待の高島田

まんまるな月とあなたと歩いて
目覚ましの音がだんだん憎くなる
人間の味美しく枯れている
人間の味美しく枯れている
亥子餅そろそろ炬燵の出番なり
濁点を付けて人間らしくなり
いのししに畑の味を聞いてみる
父さんにスキヤキの味まかせてる
映画監督人の持ち味生かす術
山菜を美食にあきた口がほめ
人間味豊かな人の深い皺
喪が明けてひとり味の味になれてくる
おふくろの味を恋う日の五目寿司
お番茶も湯かけん大事味の良さ
真夜中に目ざめも一度湯につかる
うぶ声に湯の音静かおめでと
熱湯に三分で足る妻の昼
歳月や五右衛門風呂と白いバス
湯が沸いてもしやべり通している女
父ちゃんと同士の湯を浴びる
芸術の秋をしずかに匂をつづる
座布団の狭さで踊る芸達者

照路 吟平 敏明 信善 草風 鮫虎狼

高史¹ 高千³ 蘭幸 清水 節夫 眞舟 貞子 喜美子 正宏 鬼焼 菁居 喜久恵 八重美 孝枝 静佳 一枝 笑子 静風 房子 美佐雄

人生白寿芸のひとつ残したい
皿回しなら出来そうだ真似するか
何一つ芸という字のない私
芸ひとつ心にゆとり持ちたくて
芸の虫だった親父を越えられぬ
笑わせることに生き甲斐持つピエロ

川柳塔ふくべ川柳会

橋本多哥由報

コスモスに風を渡して汽車が過ぎ
走りたい衝動秋の天抜ける
酒も呑み薬も飲んで燃えている
この罌を愛と悟って四十年
酒を飲む老父の幸せそうな顔

川柳大阪

坊農

柳弘報

まつたけで賑わう食事久しぶり
タイトルで売れゆき変わる週刊誌
賑やかな街の裏には何かある
賑やかに見えて淋しい男いる
低金利銀行だけが笑ってる
金利ぶん払えと妻はいつも言う
タイトルは日頃の努力の積み重ね
所詮金利に縁がないがあんまりだ
低金利許せぬバンクその儲け
タイトルを失い芸能人となる
へアピース着けて女の顔二つ
結婚式見栄の金利もつっこか
父さんに髪の話はご法度だ
賑やかな祭りの後にゴミも舞う

夏喜 千年枝 規代 栄恵 蝸牛 一路
明美 美恵子 信子 寛子 春恵
真紀 まゆ子 信醉 須賀夫 照月 多香 かよこ 喜楽 青道 良花 美花 咲

脱税も出来ずに預けりや低金利
呑むまでは賑やかだった泣き上戸
セツトした髪ほめられた朝はずむ
禿げたのが童顔で来るクラス会
行革のタイトルだけで先見せず
賑やかな宴に気づき風い上司
相槌に心許した日の悔悟
新聞を賑わす腹の立つ話
あの時は金利で旅が出来ました
長い髪バツサリ切って出直す気
正直に信用という金利
駄菓子屋が潰れ賑わい消えた町
賑やかに酒一合で踊りだす
タイトルを奪われ人間らしくなる
賑やかなお通夜ホトケを喜ばす
積み立てた愛の金利は変動制

三幸川柳教室

三宅

保州報

川童 鉄心 柳昌 本蔭棒 希久志 雅果 上げお まつお 洛醉 柳宏子 一步 ダン吉 笑風 金太 重人 柳弘

友のミス庇う我が子の目がきれい
むつごろう一匹僕は庇えない
学歴を汗で庇って回り椅子
妻庇うだけがやっとの破れ傘
庇われ過ぎて心の籠が締まらない
ご近所が庇ってくれる小商い
線引いて庇うわたしのテリトリ
痛いほど握ってくれた掌の温み
ライバルを握手でさぐる腹の内
花が手を貸して絵筆を握らせる
ストレスを溜めてはおぼる握り飯
握手したあとで書き足す青写真
主導権妻が握っている平和
握りつぶされ焦っている意見
手を握っただけでレモンの恋終る
まほろばの夢を握った欠け茶碗
果たし状握ったままで干溜る
放浪癖の父に持たせる握り飯
権力を握った胸が反り返る

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

弟に負けてあげよと母の声
負けん気のおんなこっそり闇に泣く
半額に負けても損のない値札
健康という字のブームみなためし
平成のしゅうとめ嫁に負けてます
理屈では勝っても負ける母の味
どしゃぶりの雨にも負けず赤トンボ
まあいいか自分に負けて化粧する
鉄治 秀男 嘉平 三千子 さち子 保州 公子 初子 満洲子 章子 めぐみ 孝子 町子 靖子 百合子 桂香 千秀 朱夏 みね

あの見合決めていたらと米を研ぐ
髪染めて厚化粧してはどなた
兄嫁のごちそういつか母の味
よちよちの兄が押ししてるペピーカー
下駄のつきテカ靴はやり履きなはれ
負けて勝つ妻のいくさに兜ぬぐ
勝ち目なしここはひとまず貝になる
甲子園虎の涙でぬれている
敵に塩おくられ負けたなと思つ
指すもう息子が負けてくれました
生きる糧と思つて負けも勝ちとする
丹精のバラが市場で勝負する
ゲーム遊びよいしいちやんで負け上手
ひたすらに珠をはぐくむアコヤ貝
負けず嫌い孫の青すじ立っている
耐ハイの五杯目からは差ができる
兄が来る夫無口でやきもきす
芋づるのように幸運ついでくる
国民に深い反省頑張つて
流し目にいつも斬られているわたし

川柳ねやがわ

江口

度報

校正の思わぬとこにある手落ち
家計簿の赤字は妻の手落ちかな
地雷抱く青い地球にある手落ち
手落ちなど気にしなさんなでかい空
市役所の手落ちわが家が地図にない
まだ働けるけど定年が来てしまい
長談義区切りつきたいお茶を出し

三千子
かすみ
良知
一風
雅文
文秋
権太

女人禁制区切りが今もあるお山
ひと区切りつけば今度はスキャンダル
ひと区切りつくとタバコに手が届く
りストラで区切りをつけて土に生き
肩書きを降りると見える青い空
ひと区切りついたら夫婦の小さい旅
泣けるだけ泣いて明日から笑い笑顔
取り替える部品が欲しい医者通い
マッサージ身体の故障落き解し
そっぴいばサインを出していた故障
故障した妻を助つ人する絆
火傷せぬ距離で不倫に憧れる
不倫した帰りを犬に吠えられる
ゆつくりと抱くしばらくは逢えぬひと
不倫ではない別姓の夫婦です
不倫してたどるわが家の灯がまぶい
蛇行してみたい日もある父の川
両方の言い分聞いたりやる茶の間
怠け者の蟻を見つけて安堵する
末っ子は大きな声で泣けばよい
代るがわる叱られに行く社長室
男だつて横向いて泣くことがある
何べんも見直す手落ちのないように

川柳東大阪

森下 愛論報

度

無気力なままで休肝日が暮れる
疑いを知らぬ無心の目に負ける
生きてきたままで人間無に還る
音痴でも邪魔にはならぬ母の唄

信治
雅文
たもつ
度

財産があつて邪魔する二度の縁
盤面で長考笑う邪魔な石
何げない会話でヒント盗まれる
街にあるヒント探して歩いてる
ひらめいたヒント男は指鳴らす
悟るにも最初の一を聞きもらし
歳月や誓詞だんだん遠くなる
秋めいて神も氏子も待つ祭り
山が赤くなつて来たねと道祖神
白羽の矢たてて貧乏神が来る
証拠隠滅恐ろしいのは妻の勘
見栄を張る証拠にいつも金がない
タイヤの滑つた型で車種わかる
血迷つた証拠女の駅は冬

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

愛論

傘寿すぎ俺もいよいよ崖つ湖
よその児も優しく叱り諭す母
旅帰ります仏壇に灯を点す
目の位置を下げて人柄丸くなり
線香の煙で本尊目が開かず
大奥で鳴らしてみたい鈴の音
空翔ける夢はまだまだ持っている
赤紙で召された命八十路ゆく
一着になりたくはない老いの坂
家中が笑顔いっぱい孫生まれ
忙しく今日も電話が街をゆく
遍路杖鈴を鳴らして山路ゆく
姑の鈴の音感謝に満ちている

あきら
輝夫
マツエ
いさむ
吟笑
放任
かおり
治延
坊太郎
チカエ
正雪
文仙
くに子

スパーに入ると主婦の顔になる
自慢にはならぬ家系の酒を飲む
酔うほどにチラチラ本首見え隠れ
天高く駆け登つてく白煙

南大阪川柳会

寺井

東雲報

ひかり
はつ恵
よしみ
なみ子

連敗へコロコロ変るアドバイス

公然になったら困るのはあんた

核爆発故意ではないと言われても

孫と指し故意に掛かった王手飛車

こびる花故意がちらちらかくれんば

失敗を故意だと他人見つめてる

豪快な人だが弱味一つある

故意にするいじめを論ず愛の鞭

白旗を上げた男に顔がない

故意に蹴る石が自分に跳ね返る

磯の香を豪快に盛る浜料理

好きだからわざと焦らせてみせる恋

境界を故意に動かしもめている

偶然か故意かはさだめ苦にすまい

突っかい棒故意にはずした秋の風

ライバルが故意にしかけた陥し穴

口の中あめ玉ころころ遊んでる

公然とチップ取る手の早いこと

豪快にだんじり秋を走り抜け

殊更に豪快なバチ警女の三味

故意にした事故を隠して手こずらせ

豪快な蛇踊り哀愁秘めている

子の笑顔見たさに負ける腕相撲

萬的

透太

ダン吉

庸佑

朝子

悟郎

文秋

志華子

重人

千里

章久

寿美

度

頂留子

正博

柳宏子

咲

哲郎

直子

柳伸

東雲

三男

ハル子

無条件降服それから平和の道ひらけ
故意でない平身低頭軽い事故
寝煙草が降参する日を考える
公然と逢えぬ歩幅が狂い出す
降参のしぐさで急場逃げのびる
豪快に大木倒す古い斧
公然と言える道楽してほしい

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

勝美
智久
千梢
シメ子
久峰
日出子
久子

にこやかな友が悲しい目を見せる
悲しいが私も貰う形見分け
毎日が日曜楽しいはずがない
くるくると秋の音する風車
コスモスの存在感に負けている
松茸を買いに行く日は紅を濃く
少年に疲れた顔が多過ぎる
呑んでから言おうか言うてから呑もか
手後れと言わぬが顔に書いてある
医者へ行く道に飲み屋が二軒ある

座禪組む仏に力借りるまで
床柱母の力を知っている
力んではみたが勝負は時の運
蟬殻に生みの力の余韻あり
亡父口を開けば迷惑かけるなど
迷惑な話が大手振ってくる
平和です迷惑な基地無くしましよ
土踏まず迷惑なんか気にしない
やれやれとけしかけている無責任
幕が降りやれやれマスク取るピエロ
厨の灯消して眠りにつく0時
削るのはこれでおしまい歯科の椅子
定年を迎えやれやれ仮面ぬぐ
仔犬の目は私を頼り切っている
悲喜こもごも心を映す水鏡
悲しさの涙の中のユーモラス
悲しみをぐつとこらえた膝小僧
悲しみを忘れ二次会酔うている
神はいたずら悲しみは時に来る
せりに出す牛から離れない子供

高栄
恵子
二南
比ろ志
吉太郎
とし子
波留吉
澄子
柳宏子
稲子
ルイ子
よ志子
克治
静江
大輔
茶の子
泰雄
白溪子
節子
石舟

川柳若葉の会
宮崎シマ子報

武庫坊
重人
杜的
秀夫
恵子
一笛
芳子
紫香
スミ子

川柳藤井寺

高田美代子報

炭火焼きのさんま大きな顔をする
ブランドで出ても主婦です秋刀魚買う
殿様もさんまを知った秋の空
秋の天秋刀魚は目黒から匂う
千円の秋刀魚乗ってる京の膳
暮れなすむ町屋のこども秋刀魚焼く
さんま焼く秋の詩人になりたくて

キミ子
婦美枝
三郎
美代子
恒雄
みよ子
美房

行革に歯止めをかける族議員

0157の歯止め未だにかからない

そんな時朝の笑顔を思い出す

これきりにしよう身に沁む風に逢う

ピサの斜塔が今日も歯止めに飢えている

振りきってしまえば壊れそうな眼よ

ルールからちよつと外してある歯止め

訳言わず死んだ中間管理職

三十億使い巨人はなぜ勝てぬ

学校で教えぬなぜが多過ぎる

結論が出てからなぜが解けてくる

一徹な親爺のなぜが多くなる

何故というニュースが多い世紀末

反省の何故が羊を眠らせぬ

目ざましよなぜ大騒ぎして起こす

なぜなぜと聞く子の答え辞書にない

真夜中に隣の灯ついている

疑問符の一つに蟻の列がある

秋祭り若者達で出す景気

それからの話が弾む喫茶店

堺川柳会

河内 月子報

酒ぐせに懲りた夫に酒供え

どつち向いて行ったかどうせアーマラン

仮縫いのままで放した子の行方

エリートに行方危ない橋がある

呼び水に母さん重い口を切り

行方不明のペンにはドラマを書いて来た

コメンテーター事件を作るふしがある

正一

吸江

扶美代

絹歌

元紀

和子

六点

かつみ

修六

志洋

悦子

アキ

昭子

和樹

桂子

昌子

花梢

鐘造

宗一

敦子

寿美

哲平

寿恵子

妻子

ダン吉

冬虹

アキ

探してはしくて時どき姿くらませる

勝ったから批判はしない雑魚の群

甘んじて受けて反省などしない

口癖になった老母のありがとう

逃げ遅れた芒が呼んでいる枯野

すぐ妥協せぬ一癖のある男

人の口気にする割に太つてる

エリートは魚は浅瀬泳がない

三面鏡昔の自分呼んでみる

世の批判やる気をつけてありがとう

遠い日をニックネームで呼び戻す

鳥渡る国へわたしも旅立とう

七五三の歩幅に限りなき期待

おつちよこちよい灰になるまで直らない

年齢のせいになっている怠けくせ

呼ばれてる気がする真昼白い刻

山は人里は猪呼んで秋

七癖があつて私の彩になり

バックから出すところこが深呼吸

ふるさと松茸めして呼んでいる

悠々と甚兵衛さめの泳ぎぶり

癖なおせと張り子の虎が首を振る

同性はとかく美人に批判的

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

参道で人柄を売るときがらし

笑顔よし効き目の甘いねり辛子

歯車になりきりうまく世渡りす

世渡りが上手チャンス逃さない

扶美代

りつえ

みつこ

昭子

美代子

紀美女

洞庵

勇太

泰子

頂留子

梓

春蘭

満州

かりん

半銭

健吾

楓

菜々

東雲

八千代

金三郎

深雪

重人

登代子

吉太郎

慶子

たくさんの料理はいらぬ老いの膳

鈴なりの柿がワタシを待つ生家

陶工のプライド次々割る素焼

割算が下手でストレス溜めている

落ち葉踏む大役果たし帰る道

風景画確かに声が聞こえます

眠そうにしている壺は外さない

出来栄の良さに比べて暗い顔

愚痴聞いてほしいお酒を提げてる

弱虫になるとピラニア寄ってくる

お若いと言われ帽子を買い替える

理論武装する本代が高くつき

夜中までサッカー日本寝不足に

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

妻の留守米を洗つた水加減

暮参り土産新米もろてくる

米過刺大根飯をなつかしむ

新米とサンマ松茸秋運ぶ

ひとめぼれなど名付けて米の艶

雑兵のごとく雀が寄る刈田

親の骨までかじらせている過保護

お座敷で鮎と一緒に骨ぬかれ

自己嫌悪骨身にしみる不甲斐なさ

父は死んだ骨の髄まで酒がしみ

同居万歳だけど小骨がちと喉に

老骨が君が代うたうにがい喉

歩き疲れたにげんの骨傘の骨

孤児が唄う月の砂漠を泣きながら

武庫坊

きく子

萬的

しげお

正坊

落児

英子

悟郎

メ女

明光

紫香

石舟

柳宏子

日出男

夢之助

正子

節子

年代

義芳

向西

昭三

キク子

光穂

弘治

ヤス子

芳子

昌子

悲しいから泣いているとは限らない
思いきり泣いたあとから虹がたつ
南極の水が溶けて地球泣く
泣くよりも笑う演技に泣く俳優
パイオリンの音が独りの胸へ泣いてくる
告知などしなないと決めた日の嗚咽
縄電車誰もおらんと母が乗る
木々はみな旅の終わるか落葉降る
秋の陽がピルの隙間に落ちて行く
秋空をゴクンと飲めば夢が湧く
レシビから選んだ明日向きの顔
いななきが聞こえる月のよい夜だ
しょんぼりの街にポストの目立つ赤

疑えば心の奥に悪魔すむ
嬰兒室のぞく茶髪も父の顔
約束をふわりと躲す羽根枕

倉吉川柳会

谷口

次男報

これも愛夫婦ゲンカの訳聞かぬ
いろいろと訳の言えない事がある
温暖化日米汚染訳を聞き
訳ありと思う二人の背をみつめ
言い訳をすれば空気がこわれそう
言い訳はもつともらしい風邪にする
袖の下貰った訳は知っている
訳のある遅刻笑いでごまかされ
夫から聞く言い訳は嘘でよい
訳聞いて双肌脱いで味方する
私馬鹿よね訳も聞かずにいつて出た

秋草 ちよ子 小生 幸子 仙康子 天雀 かつみ 智子 明美 秀峰 喜美子

すみ 富美子 伊三郎 久子 ハツエ 歌子 一笛 比ろ志 千恵 武庫坊 澄子 紫香 吉太郎 愛 薰

約束を破った訳がすぐばれる
月が出て君がさみしい訳なんだ
知恵熱の出るほど訳を聞くわが児
嫁さんが逃げた訳など言えまつか
訳知りの顔でデタラメ言う男
もう少し生きねばならぬ訳がある
情報私の前でUターン
私のこころの中に住む頑固
遠くから私を見てる人がいる
三畳の部屋がわたしの大宇宙
雑学に挑む私の恥つき

横濱あおば川柳会

菱田

満秋報

睦子 螢 雄々 和歌子 次男 御前 御紀美子 岫きみ子 一夫 よしえ 和枝

大胆な手紙書かせる夜明け前
持ち回る旅の土産が邪魔になる
巣立たせた子から元気な夢便り
ホッペタを爪つて夢に逃げられる
音のない夜はノートに句を綴る
秋夜長 人間は詩人になっていく
秘密すこし持つて夫婦がうまくいき
揺り籠の微笑みどんな夢を見る
落ちこぼれ夢は等身大でよい
忘れない夢もあり今朝髪を切る
フランスへ夢を叶える強い蹴り
青い夢まで抱いている縄のれん
夢があり達磨片眼にさせたまま

川柳塔おおとり

上田

俊路報

タツチの差持っていかれた値引品
屋根裏に私の過去をしまつとく
大屋根の下でくじける自立心
あの世でも貴方と同じ屋根の下
三度目の転居瓦の一戸建
過疎の村民話と生きる藁の屋根
言い訳が決らぬうちに屋根が見え
正直な汗が小さな屋根に棲む
夢で逢う彼若いから化粧する
編み棒の先胎内へ夢きかせ
せせらぎと語り明かした旅の夜
病床に羊数える夜が続く
安らかな軒が憎い眠れぬ夜
孫ひとり泊った夜は早く明け
陽だまりへ話持ち寄るお年玉
一つずつ夢崩れては年をとる

ふみ 亜希子 絹子 省子 徳三 道子 のぶ子 充子 トヨ子 羊子 ちよ路 早智 達也 純子 笑子 雅子

苦しいが男にみせぬ台所
晩めしがいらぬと楽な台所
厨房に入って男丸くなる
台所薬も酒も置いている
ガスレンジ胸にもこんな火が欲しい
朱肉にも言い分がある借用書
めでたさを朱のさかずきが倍にする
残り火を燃やす命に朱を添える
何を求めてただひたすらに辞書を繰る
妙薬を求めて歩く老い之道
身勝手に神に求める絵馬の山
赤ちゃんの母を求める奇麗な目
六十歳求人欄に締め出され
幸福を求める朝の靴を履く

孝子 ひかり 幸次郎 艶子 芳子 宏章 由多香 風花 千秋 清子 崇 道子 和子 雄々

求めたが根っ子が弱く伸びて来ぬ
定年で求めた自由持て余す

アメリカが求める日本線を引き
ご協力求める愛の募金箱

幸せを求め生き恥陽に晒す
今一度世に出る色に塗ってみる

塗り替えた戦後ゆつくり振り返る
来年の夢に青色塗ってみる

二代目が古い格式塗りかえる
最善を尽して不安塗りつぶす

塗りたてた心は何時かはけていく
蜂蜜を塗った罫だと気がつかず

いい出会いもらい余生を塗りかえる
みさを

富柳会

池

森子報

だからだからと女に句読点がない
言い訳もだからも嫌い亡父の靴
冷蔵庫満たしておこう秋だから
鍵持たず歩いていこういわし雲
秋だから答えを出した皮下脂肪
安らぎの陽のさす庭に影という
美人薄命死なない菜のんでいる
真っ直ぐに登る煙に嘘はない
掃き寄せた落ち葉が庭を出たがらぬ
大法螺の煙に巻かれ大笑い
花摘んで欲と怒りを捨てている
座ってるだけで倅せそうなふたり
温暖化やがて溺れる島に住み
妻も逝き子も皆育ちノホンホン

野草 野路 俊路 小生 舍人 黙光 伝住 登美 せつ子 友子 愛恵 銀嶺 半畳 昭子 アキ 登子 勝子 二三子 文子 扶美代 紅紫朗 絹歌 (伊)勇 昭水 冬虹 智久 勇

疑問符を少年壁にぶつつける
逆風の中でしななってきた命
頂上でやつとはずせた鬼の面
好きだから愛の深さを見てしまふ

ローズ川柳会

山崎 君子報

休耕田隣の稲穂眩しかり
駅前誘惑に負けます赤ちようちん
この足でよくも此処まで来れたもの
実っても実らなくても母の愛
菊人形終って駅の菊薫る
風雪に耐えて大きな実りあり
難間に手を出しかねてみかんむく
御堂筋実り小さく銀杏散る
効能書のいずれにも合いうら淋し
古くなっても師走八日に疑問持つ
信州りんご孫のバイトで送られる
人生の縮図を乗せて発車ベル
体じゅう実りを感じ芋を掘る
別れてもつい出迎えの足駅に
石仏の丸い背なにもある紅葉
集札箱もみじも入る山の駅
此の秋の実りを仏に先ず供え

翠洋会(奈良吟行)

柴田英壬子報

偽装倒産昨日納品した会社
やっぱりとまさかが混じる二人仲
ひとときを昔にひたる資料館
秋深し祈りにみちて元興寺

花梢 欣之 鐘造 森子 哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 武庫坊 年代 雅子 はつ絵 民平 君子 義子 笑女 石舟 正雄 蛙 絹子

落葉まで別な顔する屋敷町
この町で生まれて死ぬる赤とんぼ
オリエントチャイを頼めばイランの娘
吊されて身代り猿の哀しそう
古都奈良を画布一杯に秋の彩
伝統の文化に触れる古都の旅
賞金までついてまさかの感謝状
内緒ごときまか筒抜けとは知らず
吉本はまさかのギャグで総くずれ
証券屋身がわり猿が欲しかりう
ジャンジャン町昔のぼくが歩いている
まさかとは思いつつ買う宝くじ
きなくさい世界をよそに奈良しずか
こみちから秋がこぼれる小塔院
立ち止まるところ絵になる奈良の町
矢印の通りに歩くならの町
有頂天ガラスの靴がはきました
異文化もしつくり古都の今昔
ならまちしぐれ資料館から二人づれ
三猿が屋根の上から見下ろして
昔むかしの大看板の絵がたのし
イベントでさわいだけの町おこし
小春日に奈良を賑わす昔ギヤル
奈良町の格子を覗くよその人

周信 希久子 東雲 恭昌 志華子 久峰 喜美子 千枝子 蕉子 靖巳 佳秋 真砂 叡子 ひろ子 義司 千梢 澄子 千歩 会美 さと美 正坊 みつ子 鬼遊

NHK川柳作品募集

題「声」森中恵美子選・ハガキに3句・1月
10日締切・〒540-0101NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係宛・1月24日放送(予定)

秀句鑑賞

—12月号から

高田博泉

暇の出た案山子と遊んでいる雀

菅田 かつ子

鬼のように恐かった案山子。お役ご免になつた今は、追いかけられることもなく、安心して遊んでいられる相手となりました。「暇の出た」に表現の巧さを感じます。実社会での引退した上司と部下との間にも、こんな表現が当てはまるかも知れません。

虫の音を聴いて程好い父の酒

角野 仁清

お父さんの若かりし頃は、お酒も強かつたことだろうと想像します。説教をするでなく愚痴をこぼすでなく、虫の音を鑑賞しながら静かにお酒を味わえる齢になりました。息子さんも、たまには相手をしてやって下さい。

やんわりと母の涙が効いてくる

三浦 強 一

母は強し、涙にうそはありません。

鈍行は人間くささのせて行き

三好 專平

地の言葉丸出しの会話が、停まる駅ごとに飛び込んできます。着飾ることもなく男も女も気さくに語り合える人間くささが、こんなところにあるのでしょうか。半分判つて、半分は判りそうもない国訛りにも、一生懸命耳を傾けている筆者ではないでしょうか。

マスクミが溜まつたうみをしほり出す

井尻 民子

最近ではマスクミもずいぶん叩かれるようになりましたが、逆にマスクミが頑張つてくれるお陰で、世の中、反省もし、改善もされていくのでしょうか。「うみをしほり出す」とはまことに巧い表現だと思えます。

人情の薄さを知つた下り坂

大橋 鐘造

現役の頃は、人の出入りも多く、自分を立ててくれる人も多かったことでしょう。顔を合わす機会が少なくなると世の中こんなものです。いつまでも男でありたいものです。

太陽を一對一で見る日の出

木村 親路

日の出と自分との視線を、「一對一」と見たのでしょうか。スケールの大きい作品であり、目のつけどころに感心しております。

かたつむり何が起きてもマイペース

伊藤 藤ふみ

急がず、慌てず人生は作品のようにあります。。「かたつむり」を他の言葉に置き替えてもりっぱに通じますが、非常にリズムもよろしく、「かたつむり」だからこの句は生きています。

幸運がちらりのぞいて行き過ぎる

村上 剛治

世の中、幸運から見放されたと思つている人の多いこと。それでもスリルだけは味わえました。一番遠いの宝クジだったりして、妻の怒りたつぷり入ったトウガラシ

あなたは考え過ぎです。愛情のこもった料理を有難くいただいで下さい!

早川 盛夫

名月や腕を組みたい人といふ

矢倉 五月

美しい花のとげまで好きになり

清原 悦子

新米の味見雀が先にする

近藤 秋星

目をかける弟子が倍ほど叱られる

石川 勝

海水に囲まれ島に水がない

渡邊 伊津志

本社十二月句会

十二月八日(月)午後五時半

メンズフアツションセンター

本年度最終の本社句会は十二月としては、なま暖かいほどの八日夕、八十六名の参加を以って定刻開催された。

次回からは会場をアウイーナ大阪に移して開かれることが最初に告げられる。

お話は般若心経の暗誦に熱中しているという板尾岳人氏、12月に困んだ話題を探していたところ自分の誕生日12月12日と同じ生まれとされる石川五右衛門に思い至る。

現在も盗人除けのまじないとして、12月12日と書いた短冊を逆さに戸口に貼る習慣がある程、盗賊の代表として五右衛門は知られている。実在の人物であったかどうか定かでないがモデルとされる人物はいたらしく、出生地も諸説あり、富田林の石川が有力と言う。

初出席に堺市の高木信醇氏を迎える。

月間賞は松原市の玉置重人氏に輝く。

(司会―天笑) (記名―金太・ダン吉)

(受付―洋・いわゑ)

席題「続く」 海老池 洋選

欠礼のはがきが続く十二月

まだ続く悪夢仮設に冬が来る

核ゼロに続く道なら厭われない

続げま小銭を拾う年の暮れ

不景気のごとまで続くぬかるみぞ

空気のような夫婦の旅がまだ続く

誰かを呼びつづける命ある限り

針のない時計とあてのない旅で

雨続きつい感傷にひたる窓

女房が行くから僕も続きます

ラッキーが続いて少し恐くなる

緊張もやる気も無いが情性です

人の列続きその先判らない

どん底に迷い悲しき夜が続く

あしたへ続くドラマ主役は私です

挑戦が続く何度目のダイエツト

続編も妻と二人で書くだろう

遺産分けまだ続いている睨み合い

続く子を信じています花手桶

幸せはこの一本の続く道

稜線へ続く歩幅をととのえる

良いとこで続くの文字が邪魔をする

続かせてくれた未練よありがと

無言劇浮気の余震まだ続く

続柄が肉親の端で構えてる

妻逝つてわが家の冬がまだ続く

炎の中を歩き続けた日記帳

伐採が続く枕が濡れている
下手な洒落続けて男軽くなる
いいことは続かず風の中にいる
金欠が続くと言葉荒れている
続く二の矢はどう外すかを考える

佳

自分史が下巻に続く喜寿傘寿
続編の辺りで消えたプーメラン
雨だれが続いて猫が欠伸する
さざ波は饒舌 おしやべりが続く
氷点下が続く落葉樹の下で

幸せが続く触角萎えてくる
新世紀へ続くみどりよ青空よ
振り向けば遙かに妻と影法師
いい事の何時まで続く落ち椿

兼題「ゆるやか」 榎山隆盛選

ゆるやかな時が流れる能舞台
ゆるやかな着付 懐ふかくなり
ゆるやかにのど元過ぎる一分粥
ゆるやかな時間をみみず食べつくす
山はむらさき 二人の日々よゆるやかに
ゆるやかに解け合うワイン真ん中に
女性像バスの線はゆるやかに
ゆるやかな一歩見守る温い顔

兼題「ゆるやか」 榎山隆盛選

ゆるやかな時が流れる能舞台
ゆるやかな着付 懐ふかくなり
ゆるやかにのど元過ぎる一分粥
ゆるやかな時間をみみず食べつくす
山はむらさき 二人の日々よゆるやかに
ゆるやかに解け合うワイン真ん中に
女性像バスの線はゆるやかに
ゆるやかな一歩見守る温い顔

ゆるやかな時が流れる能舞台
ゆるやかな着付 懐ふかくなり
ゆるやかにのど元過ぎる一分粥
ゆるやかな時間をみみず食べつくす
山はむらさき 二人の日々よゆるやかに
ゆるやかに解け合うワイン真ん中に
女性像バスの線はゆるやかに
ゆるやかな一歩見守る温い顔

ゆるやかな時が流れる能舞台
ゆるやかな着付 懐ふかくなり
ゆるやかにのど元過ぎる一分粥
ゆるやかな時間をみみず食べつくす
山はむらさき 二人の日々よゆるやかに
ゆるやかに解け合うワイン真ん中に
女性像バスの線はゆるやかに
ゆるやかな一歩見守る温い顔

桂香
萬的
いわゑ
冬葉
一風

正雄
美代子
美代子
半蔵門

森子
富湖
みつ子
たもつ

地
關病を妻の活気に支えられ

天
赤ちゃんの活気みんなできとり囲む

夜が明けるさあ活気待つ街の彩

兼題「失礼」 松原寿子選

失礼のないよう三度歯を磨く

お尻をポンと叩いてしまつた人違い

すぐ齡をきくからあの人は嫌い

オツと失礼あまりにもよく似てたので

失礼ね別れ話をパソコンで

失礼な鏡正直すぎないか

ビール飲みホラを吹いてる赤のれん

失礼と謝まる声が小さ過ぎ

失礼な話 おいらがおとこまえ

失礼で済まぬ政治の無責任

失礼なティッシュ配りが横を向く

失礼はそちら様からかけた罵

失礼を山ほど溜めて生き延びる

失礼な山ほど溜めて生き延びる

寿美

いわゑ

一風

正子

満津子

月子

みつ子

千里

希久子

利武

いつふみ

山久

いつふみ

富湖

冬葉

鹿太

倫子

三男

うちの猫僕をまたいでいっちゃつた
みんな留守トイレのドアは開いたまま
志望校聞いて奥様通りすぎ
ブラジャーのサイズを聞いてどうするの
うるさ型へ何故か礼状ついてない
だと言つて遠慮してれば負けになる
万障を繰り合わせとは失礼な
富士を撃つ失礼でなく何だろう
失礼な風も許した森の番
失礼な人間ブランドたんといふ
オイと呼び他人のそら似すみません
失礼ながら衿にラベルが付いてます

雑
代
寿美子
かすみ
洋
あやめ
保州
ダン吉
森子
勇太
洞庵
澄子

鈍感な男が横に来て座る
失礼にならぬ程度の義理を欠く
失礼をグジャレに変える知恵がある
失礼の効果少女は立直る
ラッピング期待もたせてイミテーション
失礼をジツと見ているのは鏡
地
バスポート写真じろじろ見比べる
天
天狗の鼻は失礼をかえりみず
軸
失礼な言葉ゆるせる人と居る

兼題「ジンクス」 河内月子選

ジンクスに負けぬ二本の足である

ジンクスか玄関うしろ向きに出る
ジンクスのつもり仁王とにらめっこ
ジンクスを信じぬ父の太い指
手応えが無くしてジンクス確かめる
ジンクスを言うてチャンスを取り逃がす
ジンクスを信じて歩く回り道
朝は晴れ昼から降らず雨男
ジンクスの風ななめから後から
ジンクスを信じ巻すしかぶつてる
火事の夢早速くじを買いました
ジンクスが凍てつく心消しにくる
呪文となえてジンクスを遠ざける
ジンクスをよそに尊い汗を積む
喪のあけるまでは鳥居をくぐらない
ジンクスを信じて塩が盛つてあり
憑いている時はジンクスなど知らぬ
ジンクスが思考回路を出たがらぬ
ジンクスがあなた次第と言っている
ジンクスの神も努力に匙かげん
ジンクスにこだわれば替えてみる
ジンクスは持たずにまん中を歩く
カツライス食べて馬券を買いにゆく
ジンクスを軽く見すぎていた誤算
ジンクスを担いで肩が凝つてます
ジンクスがつかつかい棒になることも
ジンクスを神さまよりも信じます
ジンクスの生きてる道はさげている
ジンクスを気にして耳をそば立てる
ジンクスの一つを敵に見せておく

紫香
たもつ
美代子
文秋
紫香
武庫坊
希久子
稚代
東雲
寿美
美代子
雅文
度
かすみ
金太
信子
一歩
いわゑ
ダン吉
頂留子
正坊
金太
茜
弘一
狸村
扶美代
大輪

紫香

たもつ

美代子

文秋

紫香

武庫坊

希久子

稚代

東雲

寿美

美代子

雅文

茶柱にこだわりの今日は穴馬券

ジンクスを逆手に取っている強気

改名をしてジンクスに負けている

ジンクスに数珠をいつでも離さない

こころ一番の日右足から門を出る

佳

笑うから恋のジンクス黙っとく

ジンクスは無視あつげらんとききる

仏滅を蹴ってゆつくり披露宴

立ち呑みにもジンクスがある僕の席

遺言を書く人と長生きできそつた

人

ジンクスを口実にして無精髭

地

ジンクスの髭を剃る人伸ばす人

天

ジンクスにつけてもらっている自信

軸

柚子風呂に入るといつも風邪をひく

兼題「豆腐」 橘高薫風選

湯豆腐と一声かけてから座り

湯豆腐の湯気の向こうにある故郷

湯豆腐に昼間の鬱を癒やされる

茜空ふつとラッパが聞こえそつ

早立ちへ豆腐が浮いたお味噌汁

豆腐屋のとうふは浮いていた昔

さあ飲むぞまず湯豆腐を血祭りに

おつかいの豆腐と玉子無事帰る

柳弘

寿美

雅文

典子

澄子

美房

みつ子

森子

萬的

桂香

保州

かすみ

頂留子

月子

ダン吉

正子

剛治

達子

紫香

冬葉

金太

茜

湯どうふにしとけば機嫌よい入れ歯

ぐちゃぐちゃの麻婆豆腐にちりれんげ

人は好きずき崩された冷やつこ

お豆腐に合掌をして老いすすむ

嵯峨めぐり湯豆腐目当ての妻の案

湯豆腐もゆばも優しい京訛り

大阪に出て豆腐屋の六代目

豆腐屋が豆の鼻を見て回る

猫舌で冷えた豆腐に熱い酒

豆腐には目のない人でお人好し

赴任先豆腐切る手もさまになる

湯豆腐のこだわり木綿と言う親父

スーパ一の豆腐とわかる父の舌

冷奴つぶし話が長くなる

聞き役に徹して豆腐愛される

湯豆腐に一本がありこの至福

来年の話をつつく豆腐鍋

おはなしが弾むと豆腐踊りだす

話弾んで湯豆腐に松がはいり

湯豆腐と一合男他愛なし

抜歯した鬼と豆腐を食べに行く

アリバイにするごま豆腐二つ買う

豆腐をつついた二人元の鞘

悟り得て豆腐静かに水に居る

佳

さつぱりとした友情の冷奴

スーパ一の豆腐に慣れた皮下脂肪

妊娠してから豆腐好きになる

豆腐屋をねぎらう朝の新聞屋

重人

隆盛

文秋

あやめ

千里

友熙

久峰

みつ子

月子

正坊

恭昌

柳弘

満州

洞庵

富湖

絹子

金太

一步

天笑

希久子

鹿太

月子

たもつ

雅文

雅文

石舟

雅文

ルイ子

京で食うたかが豆腐と言うなかれ

湯豆腐の食へ頃も知る苦勞人

湯豆腐へ互いの酒量みとめあう

湯豆腐へ互いの酒量みとめあう

湯豆腐へ互いの酒量みとめあう

湯どうふにだんだん欲が溶けてくる

豆腐には目のない祖父に育てられ

大輪

いつふみ

いわゑ

重人

柳界展望



★直原玉青画伯を囲む謝恩の普茶会が十一月二十四日

(祝) 京都宇治、黄檗山塔

頭瑞光院で開かれた。中島

生々庵元主幹、西尾葉前主

幹の冥福も祈られた。本社

から橘高薫風主幹が参加し

て焼香、宴の乾杯の音頭を

とり、画伯のご健勝を祈念

された。

秋の冥善縁の人等禅苑に

玉青

陶潜は九十五翁の自画像

か 薫風

★第9回兵庫のまつり—ふ

れあいの祭典の表彰式が11

月9日、尼崎市立労働福祉

会館で行われ、本社同人の

受賞者は次のとおり。

〈兵庫県議会議長賞〉

眼を閉じる逢いたい人に逢うために 矢内寿恵子 喪が明けて正面の座が空いている 岸 桂子

なお、奥山美智子・川上

大輪・門谷たず子・川上富

湖の4氏が佳作に選ばれた。

★出雲総合芸術文化祭川柳

大会は11月9日、出雲市民

会館で開催され、本社同人

の松本文子さんが出雲市長

賞を受賞した。

★第18回川柳塔鹿野みか月

川柳大会は11月16日、鹿野

町「山紫苑」で開かれた。

今年から第一部は、各題天

位句を選者の共選により賞

を決めることとなり、本社

同人の受賞は次のとおり。

〈鹿野町議会議長杯〉

どの傘も骨が少うしずつ

曲がる 西川 和子

〈鹿野町教育長杯〉

あき箱を積むだけ母が老

いていく 白根 ふみ

〈新日本海新聞社橋〉

苦も楽も溶かして母の海は風ぐ 最上 和枝

なお、第二部の各題天位

句は次のとおり。

雪月花わずかに違う酒の

味 林 荒介

転作の田にそばの花白く

咲く 石尾かつ乃

胸借りた人振り落とすぶ

うらんこ 政岡日枝子

★第39回和歌山市文芸まつ

りの表彰式が11月16日、市

庁舎大集会室で開かれ、本

社関係の受賞は次のとおり。

〈商工会議所会頭賞〉

言い訳は止そう男が軽く

なる 青枝 鉄治

〈和歌山新報賞〉

重箱の隅を綺麗にしてお

こう 福重 美子

〈読売新聞社賞〉

注意書き情けの薄い字が

並ぶ 川上 富湖

なお、文化協会賞は榎原

公子、中後清史、森口美羽、

水田秀男、澤田和重、谷口

新同人紹介

川久保 睦子

—薫風・白峰・典子・公一推薦

富坂 志重

—薫風・吟平・女推薦

石上 悦子

—完司・帆雀推薦

塔 寛子

—完司・多可由推薦

村上 剛治

—鬼遊・シマ子推薦

村上 ミツ子

—鬼遊・シマ子推薦

義男、吉村さち子の各氏。

★第37回和歌山城観月川柳

たず子の両氏が秀作に選ばれた。

には、森口美羽さんが市観

★うめだ番傘50年・田頭良

光協会会長賞を、堀端三男、

子句集発刊川柳大会は11月

田中みね、三宅保州、青枝

24日、三井アーバンホテル

鉄治の各氏が奨励賞を受賞。

大阪ベイトワローで開かれ、

★第20回阪神文芸祭の入選

本社同人の藤田頂留子さん

者が決定、11月21日、西宮

が最終句(秀句)に輝いた。

神社会館で表彰式が行われ

オアシスはここと田舎を

本社同人の受賞者は次のと

出ない母 藤田頂留子

おり。

〈兵庫県文化協会賞〉

★第30回鳥根県芸術文化祭

弁解のたびに男が軽くな

文芸公募作品入選作の表彰

る 青枝 鉄治

式が11月30日、松江市「い

〈西宮市長賞〉

きいきブラザ島根」で開催

乗り継いで乗り継いで行

本社同人の二氏が受賞。

く終の駅 山田 高夫

パソコンの中で子供の樹

なお、川島颯云児・門谷

が伸びる 竹治ちかし

常任理事会各部部长決まる

10月の総会で承認された役員人事に伴い、各部長の一部変更があり、次のように決まった。

総務―板尾岳人・編集―奥田みつ子・同人―西出楓
楽・句会―河内月子・渉外―吉岡美房・会計―岩佐
ダン吉・発送―高須賀金太・企画事業―前たもつ

〈銅賞〉

炎天下稼ぐ男のヘルメツ

ト 小白金房子

▽川柳塔碑合記法要△

高野山大霊園内の川柳塔

碑への本年度物故者合記法

要は11月14日午後一時から

しめやかに行われた。

今回の新合記者は、中川

滋雀・金山夕子・川崎秋女

久家代仕男・中西兼治郎・

丸山よし津・大福留吉・太

田藍子・中田純次・山下美

津留・野村静雄・大野武太

坂本仙吉郎・稲葉真郎・寺



篠原いつふみ

―鬼遊・一風・隆盛推薦

神原まさと

―鬼遊・一風推薦

澤みど里・小出智子・時末 10年4月30日。〒6551-

一灯の17氏で、7家族8名 0054神戸市中央区野崎

の遺族が法要に参列された。通2-1-15伊佐次無成方

曇り空からパラパラと小紋太句碑再建委員会宛。

雨が降ることもあったが傘

▼訂正▲

を差すほどでもなく、橋高

■12月号P97下段・佳句

薫風主幹はじめ、遠く弘前

地十選最終句「カタカナの

汜濫係の知恵借りる(脚しげ

お) ↓「カタカナの汜濫係

が物故者の冥福を祈った。

の知恵借りる(欄しげお)

★ふあうすと川柳社紋太句

P93下段・十一月句会兼題

碑再建委員会では、阪神淡

路大震災で倒壊した椋元紋

太句碑修復のため、募金を

呼びかけている。一口二〇

湖↓シマ子

▼計報▲

〇〇円(郵便小為替・何口

■小川恒明氏(元同人・大

阪市)11月2日、病気のた

でも可)。受付締切は平成

あけましておめでとうございます

川 柳 塔 社

					常 任 理 事	副 理 事 長	副 主 幹	理 事 長	主 幹
西	高	河	神	奥	岩	板	宮	河	橘
口	須	内	夏	田	佐	尾	口	内	高
い	賀	月	磯	み	ダ	岳	笛	天	薰
わ	金	子	典	つ	ン	人	生	笑	風
ゑ	太		子	子	吉				
	吉	山	宮	宮	前	西			
	岡	本	西	崎		出			
	美	希	弥	シ	た	楓			
	房	久	生	マ	も	楽			
		子		子	つ				

川柳塔社常任理事会

大阪川柳の会

とき 2月3日(火)午後5時開場
ところ サンケイビル本館322号室
題と選者 バソコン―井村俊二▽育つ―

関口きよえ▽時間―山本希久子
比べる―磯野いさむ(各題二句)
会費 500円 締切 午後6時

第二回『鶴杉川柳大賞』秀句

鶴杉大賞

マニユアルの通り育てた子の弱さ

箕面市 出口セツ子

優秀賞

笑わない街に氾濫する漫画

尼崎市 西川 狐堂

生命産む母になりての未来

福島市 安田和楽志

大阪文化祭川柳大会秀句

平成九年十一月二十九日

大阪市中央公会堂

炎くぐった磁器もあなたも美しい

小林すみえ

介護保険の明日を見つめている夫婦

片岡 湖風

コンパクト女に逃げる場所がある

高橋 古啓

二〇〇八年その気になっっているお城

上田 仁

生涯を外野で終えた父の靴

田中 正坊

海賊の話はどこかユーモラス

板東 倫子

みんな他人で雨の駅から雨の駅

柿木 英一

秋風が夫婦茶碗の中にある

川島諷云児

あけましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

黒久木菊亀川門小小奥奥上浅秋正黒
田保村池岡見谷倉熊山田田野元本川
能まさ貴ト哲絹た江美み佳房て水紫
子お子エ子子子藍美子子秋子る客香

吉山山牧藤春春林長西西長富住小
田本崎渚村城城川田口浜山谷池
笑義君富メ武年は春柳い澄ル石し
女子子喜喜女庫庫坊代絵蘭子ゑ子子舟お

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小島蘭幸方

あけましておめでとうございます

会 監 会

計 査 長

山	古	古	岩	藤	古	石	岡	森	岩	時	小
内	田	田	本	解	谷	原	本	井	本	広	島
ほ	房	比	太	文	静	節	淑	清	菁	笑	一
か	子	呂	虚	晴	風	夫	子	水	居	子	路
同	子	子									幸

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

	同 人	野 村	顧 問	主 幹										
桑原道夫	北山好笑	川上富湖	川上大輪	柿花紀美女	尾田綾子	小倉アサ	内芝登志代	岩倉天彦	塩田	澤田	坂部	坂口	小山	
富山光代	天満三千代	寺田裕美	千原淳太郎	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	塩田佐代子	澤田和重	坂部紀久子	坂口公子	小山太一	
横垣忠翁	森三枝子	宮園射月芳	宮口克子	松原寿子	堀端三男	細川稚代	福本英子	福田和子	中村君枝	中島正博	中田誠子	中後清史	中井栄美子	

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良方
TEL 0734-46-2855

謹賀新年

大阪川柳人クラブ

会長 磯野 いさむ
幹事長 西田 柳宏子

金 棍 片 海 乙 岡 大 尾 小 榎 植 上 上 上 稲 板 磯 井 安 芦 秋 阿
井 川 岡 堀 倉 崎 坂 谷 野 本 松 田 田 原 葉 尾 野 村 藤 田 山 萬
文 雄 湖 醉 武 麻 形 清 楠 信 美 柳 冬 岳 い さ む 俊 寿 静 晃 萬
秋 次 郎 風 月 史 子 水 風 眩 治 子 影 仁 逸 葉 人 二 美 江 朗 的
秋 (五十音順)

惣 関 柴 塩 清 坂 阪 里 佐 佐 後 小 小 小 桑 黒 橘 吉 北 河 河 川 金
川 口 田 谷 水 本 上 藤 伯 藤 西 西 池 田 川 高 川 内 内 島 内
笑 き 蘭 幸 斗 晴 秀 小 誠 英 正 安 幹 し げ 砂 紫 薫 寿 勝 天 月 諷 寿
路 え 女 子 升 美 子 路 一 夫 一 夫 齊 お 輝 守 香 風 美 美 笑 子 児 子

藤 藤 藤 深 比 濱 早 波 西 西 西 中 中 友 都 塚 津 竹 高 高 田 田 田
村 本 岡 日 嘉 田 野 部 出 田 川 野 尾 田 倉 本 田 森 田 田 中 中 頭
亜 ゆ 花 白 は 良 白 楓 柳 景 恵 飛 茶 謙 清 一 雀 美 博 新 正 良
成 き 梢 光 る 知 賢 洋 楽 子 子 空 鳥 の 子 三 子 江 舍 代 泉 一 坊 子

和 米 吉 吉 吉 山 山 山 藪 楊 森 森 森 村 宮 三 松 牧 前 前 堀 古 藤
田 澤 田 川 岡 本 本 本 内 井 中 下 山 前 好 本 本 浦 田 江 川 村
維 俊 大 晋 美 翠 三 久 千 二 恵 愛 イ 勇 秀 聖 章 完 咲 た と 義
久 夫 輔 吾 房 公 郎 美 子 代 子 南 美 子 論 ク 太 郎 水 子 次 二 も し を 清 女

謹賀新年

NHK川柳教室

前	鴨	三	古	海	井	指	伊	黒	藤	北	橘
	谷	品	川	老	上	宿	藤	田	井	畠	高
た	溜	征	喜	池	直	千	武	能	正	金	薫
も	美	子	美	洋	次	枝		子	雄	治	風
つ	子		子			子					
植	前	村	井	緒	井	野	小	福	志	田	黒
田	出	上	上	方	上	下	林	岡	田	中	台
初	豊	治	信	美	俊	之	周	雅	千	節	伊
枝	子	子	子	津	二	男	信	楓	代	子	佐
				子							武

謹賀新年 堺川柳会

みんな揃ってことしも元気に川柳しましょう
第16回夜市川柳大会は8月2日(日)です

代表

河内 天笑

〒593-8305 堺市堀上緑町二丁十六ー三
電話(〇七三二)七八ー四七〇六

以倉 菜々	高田美代子	福田 満州
一本 勇太	竹田みずき	藤井一二三
太田扶美代	寺井 東雲	藤田 泰子
柿花紀美女	徳山みつこ	藤田頂留子
梶本 哲平	内藤 摩耶	藤林てるよ
河内 月子	中井 アキ	宮本かりん
神原 文	中川 楓	楊井 二南
吉川 寿美	中崎 深雪	八十田洞庵
楠 昭子	中野 健吾	矢野 梓
源田八千代	西田柳宏子	山本 半銭
小西 小雪	西村りつえ	横井金三郎
志田 千代	長谷川春蘭	吉本 菁風
高田 星子	樋口 冬虹	

南大阪川柳会

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

高槻川柳サークル卯の花 一同

本年もよろしくご支援のほど願ひ上げます

川柳若葉の会

吉	山	宮	宮	宮	古	中	辻	椎	黒	橘
田	内	崎	崎	本	川	島	川	江	田	高
あ	香	シ	弘	欣	喜	田	慶	清	能	薫
ず	住	マ	直	史	美	実	子	芳	子	風
き		子		子	子	子				

新年おめでとうございます

あけましておめでとうございます

川柳ささやま社一同

代表 遠山可住

あけまして
おめでとうございます

川柳クラブ

わたの花

村上ミツ子	村上剛治	大内朝子	高橋明子	内田龍	吉村一風	生島ますみ	粂山隆盛	二瓶道子	田中トシエ	松葉君江	平川幸枝	服部春子	川崎友甫	高杉鬼遊
坂本奈良司	岸本寿代	川口信子	與田明	砂田八寿子	井尻民子	篠原いつみ	花柳吉吾進	乾美代子	八倉知佐子	奥田けいこ	山本宏	西村幸子	中島春江	神原まさと

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

ほか会員一同	前田昭	松本ただし	藤原桂子	古川喜美子	中山キヨ子	富永敞	田辺正三郎	玉置英史	滝北博	田中螢	酒井瀧	嵯峨根保	栗田久	黒崎恭	北村正	奥村しずえ	岡本吉太郎	江口明光	上田佳秋	板山まみ子	池田善福	一月瀬	湯原方	井上馬	橘高直
--------	-----	-------	------	-------	-------	-----	-------	------	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-------	-------	------	------	-------	------	-----	-----	-----	-----

定例会・毎月第2火曜日午後・豊中市螢池公民館

謹んで新年の

お慶びを申しあげます

とっとり川柳会

宮木 一夫	前田 一枝	橋本 多哥由	春木 圭一郎	武田 粗粒	武田 帆雀	坂田 和歌子	石上 悦子	岩原 喬水	岩田 輪多朗
----------	----------	-----------	-----------	----------	----------	-----------	----------	----------	-----------

あけましておめでとうございます

西宮ローズ川柳会

謹賀新年

平成十年 元旦

岸和田川柳会

高須賀金太	井伊吉三	原苑子	堂免路子	長谷川呂万	井齋一齋	林春恵	田中文時	島崎富志子	岩佐ダン吉	原さよ子
芳地狸村	藪野ケイ子	古妻敏光	加藤基	善野盛之	内田一弥	村垣鹿太郎	寺田甚一	古野ひで		

新年おめでとうございます

東大阪市川柳同好会

会 長 片岡湖風 副会長 吉川晋吾
句会部 澤村猪太郎 会 計 森下愛論

あけましておめでとうございます

サークル 檸 檬

あけましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会 員 一 同

謹賀新年

うみなり川柳会

会員一同

鳥取市相生町3丁目204
電話 (0857) 23-4672

新年おめでとうございます

庄司利治	河原恵美子	小田川智重子	森山英子	鶴原文子	北川民子	藤原鈴江	松本はるみ	谷岡芳枝	石田清泉	小砂白汀
	松浦洞然	石田一字	渡部菜々	渡部ふじ子	武島ちよえ	渡部好栄	菅田かつ子	松本聖子	福岡博利	細木歳栄

島根県大原郡木次町四六一

わかあゆ川柳会

あけまして

おめでとうございます

はびきの市民川柳会

塩満	清水	酒井	榎本	吉原	山本	森田	三好	西村	徳山	川田	内田	声田	安芸田
	利一	吐壺	辰来	辰子	たけし	四三郎	専平	りつえ	みつこ	晋	さとみ	絢子	泰子
敏	武												

季刊

川柳展望 天根夢草編集

作品出句10句 (天根夢草選)

年間誌代 4,960円 (〒共)

〒563-0102 大阪府豊能町ときわ台3-4-17

川柳展望社

電話 0727-38-1845

F A X 0727-38-6770

郵便振替 01150-2-49710

明けましておめでとうございます

川久保睦子	神夏磯典子	叶岡史風	柏木八重	太田とし子	大内朝子	宇野義江	上田登美子	井上白峰	池田寿美子
-------	-------	------	------	-------	------	------	-------	------	-------

中田あい子	高橋一枝	高杉千歩	鈴木政子	鈴木トヨ子	坂上高栄	小糸昭子	岸野あやめ	喜多佐津乃	籠島恵子
-------	------	------	------	-------	------	------	-------	-------	------

吐田公一	森扇帆	松本ただし	松岡久留美	町田達子	本間満津子	吐田純子	長谷川春蘭	野呂右近	野村美代子
------	-----	-------	-------	------	-------	------	-------	------	-------

連絡先

〒675-0101

加古川市平岡町新在家二〇〇六一八

吐田公一方

電話(〇七九四)二二一三六八一

城北川柳会

あけましておめでとうございます

翠 洋 会

柴田英壬子	清水絹子	小林周信	児玉蛙	古今堂蕉子	黒田真砂	栗谷春子	北田綾子	奥田みづ子	岡本久峰	梅田宣司	上田佳秋	指宿千枝子	井上源一	井上照子	石原靖巳	稲本凡子	高杉鬼遊	橘高薰風
-------	------	------	-----	-------	------	------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------

渡部さと美	米田恭昌	山本希久子	松永会美	堀江光子	古谷ひろ子	古川喜美子	藤井正雄	西出楓楽	長浜澄子	中村叡子	天正千梢	寺井東雲	津村志華子	谷口正義	田中正坊	高杉千歩	住谷石舟
-------	------	-------	------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------

頌 春

平成10年 元旦

川 柳 塔 唐 津 支 部

久保正劍	松本ち圭	浜本あよ	相葉あき夫	樋口輝二朗	林上公視	井上勝弘	宗崎弘實	岩崎久仁於	浜本晴翠	市丸夕ミ	山門幸夫	山門高明	山門口四郎	仁部虹汀	田口
------	------	------	-------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	-------	------	----

あけましておめでとうございます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

明けましておめでとうございます

い ず も 川 柳 会

会 長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ方

TEL0853-22-1068

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きやらぼく

木	神	門	鹿	大	岩	猪	石	石	池	足	青	
村	崎	脇	島	塚	崎	森	中	垣	尾	立	戸	
富	あ	晶		恵		す	時	花	保	由	田	
美	い	子	繭	子	遊	み	子	子	子	美	鶴	
子	こ					ゑ				子		
中	富	田	鷺	菅	白	塩	澤	さ	雑	小	木	
井	永	中	見	井	根	谷	田	え	賀	村	村	
ゆ	の	亜	正	知	ふ	八	千	や	美	て	春	
き	り	弥	子	子	み	重	春	え	世	い	枝	
	子					子				子		
矢	八	茂	三	光	政	吉	福	原	林	林	野	中
野	木	理	好	井	岡	岡	代	田			坂	野
満	千	高	寿	玲	日	文	天	紫	瑞	荒	な	弘
子	代	代	々	子	枝	葉	雀	布	枝	介	み	子
			子		子							

献 寿 平成 10 年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

第18回記念大会のご支援ありがとうございました。

お陰様で盛会になりました。会員一同こころより御礼申し上げます。

ことし第19回大会は、11月15日(日)開催の予定になります。

皆様のお力添えを祈念して何卒に、よろしく願い申し上げます。

山根茂	監査役 土橋はるお	大角正道	事務局 徳岡本丸	会計 中原みさ子	副会長 中原諷人	会長 森山盛桜	相談役 土橋螢	顧問 小倉利男
-----	--------------	------	-------------	-------------	-------------	------------	------------	------------

西川和子	中原汲香	土橋睦子	津村八重子	田村きみ子	黒田くに子	太田幸枝	大角幸代	岩崎みさ江	乾隆風	乾喜与志	石尾かつ乃
------	------	------	-------	-------	-------	------	------	-------	-----	------	-------

ほか会員一同	森明美	中澤正恵	谷口百合子	吉田孔美子	山岡久枝	安井博子	田中きみゑ	竹森富久江	国森武子	加藤公子
--------	-----	------	-------	-------	------	------	-------	-------	------	------

☆事務所 〒689-0405 鳥取県・鹿野町鹿野1279 中原 諷人方
電話 (0857) 84-2100

1 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日時の題	会場と投句先
堺川柳会	8日(木)午後1時から さかい(折句)・喜ぶ・茶・ぼちぼち	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	9日(金)午後1時から 元日・あかり・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 晴れ着・未来・虎	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から とことん・疼く・帯・新	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 朝・先手・座る	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から シンデレラ・決める・明るい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時から 朝・贈る・ハガキ	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(金)正午から 決意・仕来り・ふるえる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南大阪 川柳会	16日(金)午後6時から 水源・崇拜・スムーズ・滑る	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸和田 川柳会	17日(土)午後1時半から レモン・老化・若い・合図	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川柳 ねやがわ	18日(日)午前11時から 拍手・新鮮・福	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅東口からバス市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 成人・スープ・焼く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
京都 塔の会	22日(木)午後1時から 東・おおよそ・景品	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
富柳会	22日(木)午後1時から 白・盃・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池森子
東大阪 市川柳 同好会	24日(土)午後6時から 頑張る・マッチ・舞う・銀	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳 会	25日(日)午後1時から 面会・急ぐ・イメージ・「髭」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（3月号）

地名

雅号

きりとりせん

新郵便番号

同人・誌友 マルで囲んでください。

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。



作品募集

川柳塔 (8句) 橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句) 西 田 柳 宏 子 選
渺湖抄 (3句) 八 木 千 代 選
茴香の花 (3句) 宮 西 弥 生 選
吟 「シ ー ン」 指 宿 千 枝 子 選
約 「 和 約 」 山 海 友 熙 選
和 「 和 」 岩 本 笑 子 選
座 「 座 」 吐 田 公 一 担 当

3月号発表 (1月15日締切)

4月号
 課題吟 「 枕 」 「 陽 氣 」
 「 先 輩 」
 初歩教室 「 ソフト 」

本社1月句会

とき 1月7日 (水) 午後5時半
 ところ アウィーナ大阪 3階
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・14441
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
 ★短冊交換会 (1人3点以内)
 ★平成9年度月間賞杯授与・皆出席者表彰
 兼題 「 新 」 前 たもつ 選
 「 茜 」 神 夏 磯 典 子 選
 「 尊 貴 」 安 藤 寿 美 子 選
 「 翼 」 河 内 天 笑 選
 「 匠 」 橋 高 薫 風 選
 席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
 会費 500円 投句料 400円

本社2月句会 6日 (金) 予定
 兼題 「 湯 」 「 伸 び る 」 「 挨 拶 」
 「 盲 点 」 「 し ん み り 」

夜市川柳募集

第8回 「 大 」 高 杉 鬼 遊 選
 ハガキに3句 1月末締切
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺 川 柳 会

〒545
 大阪市阿倍野区三明町二丁目一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 編集兼 橋 高 薫
 発行人 美 研 ア ー ト
 印刷所 美 研 ア ー ト
 発行所 川 柳 塔 社
 電話 (06) 691 6914 四番
 振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

定価 六百元 (送料92円)
 半年分 四千元 (送料共)
 一年分 七千九百元 (同)
 平成十年一月一日発行



本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 **教育情報出版**

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928

イメージ・キーワード】
"Value for Human"
バリュー・フォー・ヒューマン

オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-9631